

# 革命の軍隊 、党の革命

10・11月闘争の運動＝組織論的総括

共産主義者同盟

# 革命の軍隊・党の革命

## 10・11月闘争の運動Ⅱ組織論的総括



……おが赤へ九軍団が、六日の戦闘において、この日の政治集点であった国鉄薄田に最大の部隊として登場したのは、同時多発の軍事方針が有利に作用したといえる、今回の闘争に対する政治的位置づけ、それにもなる軍事戦術が確定していたこと、そのことがトッキング、武装時点までなく格力を発見されない事態として現象したことをあげることが出来る。マスコミ形成の時代は終った。問題は、いかに有効に敵敵権力に打撃を予え、彼等をほんろうするかにある。幾多の欠陥、計画の未遂行を含むとはいえ、おが部隊の戦略配置と戦術は内戦の質を現時点の階級的成熟度に照らして実現せんとして目的意識に展開されたものであった。細密的武装闘争の時代における軍事戦略と党の軍団の展開は、まさしく党総体の力量の表現であり、現有の量をいかに戦力するかは党の革命の問題である。

（戦旗 十一月十一日号より）

序章

第一章 安保決戦で切拓く階級闘争の質

(I) はじめに（九回大会の意義と限界）..... 6

(II) NATO・安保粉砕闘争の世界性..... 7

(III) 世界党建設の課題（第二回国際反帝会議総括）..... 9

(IV) 反革命同盟と世界危機..... 7

(V) 日本階級闘争の到達点..... 9

(VI) 中央権力闘争とソビエト運動..... 11

(VII) 安保決戦と諸党派..... 13

(VIII) われわれの任務..... 15

(IX) ソビエト運動の現段階と党..... 21

(X) 安保決戦と地区労研（階級的労働運動論の整理）..... 23

(XI) 社学同の総括の一視点（山代論文の評価）..... 21

(XII) ..... 15

(XIII) ..... 13

(XIV) ..... 11

(XV) ..... 9

(XVI) ..... 7

(XVII) ..... 9

(XVIII) ..... 7

(XIX) ..... 9

(XX) ..... 7

(XXI) ..... 9

(XXII) ..... 7

(XXIII) ..... 9

(XXIV) ..... 7

(XXV) ..... 9

(XXVI) ..... 7

(XXVII) ..... 9

(XXVIII) ..... 7

(XXIX) ..... 9

(XXX) ..... 7

(XXXI) ..... 9

(XXXII) ..... 7

(XXXIII) ..... 9

(XXXIV) ..... 7

(XXXV) ..... 9

(XXXVI) ..... 7

(XXXVII) ..... 9

(XXXVIII) ..... 7

(XXXIX) ..... 9

第二章 安保決戦をめぐる階級情勢

第三章 安保決戦と党の革命

第四章 10・21の総括

第五章 11月闘争と同盟の任務

第六章 当面する「軍事」の政治的質

第七章 70年代を担いきる革命党へ

第八章 11月闘争とわれわれの軍事戦略

おわりに 11月闘争の総括にかえて

# 序 章

革命の軍事戦略——正確には、世界革命戦争Ⅱ世界的内戦の戦略の日本における今日の主要な環を、われわれは、帝国主義の侵略反革命戦争準備に対決する、党の正規軍を軸とした人民の軍団による 遊撃戦 の形成の問題として明らかにすることが出来る。

かかる軍事戦略、すなわち、その実現形態確定にまで煮つめられた世界(Ⅱ一國)同時革命の戦略は、いうまでもなく、あれやこれやの書齋仕事によって獲得されるはずもない。4・28闘争以降、政治の最高の表現としての軍事を組織しうる党が問われ、そのために当然、革命論と戦術・戦略及び階級形成論、党組織論の全てにわたる党の飛躍が要求され、その一応の成果としての九回大会を踏まえ、十・十一月闘争の嵐にさらされることによってのみ軍事戦略を獲得する条件が備わったのであった。

すなわち、基本的には全共闘や労働などの「ソビエト型組織」を牽引した「中央権力闘争・マッセンスト」の戦術をもってする「武装ソビエト運動」としての「軍事」を組織する「党」としてまとめられた九回大会の運動Ⅱ組織論が、政治路線の環としての「安保決戦」を十・十一月闘争において闘う過程で、自ら変革されざるを得ず、そうした変革そのものに踏んまえて、世界(Ⅱ一國)同時革命の戦略そのものが、その実現形態として世界革命戦争の軍事戦略にまで具体化したのである。

九回大会においては、赤軍派批判もそれ自体正しい観点からなされていたとはいえず、未だ原則としての政治的批判を完全に克服しきれてはいず、それゆえ客観主義の残滓をも許していた。この段階に留まる限り、赤軍派の如き「個人的決意」の集団(それがいかにテロリスト的心情をばらむとはいえず)に対する9・5全国全共闘での「軍事的敗北」も不可避であった。

いま、十・十一月闘争の渦中で、内戦の稲妻に撃たれることにより、われわれの血が肉が生々と脈動し運動Ⅱ組織論の具体化から軍事戦略へ結晶していったのである。

この過程は、かつて経験したことがないほど、多くの革命的同志がその政治的死のみならず肉体的死をもってあがなわねばならぬ過程であった。60年代を主導し、であるがゆえに世界史的転換点において最も厳しくその存在を問われ、ありとあらゆる苦しみをなめ、その価値観、生活体系の一切の根本的転倒を要求されたブントは、いま、70年代を主導する党として蘇生したのである。

ここに「革命の軍隊・党の革命」の表題で収録される諸論文は、まだ、「軍事戦略」そのものを完全に明らかにしたとはいえないが、しかしわれわれのこうした苦闘の踏みあとであり、副題に示されるように「運動Ⅱ組織論の総括」が中心になっている。

これらの諸論文は同盟、共青、社会学同と、今秋闘争を正規軍に牽引された軍団に参加して闘おうとする戦闘的労働者・学生のために執筆された関係から、「戦旗」「共産主義」など同盟の従来の公式機関紙・誌では未発表のものがほとんどである。

闘いの過渡的性格に由来する困難性とブルジョワナリズムによる意識的抹殺のために、「知られざる闘争」となった闘いも含め、十一月において内戦の部分的開始、革命の軍事戦略、革命の軍隊の基本骨格を打ちとったわれわれは、いま、これらの諸論文を全ての革命的左翼、戦闘的労働者、学生諸君に対して提起する。

われわれの苦闘は、諸君たちと異なる何らの基礎をも持たず、われわれの更なる苦闘われわれの党の革命は、諸君たちの主体的参画を描いてはありえないからである。

ブルジョワナリズムは、これまで反帝統一戦線を牽引してきたブントは赤軍派を生み出して自壊し、統一戦線は崩壊し、赤軍派は孤立化と過激化を深めて玉砕してゆきつつある、というお定まりの「ニュース」をつくりあげたがっている。

いうまでもなく、ブントが60年代階級闘争の最良の質をもった部分だからである。

だが、われわれの「自壊」が、内戦の開始へこのように攻勢的に踏みこんでゆく第一歩であるならば、ブントは十回でも、百回でも喜んで「自壊」し、そして革命されるであらう。

「革命の軍事戦略」——この概念は、日本階級闘争には過去一度たりとも登場したことがない。そもそも革命戦争はベトナムやキューバでのみ問題となるのであり、帝国主義国においては全く問題にならないものとされてきたのであるから。

従って、「軍事」が問題にされるべきとき、それはせいぜい大衆闘争の「戦術」の問題として目前の反革命との関連で、そして党にとっては「機能」の問題としてのみとりあげられるのである。いわゆる「蜂起は技術」という観点を矮小化して扱えながら、それはそれで独特の「くそリアリズム」に徹しながら一応の成果を上げたのが「10・21高田馬場」の中核派である。純粋技術の問題としては教訓とすべき点は多い。

これに対して、このような古典的理解を脱して、前段階決戦という観点から「軍事」を組織論のレベルにおいてつかみとろうとしたのがわれわれと赤軍派なのである。帝国主義国における革命もやはり戦争をもって遂行されるのであり、長期の合法・半合法闘争の積み重ねからあるとき電撃的に武装蜂起し権力奪取が行われるという図式が誤りであることを共通の把握としてもっているのである。

にもかかわらずわれわれと赤軍派の間にはこの「戦争」の性格に関する根本的な対立が存在する。赤軍派は、そもそもその「民族国家」の形成過程からして、諸階級層の分解・武装対峙が基底に存在し、その意味では恒常的「戦時」である「後進国」の戦争の図式をそのまま帝国主義国(諸階層分解が存在しながらも中央権力のもとに統合されている)にあてはめる誤りを犯し、(いわゆる〇〇戦争、十一月蜂起論)それらの総和、延長として世界戦争を考える二重の誤りを犯した(だから「敵が核ミサイルならこちらも」という発想がアブリアリに飛び出す)。このような観点からは、たとえ「軍事戦略」が語られたとしても、「戦術」と区別がつかないか、たかだか「大戦術」といったものになってしまい、「軍事戦略」なき「軍事戦術」はやはり大衆闘争の戦術に矮小化されざるを得ないのである。

組織論の主要な環が全人民的政治暴露であり、それをもって蜂起を準備する時代(レーニン「なにをなすべきか」の時代)としての「平時」でもなく、「主要な闘争形態は戦争であり、主要な組織形態は軍隊である」(一九三八年・毛沢東)と叙述される「戦時」でもない、この特殊な状況こそ、日本階級闘争の今日の舞台なのである。レーニンや毛沢東の教条的図式はそもそも環境が拒否するのである。

われわれは現段階を「内戦を部分的、萌芽的、潜在的にもった平時」として扱える。そして、この基礎を、平時より存在する階層分解が帝国主義ブルジョワジーの侵略反革命戦争準備とともに一部階層で武装対峙へ発展し、中央権力の統合力を部分的に後退させざるを得ないことに求める。だからこそ現段階の戦争は正規軍による遊撃戦なのであり、また総体としての平時におけるかかる軍建設、戦争遂行が不可避に発生させるテロリスト的傾向に対して、党が軍事を組織し、正規軍に領導された軍団の戦争遂行を基軸に、半合法闘争、合法闘争に新たな質をつくりだしてゆくこと、そのような党によって軍が組織されることが要求されるのであって、われわれの苦闘もまさにここにその核心が存在したのである。

腐臭を全世界に充満させながら死出の旅路を急ぐ帝国主義ブルジョワジー特有の「戦争」が両階級共倒れに至る「決戦戦争」以外にありえないのに対し、プロレタリアートの「戦争」はプロ独一世界プロ独の過渡的権力を媒介とした社会主義・共産主義への主体的、攻勢的な「持久戦争」としての世界革命戦争である。

いま、ブルジョワジーが、ベトナム、中近東、アフリカ、中南米で侵略反革命「戦争」をやり、帝国主義内部の潜在的内戦の開始を封じこめ続けることを通して「平時」を維持し続けようとしているのに対し、われわれは、大陸革命戦争に呼応し、その飛躍を促進する帝国主義内部の内戦を顕在化させ「戦時」をつくりだすことと、その戦争を戦闘することをひとつの任務として遂行することによって世界革命戦争の陣型を形成しうるのである。

そして、半合法段階における反帝統一戦線の牽引車が名実ともにわが同盟であったればこそ、わが同盟の党的転換が、その一挙手一投足が、「戦時」をつくりだし、内戦をきりひらき、革命戦争の陣型をつくりだす死活的な位置を歴史的に与えられているのである。

このような軍事戦略に無知な中核派は既に11月において「柳の下にドジョウはいない」とことを手痛く知らされ、テルミドール反動の危機を迎えているし、またクーデターの分派闘争の所産としての党Ⅱ軍の構造から軍を組織したことによる多数の貴重な教訓を党を媒介に軍事戦略として止揚できない赤軍派は、小戦闘ごとに右、左と路線をブレさせながら、権力のスパイを抱え、分散ゲリラへ解体されている。

だが、軍事とは、まさにかかる生々とした実践を通さない限り決して発展的に組織しえないものであるとするならば、諸君、いまこそ死者のかばねを越えて、ブントとともに進もうではないか。

# 第一章 安保決戦で切拓く階級闘争の質

（I）ⅠⅡ及びⅣの（2）Ⅰ（3）は九月二十日、Ⅳの（1）は十五日にそれぞれ執筆された。）

## I はじめに（九回大会の意義と限界）

67年10・8以来の階級斗争はめまぐるしい進展をみせた。既成の世界観指導理念は音をたててくずれ去り、いまや、われわれが国際主義と組織された暴力の下切り開いた地平に、社・共以外の左翼諸潮流が到達した。「先に立たない」構改革派が、世界革命をとさえ、暴力革命を打ちだしたことによって、政党間の同質化の過程は終了した。

69年になって急速に進行したこの革命的左翼の同質化の過程は何をもたらしたであろうか。この革命的左翼の同質化の過程は何よりも、全共斗運動がつくりだしたものであった。各大学全共斗運動の同質性が左翼諸潮流の同質化を生みだしたのであり、その意味では、67年10・8以来切り開かれた階級斗争の高次の質が定着したことを物語っている。

だが、真の革命政党にとっては、到達した階級斗争の諸段階に満足することではなく、自らの革命戦略によって階級斗争のより一層の飛躍を勝ちとることが要求されている。われわれ共産主義者同盟と、社会主義学生同盟が、69年に入っての諸党派の同質化のなかで、組織的停滞を余儀なくされたものは、この今日の真の革命政党の任務についての解答を出し切れていないことによる。

もちろん、この問題は、単にわれわれにつきつけられているだけでなく、あらゆる党派につきつけられている。そしてそれは単に日本の規模ではなく、世界的規模で問題が発生している。

赤軍派との分派斗争は、まさしく、この現代革命の問題をめぐり、安保決戦を革命の戦略から位置づけて闘うことをめぐって斗われた。わが同盟の現段階での政治的・組織的弱さは、この分派斗争を党の飛躍へと止場し切れず、同盟の分裂をひき起こしている。

に確立し世界同時革命の戦略を確定し、国際階級危機の相違を、客体と主体との総合的分析によって明らかにしてきた。そしてそのことを通じて、安保決戦における党の飛躍の内容を明らかにし、党の軍事問題に関する説明を行なった。

だが9回大会の弱点は、大きくわけて、ふたつの点に存在している。ひとつは国際階級危機の具体的な形態について明確にせず、したがって、「前段階決戦」がどのような要因によって成熟するかについての分析が不十分であったことであり、このことがひいては、日本における内戦の形態及び、軍事路線の確立をあいまいにし、軍事を組織する党への飛躍が党の任務方針にまで具体化しえない要因を形成している。

ふたつめは、綱領的視点の確立は、すでに二中委において明確にされたように、過渡期世界論の解明にとどまっておらず、革命の未来、世界プロ独一世界社会主義共産主義等々の規定に関しては解明されていないこともある。世界一国内同時革命と、世界同時革命というふたつの用語は、この革命の未来の規定をめぐっての論争として止揚されねばならない課題であった。この綱領的視点の不十分さは二中委において明らかにされ、その解決の方向が明確にされた。一方国際階級危機の形態についても、二中委において、反革命同盟の再編のよりめんみつな内容規定によってその解明の糸口をつかみとることができた。それゆえ、いま問われているものは二中委の討論をふまえ、これら二つの点を克服することである。

この二つの点の解明は何ら個々バラバラになされるものではなく、実は不可分の存在である。いな、むしろ、これらふたつを結合させて展開させることこそ、いまわれわれに問われている問題である。

そのためには、まずもって、現下の階級斗争の到達段階を明らかにし、階級斗争総体の総括プロレタリアートの階級形成の成熟度を明確にすることがせまられている。そして、それとの関連で、革命の戦略とそれに導かれた党の型（政治、組織指導の総括）を明確にし、そこからわれわれの任務方針を導き出すこともある。

これらの内容を進行しつつある国際階級危機との関連を位置づけるとき、安保決戦の政治内容が鮮明にされ、安保決戦に対するわれわれの戦略・戦術をみちびきだすことが出来る。そして最後に問われるものは、以上の作業によって明らかにされた現下の革命の任務をはたすべく、われわれがいかなる飛躍をなしとげねばならないかを具体的に明らかにすることである。

おこした。だが、われわれはこの分裂の過程において、今日の革命運動と革命党が直面している問題について、一層鮮明に説明することができた。国際階級危機を、世界的なプロレタリアートとブルジョアジーとの斗争及び、両階級内部の斗争の結果である反革命同盟の再編においてとらえるわれわれは、世界同時革命の戦略を「前段階決戦を革命の勝利へ」として具体化し反革命同盟の再編もたらす戦争を世界革命戦争として、反革命同盟の解体から世界プロ独を実現せねばならないことを明らかにした。

現代革命の基本戦略をこのように定め、そしてそれゆえ、自らを世界党として世界赤軍を組織する党へと飛躍させることなしには安保決戦は斗いぬけないのでありしたがって、今日の諸党派の停滞をもたらしているものは、この安保決戦における革命の任務の異常な重さによるものに他ならない。この重さは中核派が云うところの「肉を弾にする思想」や、また赤軍派のごとく、従来の戦闘組織をそのまま「赤軍」に組織編成し「世界革命戦線」なる組織をデッチ上げることによって決して突破することはできないのである。もちろん、この問題の所在すら理解できない構改革派は口先では勇ましいことを言っても依然として、第二戦線の役割しかはたしえないことは明らかである。そして「革命が困難である」ことを唯一の党派性に、突出部分に水をかけつづけている革マル派は、自らの革命のプレーキとしての役割を一尺鮮明にせざるをえないであろう。

こうした党派状況のなかで、まさしく9回大会の世界同時革命戦略に武装されたわれわれ共産主義者同盟と社会学のみが、安保決戦における階級斗争の質的飛躍と党の飛躍を勝ちとる可能性をもった唯一の組織として存在している。以上の観点から、われわれは、早急に全戦線をたてなおし階級斗争の現下の要請に応えねばならない。

われわれは、9回大会において、従来の諸論争を整理し、過渡期世界論を体系的

## II NATO・安保粉砕斗争の世界性

### (1) 世界党建設の課題（第二回国際反帝会議総括）

△はじめに▽

世界（一国内）同時革命の戦略の下、単一の世界党建設に向けて第2回国際反帝会議がもたれた。この会議の特ちょうは、赤軍派が会議に介入しようとして、その結果、わが同盟の党派斗争が国際的な舞台で展開されたことであった。昨年の会議はどちらかといえば、国際的な共同行動をめざした会議であったが、今年の会議はそれとはちがって、明確に、世界党建設を我々が積極的に打ちだした会議であった。したがって赤軍派との党派斗争が、国際会議の一つの焦点を形成したのであった。次に、我々は、諸国の党派に、世界党の問題を積極的に提起したことによって逆に、昨年の会議においては、不十分にしか得られなかった諸国の党派の成熟の度合をおしはかることができた。したがって、第2回国際会議（それはまだ統会中であるが）において総括されねばならないものは、世界党建設に向けてのすじ道を明確にすることではなければならない。

さらに総括されなければならない問題は、諸国代表の大衆集会への不参加である。この問題は国際部の会議運営のまずさ等々の技術的問題として総括されるのではなく、すぐれて、諸国の党派の成熟度の問題として明らかにされねばならない。

我々が提起した世界党への道は第2回国際反帝会議を総括する限り、いまだ遠い細い道である。だが、同時にそれは、そこにしか現代の革命がありえない、不可避の道でもある。我々は、第2回国際反帝会議を、世界党建設の観点から総括することによって、その到達段階を確認しておかねばならない。

### △世界党建設の歴史的教訓

#### レーニンの第3インター建設▽

言語と民族を異にした諸国の党派が、世界党へと結集していく過程は平たんな道ではない。その作業の大前提には、階級斗争の世界的な同質性が要求される。レーニンの第三インターは、世界戦争という、世界階級斗争の同質的的局面において準備され、ロシア革命の勝利によって、確固不動のものとして出発した。

今日、レーニンの時代とは異なり、世界革命にむけての階級斗争は、大きくわけて、三つの形態をとっている。それは後進国における革命戦争であり、帝国主義国におけるソビエト運動であり、「労働者国家」におけるプロ独復活運動である。こ

の三つの形態の中に、同質性を確認することは、いまだ三ブロックの階級斗争が後進国をのぞき、その質を全面的に展開しえていないこともあって困難である。その困難さは、ロシア革命の事前に、世界戦争の真ただ中で、自国政府の敗北のスコローガンをかかけ、その旗の下に第三インターを建設しようとしたレーニンのそうぐうした困難さと類似している。

一九一四年第一次大戦の勃発は、周知のように、第二インターナショナルをして祖国擁護の立場に立たせ、パーゼル宣言にみられたプロレタリア国際主義の旗は投げすてられた。レーニンは、いち早く、一九一四年十一月「第三インターナショナルの目前の課題は、資本主義政府に対する革命的攻撃のために、万国のブルジョアジに對する内乱のために、プロレタリアートの力量を組織し、政治権力を奪い、社会主義の勝利をもたらすことである」と呼びかけた。

一方このレーニンの呼びかけとは別に、第二インターの城内平和に反対する国際会議が一九一五年九月スイスのチンメルワルドで開かれた。結果した主要な代表はドイツ10人(後の独立社民6、スバルタクスブンド3、その他1)、フランス人2人、ロシア7人(ボルシェビキ2人、メンシェビキ2人、トロツキー、エスエル左派2人)、その他11人であった。この会議で、レーニンの主張は少数派にとどまらざるを得なかった。レーニンの第三インターの提案は、30票のうち7票を獲得しただけで、その内容はボルシェビキ2票、リトワニア、ポーランド、ドイツの一派の計3票とスカンディナヴィアの2票であった。このグループがツィンメルワルド左派と呼ばれたが、ロシア以外は見るべき勢力はなかった。

一九一六年キントールで開かれた第2回会議においても同様であった。レーニンとボルシェビキは依然として少数派にとどまったのであった。第3インターがその巨大な歩みを開始したのは、一九一七年ロシア革命の成功と、それにひきつづいた第一次大戦の終了とヨーロッパ諸国における革命情勢であった。第3インターは、一九一九年3月モスクワで第一回大会が開かれ、正式に創立された。そして一九二〇年7月の第2回大会においてその基礎を確立したのであった。レーニンが提起した第3回インターの規準としての帝国主義論に裏づけられた「戦争を内乱へ」という戦略と、ボルシェヴィキの党組織論は、ロシア革命の成功という事実を通して、ヨーロッパに拡大したのであった。一九一七年十月までの三年間は、第三インター建設にとって非常に困難な状態におかれたのである。

われわれの過渡期世界論と、世界(一國)同時革命の戦略は、いまだ、国際反帝会議において、世界の革命的左翼によっても消化されるには到っていないが、だこのことは従来のベトナム反戦の国際統一行動のもつ自然発生性によってより一層促進されている。それは一方で反ファシズム統一戦線への傾向をうみだし、もう一方に軍事力学的主義傾向をうみだすのである。

この過程は西独SSS・米SSS・BPP等の党派における分派斗争によって知ることが出来る。西独SSSにおいては、社民とは独自に労働者階級への結合がめざされ、一方政治路線においてもNATO・安保粉砕をかかげる部分が生れている。一方米SSSはすでに「戦旗」紙上で明らかにしたごとく、黒人運動の評価をめぐって二分裂しその左派は従来のリベラルから転じ、さらには革命党の問題を課題にのせている。

またBPPは、従来の一揆的暴動から党組織を軸とした反乱へとその運動を転換しつつある。

これら諸党派の分解再編は、ベトナム反戦の国際統一行動にみられた斗争が壁につきあたり、より高度の意識性が要求されていることを示すものである。その意味では世界党に向けての自然発生性が存在しており、世界党建設にとっての普遍的な国際的条件が拡大しつつあることを示している。

#### △世界党建設に向けての今後の課題▽

以上の展開で明らかなる如く、現代の国際主義派は、ベトナム反戦の国際統一行動のなかで形成された。そして、ベトナム革命戦争が、反革命同盟の強化と、米ソの取り引によって「和平」のペールがかぶされたとき、国際主義派はひとつの転換点をむかえ、党形成にむけての党派斗争が表面化した。

したがって、現代国際主義派がきつ当ったカベは、まず第一に、帝国主義の反革命同盟であり、第2はスターリン主義と帝国主義の取り引きであり、これらをどう突破するかが問われているのである。そして、この壁の突破をめぐる、党派斗争が行われているのである。

ここにNATO、安保粉砕斗争がもつ国際的性格の主体的根拠を求めなければならぬ。すなわち、現代の国際主義派がきつ当った反革命同盟の壁を打ち破る闘いとして、日本の安保斗争は、ベトナム革命戦争の質をひきついでたところの国際的性格をもっているのである。

さらに、反革命同盟の再編が、過渡期世界の危機のあらわれとして存在しているが故に、NATO、安保粉砕斗争の国際性は単なる主体的条件の面にとどまらず、帝国主義に対する攻面の点でも巨大な意義をもっている。すなわち、反革命同盟の再編は、それ自体固定的な平板なものではあり得ずその内部に帝国主義の利害対立

からといって、世界党建設が不可能になっただけでは決してない。われわれは、一方で在外支部を設置し、諸党派との交流をより深めるとともに、たとえ日本一国内においても、われわれが世界党への質を獲得しなければならぬのである。

#### △世界階級斗争の現段階と世界党建設の諸条件の成熟▽

世界党建設へ向けてのわれわれの党建設がまずもって自らを世界党の質へと飛躍させることにあることを確認してきたが、この確認を前提とし、第2回国際会議において明らかにされた世界階級斗争の現段階を分析し、世界建設のより具体的な方向を確定していかなければならない。

われわれは、世界党建設の条件たる階級斗争の国際的同質性の把握を、過渡期世界における帝国主義の不均等発展に規定された帝国主義列強の利害対立の激化がもたらす反革命同盟の再編にもとめた。この反革命同盟の再編過程はいうまでもなく第二次大戦後成立した米帝による一方的世界支配の動揺であり、一方、帝国主義列強における軍事外交政策の強化であった。

日本および西独の革命的左翼の形成は、この復活した帝国主義の軍事外交路線と対するなかで、スターリン主義の日和見主義をのりこえ、反帝斗争の指導部として、自らをきたえてきたのであった。だが、革命的左翼のこのような形成過程(六〇年前後)は、いまだ世界的なひろがりをもつことはできなかった。

米帝一元支配の動揺は、この方向からおとずれた。ひとつは帝国主義列強対立激化であり、反革命同盟再編として表現されている。もうひとつは後進国の階級斗争の激化である。(これら総体の分析は、九大報告に詳しい)後進国の階級斗争が民族の枠を打破し、大陸の解放として発展し、それはベトナム戦争によって拠点が形成され「二つ三つのベトナムを」という合言葉が生れたのであった。この米帝一元支配の動揺に直接ねざしたベトナム戦争は、それ故世界的なひろがりをもった。ベトナム反戦の国際的統一行動が展開され、この国際統一行動のなかで今日の世界の諸党派が形成されてきたのであった。

われわれはまず、これら現在の国際主義派が形成されてきた過程を明らかにすることによって、これら諸党派の内実を解明し、世界党建設へむけての思想斗争の軸を決定しなければならぬ。その観点より見るならば、これら現在の反スタ国際主義派は、いずれもベトナム反戦斗争のなかで形成されたことである。このことのもつ意味は、ベトナム戦争が反革命同盟の強化が、米ソの都合によって発展の途がとざされているとき、これら諸党派も、分解、再編の過程を歩まざるをえないことを意味している。

を内包している。そして、帝国主義列強は反革命同盟を維持しつつも同時に独自の市場圏の形成をめざし軍事を強化し、治安体制を強化せざるを得ないのである。これらなくずしファシズムは各国の階級斗争をより一層激化させずにはおかず、さらに反革命同盟の存在そのものが問われる時代にゆきつかざるをえないであろう。

NATO、安保粉砕斗争の階級的意義は、こうした帝国主義の反革命同盟とその再編運動に対決する斗争としてとりくまれることによつて、反革命同盟を解体し、国際階級斗争を、一層高次の質へと導くことにある。この反革命同盟再編の次の時代が、世界革命戦争の時代に他ならない。われわれは、第2回国際会議において、このNATO、安保をはじめとする反革命同盟粉砕斗争の階級的意義を鮮明にさせ、そのことによつて、国際階級斗争および諸党派のゆきつまっている地点についての解明を行わねばならぬ。

この点における明確な意志一致がなされたが故に過渡期世界論の講義と経験交流にとどまり、国際的諸党派との同質化を勝ちとることは十分にできなかった。

にもかかわらず、われわれは第2回国際会議に対する経験主義的対応の中で、以上の諸点を明らかにし、そのことによつて、世界党建設の具体的展望を獲得した。その意味では、国際部を中心としたわが同盟の第2回国際反帝会議は、その貴重な任務をはたしたといえる。(なおここではNATO、安保をめざす現代国際主義派の状態を解明することにとどめ、より具体的な総括については、国際部の提起に待ちたい。)

#### ② 反革命同盟と世界危機

##### △はじめに▽

われわれは、第2回国際会議の総括の中で、現代国際主義派のおかれている諸条件を明らかにし、そこから、NATO、安保粉砕斗争の国際的意義を世界プロレタリアートの主体的条件の面から解明してきた。その大わくは現代国際主義派が直面している課題が、国際的なベトナム反戦斗争に対する反革命同盟の強化に對し、いかに闘うかであり、反革命同盟の強化に對し、いかに闘うかであり、反革命同盟粉砕の国際反帝斗争をどのように形成してゆくかであり、その頂点にNATO、安保斗争があることである。そして日本における安保決戦の勝利的展開は、この国際反帝斗争の突破口を切り開くものであり、現代国際主義派をわれわれのもとに結集し、そのことを通じて中国派をけん引し、世界危機から世界革命情勢を切り開く主体的

条件を形成してゆくことが出来るというものであった。

そしていまわれわれが説明をせまられるものは、このNATO、安保、反革命同盟粉砕斗争がもつところの政治的、経済的意義であり、云いかえるならば世界(二国)同時革命にむけての、世界革命情勢にいたるいかなる過程として反革命同盟の粉砕の現段階での国際階級斗争を位置づけるかということである。

そのことは、まず、反革命同盟の再編がもつところの意味を明確にすることから始めなければならない。すでに、われわれは9回大会において、第2次大戦後の情勢の特質たる反革命同盟成立の要因について明らかにし、一方帝国主義の不均等発展となしなくしプロレタリアを分析するなかで、過渡期世界の主体的分析をなすと、反革命同盟再編を国際階級危機の前期的成熟として位置づけた。そしてこの国際階級危機を主体的に切り開くわれわれの戦略を、世界(二国)同時革命の下に、三プロレタリア階級斗争の結合として提起し、世界革命戦争の準備を開始した。これら内容の一層の深化として反革命同盟再編の内容がつかみとられねばならぬ。

#### △反革命同盟の再編と世界危機

すでに9回大会によって明らかにされたように、国際的な帝国主義の反革命同盟の存在は、世界階級斗争に新しい展開を与えるものであった。周知のごとく、反革命同盟をめぐっての帝国主義の矛盾の展開は、一見して、「侵略と反革命の不統一」のごとく現象しつつそれを統一した反革命同盟の再編として進められる。

すなわち、過渡期世界においては帝国主義の侵略はただちに、世界革命にむけての階級斗争を激化させ、かくてプロレタリア世界革命をせよとせよと帝国主義の反革命同盟が強化されてゆくが、一方帝国主義の反革命同盟の存在は、帝国主義列強の侵略政策の下への労働者、人民の統合へのシコクとなるのである。この過渡期世界における「侵略」と「反革命」のいわば論理的「不統一」は現実には、「反革命同盟の再編」として現象している。

この反革命同盟の再編は、帝国主義列強間の競争と妥協としてあるのだが、その内部矛盾は、帝国主義列強の軍事力の強化(具体的には核の保有)と資本戦争であった。そしてこの反革命同盟の再編は、史上三度目の市場分割戦がなしくしプロレタリアとして、IMFの枠の内から、それを否定する質をもって進行しはじめたとき、新たな意義をもってくる。すなわち反革命同盟の再編が、単なる再編という質から、反革命同盟の否定にまでつき進むような質をはらんで進行するからである。このメルクマルをわれわれは、勃興帝国主義の日、独の核保有におくことができる。核をもたない軍事力は本来的に地方軍にすぎず世界戦略を持つことはできない。

庄として作用し、一方、ソ連と米帝とのとりひきによって、国際反革命同盟が補強されることにより、困難な局面を迎えていることをみてきた。

そしてこのような局面のなかでNATO、安保を軸とする反革命同盟粉砕へとその質を高めつつあることをみてきた。この反革命同盟粉砕の闘いが、世界プロレタリアートの課題となるとき、そこに国際統一戦線の形成をみる事ができる。すなわち、権力支配の強化や戦争やインフレに反対する一国の斗争が反革命同盟粉砕という課題によって国際的に結合されるのである。

プロレタリアートの、反革命同盟粉砕の斗争は、このように国際的に結合されるをえず、そしてこのプロレタリアートの成長は、帝国主義をして、より一層の軍事力の強化、なしくしプロレタリアの強化をおし進め、そのことによって帝国主義の同盟は不安定にならざるをえない。

したがって、この帝国主義の同盟の不安定がブルジョア内部にファシズム的部分を生み出し、プロレタリアとの対抗関係を形成せざるをえない。こうした過程において、反革命同盟再編の内容が、反革命同盟否定の質をもって展開せざるをえない根拠があるのである。過渡期世界の危機は、このように進行し、前段階決戦へと煮つまってゆくのである。

#### △安保決戦の持つ意味

われわれが、過渡期世界の危機をこのように把握するとき、決定的なことは、現代国際主義派プロレタリアを強化することである。すでに明らかにしたごとく、反革命同盟が、ベトナム反戦斗争以来形成されてきた現代国際主義派の運動を抑圧しており、この反革命同盟が、現代国際主義派の共同の斗争目標になっているとき、日本における安保決戦の勝利的展開は、その斗争を通じて、現代国際主義派を牽引し、国際反帝統一戦線を形成する突破口となるであろう。

さらに重要な問題は、反革命同盟再編の新たな質がもつところの意味である。NATO、安保の再編は、ヨーロッパにおける西独の核保有をめざしたNATO、の介入と、そしてアジアにおける日本の沖繩、核を獲得することによる独自の市場圏の形成としてすすんでおり、そのテンポと性格をきめるものとして安保決戦におけるプロレタリアの斗争があることをみておかねばならない。

すなわち、七〇年代階級斗争をプロレタリアが登壇しえず、人民戦線派と帝国主義権力とファシズム派が未分化のまま、それゆえ帝国主義権力は安定し、最も危機的な形態において進行せざるをえないのか、それとも、安保決戦を勝利的に闘いぬくことによりプロレタリアを登壇させ、人民戦線派とファシズムを分断し、帝国主義権力が

い。げんに、70年代におけるNATO、安保の再編は独、日の核保有をめぐって焦点が形成されつつある。このことから、われわれは当面反革命同盟の再編として進行している帝国主義列強の対立が70年代において、その質を変えることであろうことを確認しておかねばならない。

この反革命同盟再編の新たな質が見返されることによって帝国主義の「抑圧」も新しい質をもって提起されてくる。すなわち、従来、帝国主義の軍事力の強化と独占資本支配の強化は、戦後議会制民主主義と市民社会を抑圧し、再編してきた。だが、反革命同盟の再編が単なる再編として進行している間は、この抑圧と再編(帝国主義的社会的再編)として進められたが、反革命同盟の再編が反革命同盟の「否定」内容をも含めた質をもって展開されようとするとき帝国主義列強にとっては、戦後民主主義と市民社会の抑圧と再編ではもはや満足できないのである。

反革命同盟「否定」は帝国主義一国による世界戦略の確立を意味しており、一国内部の政治体制が、そうした世界戦略で集約されることが必要であり、そのためには、帝国主義権力の超国家主義的権力への転換が要求されるのである。帝国主義は、70年代の階級斗争をこのように見返しているが故に、先行的権力再編としてのなしくしプロレタリアが必然化するのである。この反革命同盟再編の新しい質が、世界危機の内容である。

#### △反革命同盟再編とプロレタリアート

われわれは、9回大会において、われわれの戦略を「前段階階級決戦を革命の勝利へ」として明確にしてきたが、その後、問題になったのは、帝国主義の危機のどのような形態においてこの前段階階級決戦が煮つまるかということであった。この帝国主義の危機を恐慌や戦争として予測することは勝手であるが、それは見当はずれである。われわれはむしろ、今日の反革命同盟の再編が、反革命同盟「否定」の質で進められる時代に入ったことであり、そして危機の形態は、この反革命同盟の再編の新たな質とプロレタリアートの斗争との関連においてしか明らかになることは出来ない。それは何よりも、反革命同盟再編の新たな質がプロレタリアートの斗争との関連でしか形成されないことである。

われわれはすでに、帝国主義の軍事力強化と金融寡頭支配の強化に対する労働者・人民の反帝斗争が、その世界的規模での展開としてのベトナムをめぐる革命と反革命の戦争に対する国際反戦斗争を媒介にしてプロレタリア国際主義が世界的に復活しつつあり、現代国際主義派が誕生していることをみてきた。そしてこのベトナム反戦の時代はまさしく、反革命同盟が、帝国主義プロレタリアートに対する抑

ヘゲモニーをもちえない激動を革命的情勢へとおしすすめるのか、この七〇年代階級斗争の質を国際的にも国内的にもきめる闘いとして、今秋安保決戦があることを把握しなければならぬ。

### III 日本階級斗争の到達点

#### (1) 中央権力闘争とソビエト運動

##### △はじめに

われわれが日本階級斗争の到達段階を総括する視点は、何よりも革命の未来に規定された戦略及び運動組織論との関連で明らかにされねばならない。われわれは現代過渡期世界の革命を、世界党、世界赤軍による世界革命戦争を通じて世界プロレタリアとして指定しており、そして世界革命戦争を、ソビエト運動・プロレタリア運動及び革命戦争の結合として明らかにしている。この戦略的観点から今日の階級斗争の質を分析することによってはじめて、安保決戦におけるわれわれの獲得目標を鮮明にしるのである。われわれが提起しているソビエト運動という内容について諸党派は何ら理解していない。現在ソビエト運動はまだ実体化しておらず、それゆえ、従来新しい質の斗争が実体化するまでその内容を理解しえなかつた諸党派が、ソビエト運動に関しても依然としてそうであることは、何らあやしむに足りない。ところで安保決戦における中央権力斗争と、それと結合したマツセンストの具体化は、諸党派に対し、いや応なしにソビエト運動への理解をせまっている。

われわれが10年間の年月をかけて準備してきた、中電のマツセンストが単なる一揆にしか見えない諸党派の対応が、何よりもソビエト運動に対する無理解を示しており、そして、われわれの周到な計画によって、マツセンスト実現の展望が与えられたとき、諸党派は混乱し、解体せざるをえないのである。組合主義のワタ内での労働運動の戦斗化は、三池斗争を越えられず、指導部の組合主義によって、労働者の革命的エネルギーが無駄に発散させられ、資本によって集約されてしまつたことが確認されているが、そしてまた、国労・動労のごとき戦斗力のある組合が結局は資本の合理化攻撃にたえ切れないことが明らかになっていながらも、そのような事態を口先ではみとめながらも打開の方向について何らの路線をもたないものである。

新しい質の斗争は、最初は少数派の運動としてしか出発しえず、それゆえ多かれ少なかれ一揆の様相をおびることに対し、われわれは戦略的展望を階級形成論とし

のソビエト運動論として明らかにしているが故に、先駆的にマツセンストを開始出来るのに対し、戦略的展望をもてず、一方階級形成論においても組合主義的母ハンを残した諸党派が、マツセンストを「一揆」としてしか理解できないのはしごく当然といえる。だが、われわれの中央権力斗争と戦略的マツセンストに領導された安保決戦の勝利の展開は、諸党派が大衆によってのりこえられていることを証明するであらう。

われわれの日本階級斗争に対する総括は、したがって、ソビエト運動の成熟の条件を明確にすることに他ならず、そしてその作業によって安保決戦におけるわれわれの獲得目標を明らかにすることに他ならない。

#### △労働組合的団結からの決別▽

ソビエト運動の成熟の第一条件は、過渡期世界における帝国主義の支配様式にある。戦後世界における帝国主義は米帝を中心としたIMFと反革命同盟の大わくの中で、労働組合を体制内に組みこんだ議会制民主主義体制でもって出発した。独占資本の復活は、金融寡頭制支配を強め、官僚制と暴力装置を強化させ、議会が政治に占める役割は急速に低下していった。この議会の役割の低下の裏で進行したのは個別資本による労働者支配の強化であった。基幹産業における個別資本の支配の強化が労働組合の力を弱め、組合機関に立脚した社会党の基盤をほりくずしていった。「労働組合は社会主義の学校である」といったマルクスやレーニンの古典的テーゼは、もはやあてはまらなくなったのであった。そして日本の労働組合主義として語られた民同型の政治斗争も解体させられたのであった。

ところで、60年安保以降、日本資本主義は内的膨張から外的膨張へとその歩みを進めたが、それは日本の国内政治にも一大転換をもたらすことになった。ひとつには個別資本の支配が、単なる労務管理的支配から思想的支配へとその質をかえたことである。一方、議会の役割の低下は同時に、直接行動としての街頭政治斗争の激化をもたらしたが、それに対し、権力は、暴力ソウチの圧倒的な強化でもって応えたのであった。

こうした過程は、日常の海外侵略にむけての下部構造を形成するという観点から先行的計画的にかけられてきたのであった。60年安保以降の日帝のこうした質の攻撃に対し、社・共はもろろんのこと、革命的左翼も有効な反撃を組織しえなかったのであった。

だが、帝国主義の不均等発展が、帝国主義世界市場における力関係の変更を要求する地点にまで進んだとき、そこには歴史上かつてなかった帝国主義の危機がおと

#### △恒常的武装斗争の地平へ▽

すでに権力と革命的左翼、及び反帝統一戦線の関係は、具体的には破防法と自衛隊の治安出動が準備される段階に入り、67年以來つづいた70年代斗争への過渡期が終ろうとしている。70年代階級斗争をいかなる質で開始するのかが、69年秋の斗争にかかっていることはいまや明白である。それ故秋の斗争は、この70年代階級斗争を切り開くという戦略的展望のもとに組織されねばならない。

70年代階級斗争においては、すでに学生戦線において多数派運動として開始されている全共闘Mの質を労働者階級の中に波及させてゆくことがポイントである事は云うまでもない。すなわち現段階における労働者階級内部の少数派Mの活動方向について、それが組合主義的サークルの段階から脱皮する方向を明確にすることに他ならぬ。

それと同時に権力斗争の一時代（カンパニア斗争の中央権力斗争）から恒常的武装斗争の時代への移行期には、労働者階級内部の少数派Mもこの恒常的武装斗争と結合されてはじめて階級の意義をもつてくることが忘れられてはならない。今日党派によって荷われてきた中央権力斗争が恒常的武装斗争として展開せられ、そのうちに中央権力斗争を再生産する構造をつくりあげる（蜂起の機関の形成）ことが死活の課題である。

#### ② 安保決戦と諸党派

##### △人民戦線派の動向▽

先述したごとく、自民党は12月解散をにおわせ、人民戦線派とプロ独派の分断をはかりはじめた。佐藤訪米に煮つまる安保決戦を回避しようとし、すでに訪米阻止のスローガンをおろし、訪米抗議（実は激励）のデモンストレーションに切りかえた社・共の指導部の顔をたてるものが12月解散にはかならない。

社会党は12月解散にあわをくっている。都議選の敗北にひきつづき、秋の安保決戦後の選挙において、社会党は一層退潮せざるをえないことは明らかである。一方共産党は社会党の票をくいっつ、選挙で躍進することをねらっている。反戦青年委の問題で大もめにもめた総評は秋の方針を打ち出したが、それは11・13公労協一時間ストというものであった。社共とちがいが、その内部に反戦をかかえている総評は何らかの斗争をくまざるをえない立場におしこめられている。そして、とくに官公労

ずれたのであった。（われわれの過渡期世界論参照）

帝国主義の危機はまず世界的規模で、ベトナム戦争をめぐる開始され革命的左翼の斗いは、ベトナム反戦斗争によって大衆と結合し、そして、その結合形態は、60年安保における政治的統一戦線とは異なったものであった。それは実力斗争によって切り開かれたところの反帝統一戦線であった。この街頭実力斗争の常態化は、今日の帝国主義の政治支配と、それに抗するプロレタリアートの斗争を激化させている。そして帝国主義国におけるプロレタリアートは、飢や貧窮をバネに斗争に立ち上るのではなく、まさしく、その階級性を身につけ、ブルジョア政治に対する逆として斗争を開始されようとしている。今日形成されつつある反帝統一戦線は、それゆえ、労働組合がもつ価値観（組合的団結）とは異質な価値観によって結集しているのである。

#### △中央権力斗争の新たな飛躍▽

反帝統一戦線の質が、こうした新たな団結（それは革命に向けての意識性に他ならないが）に基礎をおいているが故に、中央権力斗争は、反帝統一戦線を領導する政治内容をもたらすことが出来たのであった。それは決定的な権力斗争の時代における権力奪取に到る労働者階級の斗争を、今日の段階から準備する斗いであると共に個々バラバラに展開されている多様な政治斗争をひとつの戦線に統一し、戦略的展望を大衆化してゆく斗いであった。さらに中央権力斗争は、権力と反帝統一戦線の正面戦であり、その中にたえず一時的にはあれ、権力を解体する可能性をひめているが故に、全人民的流動をひきおこし、ブルジョアジの軍事外交路線に対する大きな歯ドメを加えてきたのであった。

だが、中央権力斗争が一大カンパニアとしてとりくまれ、それによって反帝統一戦線を拡大してきたそのような時代は終りつつある。今、まさに恒常的武装斗争を展開しうる条件を、党派の全力量をあげて作り出さねばならないのである。何故ならば、実力斗争による権力に対する打撃、労働者階級の暴力の登場こそが、反帝統一戦線を成長させてきたエネルギーであり、同時に、労働者階級が、ブルジョア階級の暴力装置を打破る力量をたくわえなければならぬことが自明であるが故に革命党にとって武装の問題は、死活問題として提起されているのである。

というのには、今日の権力のなしくずしファシズム攻撃は、革命党の武装が自然発生的な段階に放置されたままであるならば、それは容易に武装解除されるであろうし、そうならば革命党の存在そのものが問われ、武装解除された党は自己満足しかなくなるからである。今日の武装斗争の問題は、革命党の武装解除を許すかどうかにおいて下部の反戦派の進出と、右からの労働運動への介入によって組織が集約力をもちえなくなり、分解の危機にたっている。

そして、これら現代の人民戦線派が、帝国主義権力にまさこまれざるをえない根拠は、まさしく反革命同盟の再編として進行している帝国主義の侵略と反革命と抑圧を理解しえず、とりわけ日帝がアジア侵略への礎として展望している沖縄基地の返還にニエアンスの相違はあれ、追従せざるをえないこととしてある。その意味では沖縄返還交渉をすることによって日帝はプロ独派と人民戦線派を分断させ、人民戦線派を自らの世界侵略に包括しようとしているのである。

とりわけ、日帝は人民戦線派、ファシズム派を自らの路線のもとにくみこみ、包括することによってプロ独派を孤立させ支配階級総体として、部分的には労働者階級をまさこんでアジア太平洋圏に独自の市場圏を形成しようとしているのである。われわれはすでに社共共闘（人民戦線派）を下部から解体するところの路線、反帝統一戦線と階級の労働運動を提起している。われわれは今秋安保決戦において中央権力斗争とマツセンストにより、ソヴェト運動の現実化をもちとり、自らをプロ独派として登場させ、そのことによって人民戦線派、帝国主義権力、ファシズム派を分断し、これらが入りみだれた階級斗争の活動を生みださねばならない。そしてその戦術的環が佐藤訪米実力阻止にあることはいままでもない。

#### △現局面における反帝統一戦線▽

従来各派のセクト的、またはプラグマチックな対応によって実体的には存在していながらも指導機関としては整理されていなかった全国反戦、東京地区反戦をめぐる再編成がすすんでいる。われわれにとっては、独自の政治斗争機関としての全国反戦青年委の全国体制と、一方における政党内統一戦線の形成は自明の問題であった。そしていますでに実体化している反戦青年委の斗争の飛躍が要求されているまさにそのときに「全国反戦再建」の問題が提起されていることは、皮肉なことである。俗物どもの頭は、一つの運動がまさに成熟し、他に発展転化しようとしているときになってやっと、その存在に気付くのである。

この「再建」の具体的な過程は、社会党が三派をふくむ反戦の排除を決定したことからはじめた。いわゆる三派をふくまない反戦などは存在しえず、それゆえ全国反戦の「指導部」（主体と変革、根拠地、等）は、社会党をえらぶか、それとも地区反戦をえらぶかの瀬戸ぎわに立たされたのであった。そして、全国反戦の「指導部」は地区反戦の独自性をみとめかつ、それをふくめた全国反戦「再建」にふみ



きり、人民戦線派をも含めたカンパニア組織としての全国反戦の「再建」にのりだしたのであった。9・15斗争は、地区反戦をふくめた全国反戦の再建のためのカンパニアとして、決定されたのであった。そして従来の六派(B・B・M・四ト〇、共労、社労)に解放、フロント、革マルが接近しようとしている。このように今秋安保決戦をひかえ、従来の反帝統一戦線は、これまでの実際の力量を組織的に定着させた。すなわち、政党内の統一戦線を中心に、学生戦線に於ては全国全共斗、労働戦線においては全国反戦として、カンパニア組織が形成されたのである。

そして、これらの反帝統一戦線をけん引する部隊として、B・B・Mの主力斗争部隊が存在しているのである。

だが、問題は、この統一戦線の再編過程が、われわれや、中核、M.L.のヘゲモニー(主に政治路線問題で)進んだのではなく、全く自然発生的に、要するに、従来の蓄積によって形成されていることであり、今秋安保決戦を闘い抜く質において再編されているわけではないことである。それ故、今秋安保決戦に向けてのカンパニア組織は、形成されつつあるけれども、安保決戦勝利の条件は、今後の活動に残されていることである。

こうした状況は、安保決戦におけるわれわれ革命的左翼の任務の重さによってもたらされている。すなわち、安保決戦は、まさしく、日本革命運動の転換点として存在しており、革命への展望を切り開きうるかどうか、すなわち革命戦略とそれの具体化が諸党派に鋭く問われているのである。

この重さの前に、革命戦略を抜きにした対応をすれば、それは二つの傾向を生み出す。一方は、プロ軍、M.L.、赤軍派にみられる傾向であり、後進国の革命戦争の無媒介的適用による党軍団という考え方であり、もう一方は、中核、共労等にみられる人民戦線左派の傾向である。われわれは、その任務が、どんなに困難であろうとも、この二つの傾向を克服する地点にしか、革命への道は存在しないことを明確にしなければならぬ。何故なら、無媒介なゲリラ戦は、権力によって粉砕されてしまふであろうし、一方の人民左派の運動は、いたずらに量を増加させるけれども、その質は依然としてゼロにとどまらざるを得ないからである。

#### △安保決戦と革命的諸党派

このように再編されつつある反帝統一戦線は、われわれも含めた、革命的党派のヘゲモニーが不在のところまで進んでいることを冷静にみとめねばならない。

何故なら、全国全共斗を誰よりも早くかかげたわれわれは、この全国全共斗形成にむけての大量の結集のなかで、党派としてのヘゲモニーを貫けなかったことを始

### Ⅳ われわれの任務

#### (1) ソビエト運動の現段階と党

△はじめは▽

第九回大会において、われわれは現代世界革命理論としての「過渡期世界論」の骨格を確立した。まずもってその内実を確認しておくならば、第一に、ロシア革命後の帝国主義国家、労働者国家、後進諸国家の並存世界たる過渡期世界において、はじめて世界革命の現実的条件が形成され、第二に、現代帝国主義の運動法則を軸に展開する過渡期世界の科学的解明と、世界階級斗争の質的發展の分析を通じて現代世界革命が、世界一國同時革命から世界プロ独一世界社会主義一共産主義としてのみ成立されうることを、そして世界プロ独への道は唯一、世界党一世界赤軍によって領導されることを明らかにし、第三に、以上の党綱領に結実すべき立場を、現代国際階級危機の性格と形態(帝国主義国における平時からの武装ソビエト運動、後進国革命戦争、労働者国家におけるプロ独復活運動という、三プロ独階級斗争の前期的成熟)に規定された三プロ独階級斗争の結合から世界革命戦争へと戦略化し、第四に、この戦略の現実的条件が、帝国主義的世界体制の危機の煮つまり(なしくずしプロ独化)侵略・反革命同盟への再編・強化に伴う不断の国際階級危機の醸成)によって与えられており、「戦争の前段階における階級決戦へ世界革命戦争を領導する」軍の構造が明らかにされ、第五に、現代過渡期世界における「前段階階級決戦一世界革命戦争一世界プロ独」を荷う党建設を、ソビエト運動(階級形成)との関係において、軍事を組織する党として具体化する運動・組織論の基礎が確定されたのである。

さて同志諸君。われわれは今や、秋の安保決戦を世界革命戦争の突破口としうるか否かの岐路に立っている。理論は革命の実践へと現実化しなければ革命理論たりえない。我々は今、革命党派としての真価を問われているのである。単に、戦略・戦術の優位性に安住するのではなく、秋の斗争に向けて、ソビエト運動を領導しうる革命主体を確立しなければならぬ。

#### △党一ソビエト運動▽

##### a 現代過渡期におけるソビエト運動

今秋我々が、中電マッセメントから中央権力斗争を全力をかけて準備し闘い抜くために、われわれの掲げる戦術「中央権力斗争一マッセメント」を、ソビエト

始めとして、全共斗に否定的であった中核派がドロ細式にのりこむ等、党派の対応は首尾一貫していないのである。

このことは、党派が全共斗の活動家をこえた問題提起をなしていないことあらわれであり、それは何よりも、今秋安保決戦における確固とした方針の欠如として、指摘されねばならない。

何故なら、大学解体の全共斗運動は、歴史的には安保粉砕の反帝統一戦線の力量と結合されてはじめて、ダイナミックな展開をみせたことがまず確認されねばならない。もちろん、学園斗争は、政治斗争とは相対的に独自の根拠をもって発生したものであるが、反帝統一戦線と結合した全共斗の出現によって、文字通り、学園斗争と政治斗争が結合される条件が整えられ、そのことによって反帝統一戦線の構造と質を高めたのであった。したがって政治斗争不在の全共斗運動は奇型であり、早晩腐敗してゆくのである。

このことを現在の把握するならば、今日政治斗争の展望は安保決戦の方針として語られねばならないし、この内容を欠落した提起は、およそ政治を語ったことにならないのである。

むしろ現在の局面は、党派の指導力が欠落することによって、大衆の昂揚が去るような局面ではない。むしろ大衆の昂揚は、秋にむけ、ますます拡大してゆくであろう。9・5全国全共斗の万余の大衆の結集は、このことを証明している。にもかかわらず、この最大の昂揚の延長線上に安保決戦を期待することはできないのである。

いま、今秋安保決戦でのわれわれの戦術の飛躍が要求されている。階級斗争の質的転換は決定的局面での戦術によって獲得されねばならないのであるがこの時の戦術問題は現段階での党派の存在基盤そのものをゆるがせるような深い内容をもっているのである。

現局面での党派のヘゲモニーなき大衆の昂揚の内実はこのようなものである。すなわち安保決戦にむけての戦術の飛躍が党派の飛躍として問われており、そしてこの党の飛躍をぬきにして、安保決戦を語りえないが故に、先の如き党派状況が存在しているのである。したがってわれわれの分派斗争はこうした現局面を切り開く内実を獲得してゆく方向性をさし示さねばならないのである。

運動論のより詳細な内容規定によって確定する必要がある。

①ソビエト運動とは、労働者階級が自らを支配階級として形成し、プロレタリア権力へと飛躍する運動であり、ソビエト運動論はこのプロレタリアの階級形成の道すじを、その運動形態・組織形態の展開過程として明らかにするものである。労働者は、全面的商品社会たる資本制生産社会において、自分の所有する唯一の商品(労働力)を売り、資本によって生産過程に組織されることによって、自己の持つ生産力を物質化し、社会物質的荷い手となる。だから、労働者は社会の物質的荷い手としては社会的・組織的存在でありながら、私的労働力商品所有者というブルジョア的存在形態をとる。即ち、労働者は自らの内に「社会性・組織性」と「私的・ブルジョア的存在形態」という矛盾をもつ存在であり、従って、ブルジョア階級との階級斗争の過程でプロレタリアは、同時に自己の内なるブルジョア性と闘い、自らを階級へと形成し、支配階級へと成熟していくのである。この階級形成過程における斗争組織の解体・再編による絶えざる発展は前衛党を媒介として、その指導によってのみ可能である。プロレタリアの階級形成はその内的矛盾の発展を現実的に促進する党を必要とする。だが、われわれが注意すべきは、このプロレタリアの階級形成のなかから、その直接延長上に党が建設されるのではないという点である。ソビエト運動が開始される権力斗争の時代には、運動そのものが前衛党を要求する。だが、この前衛党は独自に組織されねばならない。ソビエト運動とは区別され、分離されて、建設されることによって初めて、党は、ソビエト運動と関係しその内において同時に外にあるものとして、運動を領導できるのである。

②われわれはソビエト運動を提起することによって、プロレタリア革命の形態としてソビエトを再規定する。第三世界の革命の型とは異り、現代帝国主義列強においてはプロレタリアートの階級性が斗争の基軸となるのであり、しかも過渡期世界の止揚(世界プロ独)の基軸が帝国主義打倒であるが故に、プロ独権力形態の萌芽一ソビエトが革命の型でなければならぬ。

③ソビエトとは、形態的には、労働者・農民・市民・学生の地区評議会であり、質的にはコンミュニオン四原則が貫徹し、労働者人民大衆の武装によって樹立された地区政治権力であり、プロ独の萌芽である。従ってソビエト運動は、武装することによってのみソビエトへと前進しうるのである。だが更に、地区ソビエト運動は、決して単独に地区ソビエト権力へ至ることはない。分散的ソビエト運動が統合され、権力中枢解体からプロ独樹立に至ってはじめて、地区ソビエト権力が実体化

されるのである。ところで現代過渡期世界においては、プロ独は世界プロ独として樹立されないのだから、そこに至るまでは長い内戦の過程が横たわるのであって、武装せるソビエト運動とは、この内戦（恒常的武装斗争）における潜在的二重権力状況を形成するのである。

④現代過渡期世界においては、第一次帝国主義戦争を経て勃興したソビエト運動（ロシア革命、ドイツ革命など）の質が、「平時」から発生する条件が存在する。ドイツ革命の場合には、敗戦によって国家権力機構が解体し、資本家が動揺し、しかも統制機関に転じた労働組合は、労働者の日常要求をも組織しえず、組合の枠をこえてあふれ出た労働者大衆の自然発生的の高揚が、ソビエト形態を形成したのである。ロシアの場合も同様に戦争を媒介して自然発生的にソビエト運動が登場している。だが、ドイツ革命の敗北とロシア革命の勝利という決定的な相異から、われわれが教訓とすべきなのは、ソビエト運動がソビエト権力へ高まるためには、地域的・分散的・散発的のソビエト運動がいかに武装したものとしても、それだけでは決定的に不十分である、ということである。一つは、武装蜂起が全国的・系統的に組織され、かつ計画された戦術による攻撃型武装中央権力斗争が不可決であり、そのためにはソビエト運動の戦略的形が必要であり、一つにはソビエト運動の自然発生性と対決し、権力斗争の質を常に高めていくための政治指導部が必要であり、一つにはこの自然発生性へと絶えず押進していく政治諸党派との激烈な党派斗争を展開しうる密集した政治的・軍事的組織がソビエトの内部に確立されていることが必要である。即ち、ソビエト運動の時代が開始されるや、強固な団結と非合法的に組織された共産主義者党が必須の条件である。

分離されたソビエト型組織は、古典的帝国主義時代においては、戦争という政治的・経済的・社会的激変の中から、自然発生的に形成されたのだが、現代過渡期世界においては、これが「平時」から形成される諸条件が存在する。

戦後米帝の経済的・軍事的一元の支配体系が、一方における帝国主義諸列強の不均衡発展となしプロック化、地方における後進諸国のモノカルチャーへの固定化と軍事的支配への自然発生的解放斗争の高揚、とりわけベトナム革命戦争の勝利の展開によって根拠から動揺し、ドル危機から帝国主義世界体制の支柱たるIMF体制の根底的危機をもたらしている。英帝、仏帝の没落と米帝の相対的地位の低下、日帝・西独帝・米帝を軸に、帝国主義世界体系を全面的に再編することを強制される。現代過渡期世界におけるこの再編過程は、激烈な市場分割戦を、侵略・反革命同盟の統一として実現しなければならず、これは一国的には、

争指導部の地平を越えることができなかったのである。今や、本格的なソビエト運動が開始され、党派をこえた自然発生的な大衆の武力斗争の段階に突入したのであり、同盟は、指導の質を問われている。ソビエト運動期における党の指導は、自らを共産主義的団結に基づく密集した組織に高め、大衆斗争と分離することにより、より広範な基盤を持つ自然発生的な大衆斗争と結合しうるものとならねばならない。同盟をソビエト運動に解消してしまうというメンシエビキの誤りを犯してはならない。そうでなくて党主体を確立し、独自に形成することによってのみ、ソビエト運動を領導し、その自然発生性を克服しうるのである。

### c 現段階におけるソビエト運動

日帝ブルジョアの環太平洋侵略反革命同盟の盟主化（史上三度目の市場争奪戦と帝国主義世界体制再編と権力形態のなし崩しのファシズム化）に規定され、個別的反合斗争、反戦政治斗争、政策反対斗争、学園民主化斗争、等へと突出する広大な大衆の自然発生的基盤が形成されている。

労働者の日常要求、個別経済要求すらも組織しえない帝国主義的労働組合、勤労大衆の経済要求、政治意識を組織しえない既成政党、学生の自治意識を圧殺するボツダム自治会、未組織労働者の日常要求を組織せず収奪されるがままに放置している組合や政党、在日朝鮮人の危機意識を抑えこみ、農民、漁民の存在基盤の略奪を放置したままに疎外している既成諸組織、等々の組織の枠を越え、自己の斗争形態を創出して闘う部隊が全階級、階層にわたって自然発生的に登場してくるのであるここにソビエト運動の萌芽があるのである。

この自然発生的な大衆基盤から第一次的に形成される運動は、配転首切りに対する反合斗争のような個別経済斗争の地域共闘運動であり、個別政策反対や生活防衛の地域共闘運動であり、反戦諸組織による反政府運動であり、個別学園斗争である。だがこうした斗争は個別領域に留まりえず、たえず反権力斗争へと転化せざるを得ない。何故なら、第一に、現在の権力形態に規定されて、国家の暴力装置（機動隊）と対決せざるをえず、第二に、個別斗争としては、決して勝利しえないことが大衆的に明らかになっており、第三に、植田菌車や那須電機斗争で経験してきたように合理化が先進的労働者への政治圧力（レッドバジー）の口実として提出されてくること、多岐からであり、第四に、先進的労働者による武力斗争が、社会的に国家の暴力の本質を暴露しているからであり、第五に、全世界的階級流動が現実化しているからである。しかしながら、これらの萌芽的ソビエト運動の直接延長上に、ソビエト権力を展望することはできない。第一に労働運動は、たえず反権力斗

争を内包しながらも、その斗争組織そのものが、個別的経済的斗争を越えうる組織として不十分である。何故なら、労働はできるだけ緩やかに結合された、広範な大衆の結集が必要であり、非組織・反組織・反資本の多様性こそが特徴であり、前衛党の直接介入は逆に労働の生命力を枯渇させる危険をもつ。労働を、われわれはまず階級形成の第一歩反帝統一戦線の第一次形成と位置づけよう。第二に反戦青年委は、実質的にこの二年間の階級斗争の最も先進的な労働者部隊であったが、しかしそれは反面で、戦斗集団化することによって勤労者・市民を含めた広範な大衆の政治意識を結集しえず、労働者に疎外された部分を「ベ平連」等に結集させてしまったのである。とりわけ非合法法が日程にあがっている現在、これまでの反戦メンバーは、自らを飛躍させ、新しい政治的・軍事的組織に結集する事によって、反戦全体を大衆化し構造を二重化させる必要がある。又、反戦は政治斗争組織として、常に反権力斗争へ転化しうるが、やはりその直接延長上に、反戦まるごとをソビエト権力機関へと高めることはできないという意味で、自然発生的に規定された組織である。第三に、全共闘運動は、学生のおかれたブチブルインテリ性という特殊性に規定されて、個別民主化斗争から、大学及び学生存在様式のブルジョア性の批判、更にブルジョア社会批判へと深化しうるが、それは社会革命を先行させることになる。だが「帝国主義大学解体」という社会革命の極限的スローガンは、政治革命によってのみ成就されるスローガンでありそのためには、一方でたえず自らを政治斗争部隊へと再編し、他方で全人民的政治斗争を組織する組織者として、階級斗争の全戦線に登場しなければならぬ。とりわけプロレタリアとの結合により、自らを階級戦士に鍛え上げるべきである。

以上、現段階におけるソビエト運動の第一次的階級形成の特質を明らかにしたが、とくにそれらは、そのままの延長上にソビエト権力へと発展していくものではないことを銘記すべきである。ここにおける党の指導は、このソビエト運動の萌芽をたえず形成しながら、同時にその自然発生性と対決し、より高度な政治的質を持った組織へと解体再編するという困難な指導である。この指導こそが、共産主義青年同盟、社会学の担わねばならないものである。

### b 労働運動・全共闘運動・反戦青年委・全学連のソビエト運動（階級形成）における位置付け

現代帝国主義の全体制的再編と権力形態のなし崩しファシズム化が、一切の既成の組織（民主的行政組織、議会、司法機関、労働組合、既成政党等）とは別個の独自の斗争組織を不断に形成し自然発生的に新しい斗争形態を生み出し、しかもそれらが常に反権力の志向性を有しており、そこに平時からのソビエト運動の条件がある。現在のには、それは労働運動であり、全共闘運動であり、その他諸々の労働運動であり、これをソビエト運動の第一次的・萌芽形態と規定しうる。

だがこうしたソビエト運動の萌芽の発生は、一方で確に、現代過渡期世界における帝国主義の客観的危機に根拠をもつが、他方では何よりも、反帝派全学連と反戦青年労働者の先駆的街頭実力斗争によって切り拓かれた地平である。だがすでに、旧同盟のスターリニズムからの組織的分離による登場が、ハンガリー革命に象徴される全世界的な反スターリニズムの自然発生的に根拠づけられたものであったとすれば、その内、ソビエト運動の時代における党派性を内包していたのであり、全学連、反戦はまさしく同盟と同質の大衆組織として登場したのだ。だが同盟の指導が全面的にこれらの大衆運動から行なわれることにより、同盟そのものが大衆斗

争を内包しながらも、その斗争組織そのものが、個別的経済的斗争を越えうる組織として不十分である。何故なら、労働はできるだけ緩やかに結合された、広範な大衆の結集が必要であり、非組織・反組織・反資本の多様性こそが特徴であり、前衛党の直接介入は逆に労働の生命力を枯渇させる危険をもつ。労働を、われわれはまず階級形成の第一歩反帝統一戦線の第一次形成と位置づけよう。第二に反戦青年委は、実質的にこの二年間の階級斗争の最も先進的な労働者部隊であったが、しかしそれは反面で、戦斗集団化することによって勤労者・市民を含めた広範な大衆の政治意識を結集しえず、労働者に疎外された部分を「ベ平連」等に結集させてしまったのである。とりわけ非合法法が日程にあがっている現在、これまでの反戦メンバーは、自らを飛躍させ、新しい政治的・軍事的組織に結集する事によって、反戦全体を大衆化し構造を二重化させる必要がある。又、反戦は政治斗争組織として、常に反権力斗争へ転化しうるが、やはりその直接延長上に、反戦まるごとをソビエト権力機関へと高めることはできないという意味で、自然発生的に規定された組織である。第三に、全共闘運動は、学生のおかれたブチブルインテリ性という特殊性に規定されて、個別民主化斗争から、大学及び学生存在様式のブルジョア性の批判、更にブルジョア社会批判へと深化しうるが、それは社会革命を先行させることになる。だが「帝国主義大学解体」という社会革命の極限的スローガンは、政治革命によってのみ成就されるスローガンでありそのためには、一方でたえず自らを政治斗争部隊へと再編し、他方で全人民的政治斗争を組織する組織者として、階級斗争の全戦線に登場しなければならぬ。とりわけプロレタリアとの結合により、自らを階級戦士に鍛え上げるべきである。

以上、現段階におけるソビエト運動の第一次的階級形成の特質を明らかにしたが、とくにそれらは、そのままの延長上にソビエト権力へと発展していくものではないことを銘記すべきである。ここにおける党の指導は、このソビエト運動の萌芽をたえず形成しながら、同時にその自然発生性と対決し、より高度な政治的質を持った組織へと解体再編するという困難な指導である。この指導こそが、共産主義青年同盟、社会学の担わねばならないものである。

67年10・8にはじまる激動の二年間は権力斗争への過渡期であった。「プロレタリア国際主義と組織された暴力」の直観的スローガンが同盟の九回大会において革命戦略化された前段階蜂起「世界革命戦争（内戦）」前段階決戦を通じて世界プロ独の樹立へ領導する要は世界赤軍としての党の正規軍である。我々は反戦行動隊、全共闘行動隊の軍団化を急がねばならない。そしてそれらの武装自衛を中央権力斗

争に牽引するものこそ党の正規軍(世界赤軍)である。「平時におけるソビエト運動は、この正規軍一地区軍団の組織化によって現実化されるのである。

ソビエト運動におけるマッセンストの位置

a マッセンストは革命から分離できない。

ローザ・ルクセンブルグは一九五〇年のロシア革命を総括して「マッセンストとはプロレタリア大衆の運動方式であり、革命のなかでのプロレタリアートの斗争の現象形態である。」と述べた。その内実は、第一に、マッセンストが一個の行為ないし個別的行動と考えるのは全くの転倒であり、それはむしろ、幾年にもわたる階級斗争の長い道程をあらわす指標であること。第二に、マッセンストは、労働組合の議会代表部(社民政党)の指導、組合の指令による「示威的」ゼネストとは異なり「斗争的」(攻撃的)ストであること、第三に、こうした斗争的ストライキの時代とは、まさに革命期の嵐を呼んだ時代であり、運動はたんに経済斗争から政治斗争へと方向に進むだけでなく、逆に、政治斗争が拡大し、明確な形をとり、強化されてくるにつれて、経済斗争も後退するどころか、むしろ政治斗争と歩調を合わせて拡大し、組織をかため強化されていくのであり、だから、第四にマッセンストは、革命の現実性が迫りつつある時代の、プロレタリアートの階級的行動形態なのである。即ち、マッセンストは××反対といった個別的的政策反対の示威ストではなくて、たとえ個別斗争から出発したとしても、すでに全面的な反権力を内にもち、すべての社会的基盤を休みなく粉碎し、解体し、移行させつつける不断の斗争形態であり、不断ブルジョア権力との全面的対峙関係を形成し、強化し、権力奪取とプロレタリアへの質を内包する斗争形態である。だからマッセンストは革命と切りはなして考えてはならない。

マッセンストを自然発生性としてのみ扱ったローザの誤りについては、ここでは述べない。というのは、革命を解釈するのではなく実践しようとしているわれわれは、すでに「大会決定」や「9・7集会提案」の中で、理論的、実践的にローザを止揚したからである。だが、中電マッセンストから中央権力斗争へ進撃せよ!とスローガン化した今秋安保決断の戦術を具体化するにあたり、「マッセンストは革命斗争である」という一点は、はっきりと確認しておかねばならないのだ。このきわめて単純な命題のなかに真理が秘められている。ここに一切の鍵がある。これを理解しない党派は、何ら革命党派ではない。

今秋安保決断が、米・日・独・ソの地上最後の反革命体制と世界プロレタリア独現に向けてのわれわれの世界政策の展開との、全面的対峙関係形成の突破口であるにもか頭武装斗争が無媒介に並列され、局面が尖鋭化してくるにつれて、この階級形成論なき方針的矛盾が組織的な形をとって現われざるをえないだろう。宣伝による大衆の結集が党組織論にまで肉化せず、無限定な対象に対する市民主義的、ベッタリ合法主義的な大量宣伝と、スターリン主義的党組織が分離したままであるが故に十・八以降果してきた役割をもちや果しえなくなってきた。これらの理論と実践は急速に過去のものとなりつつあるといえよう。

第四インターの破産は、更に明白である。そのスブスブの合法主義組合主義、職場主義は、今秋安保決断においてむしろ反動的役割を果しつつあることが、12集会で暴露された。日帝ブルジョア権力のなし崩し的ファシズム化の歴史の必然性を解明できず、民同の解体と再編過程で組合内反戦派としての自己の基盤を切り崩され、今またわれわれの提起するマッセンストに大衆の基盤を切り崩され、生産原点でのゼネストという教条主義的戦術に固執することによって何らの展望をも切り拓けず「左右の日和見主義」と泣き言を連ねながら、ますますセクト的対応におちこんでいる。かれらがゴリゴリのセクト集団としてわれわれに敵対してくるのは、まさしく自己の党派の解体の危機を感じているからに他ならない。12集会パンフの中で秋の斗争方針について一言でも聞くべき内容があったらどうか。「労働者大衆が、ストライキを組合指導部の指令に従って単に受動的な参加者として闘うのではなく、斗争のヘゲモニーを下部大衆の手に官僚的指導部から奪い返し、自らの指導部を積極的に強制し、必要とあればこれをとりかえる意志と決意を下部労働者の間に飛躍的に強化しなければならぬ」という極めて困難な、しかし避けることのできない任務に直面している。「この中には、全く当り前な、その意味で一般的な事柄から、いかに誤った結論がひきだされるかの見本が示されている。斗争のヘゲモニーを大衆の手に奪い返すというのは当り前のことだ。しかし、指導部を強制し(スタを斗争に立ち上らせるといふこと)」「必要とあればこれをとりかえる意志と決意を大衆の間に強化する」という困難は、まさしく革命を遂行すること以上に困難なことなのだ。何故ならそれは日帝の支配再編に係わってくる根底的な問題だからであり、たとえ「必要」があっても大衆の意志と決意で指導部をとりかえることが現実にはできず、また、たとえ一分会、一支部では可能であっても総体としては決して到達されえない事柄であるからなのだ。およそ不可能な方針を出しておいて、自分で一生懸命に「困難だ、困難だ!」と叫んでいる図は、漫画ほどの真実味もない。だが、ここでの決定的な誤りは、労働組合的団結をプロレタリアートの革命的団結と取り違えているという点であり、プロレタリア英雄主義を一切理解しえない点にあるの

かわらず、七〇年六月にゼネストを!、今秋佐藤訪米阻止のための時限ストを!、という方針しか出せない社民、民同は、すでに半ば権力に解体されてしまっている自らの姿を暴露しているにすぎない。

b 戦略的マッセンストをなせわれわれは中電マッセンストを提起するのか。

「革命的現在」と自称する諸党派がわれわれの提起する中電マッセンストに敵対しはじめている。右翼日和見的、組織防衛至上主義に転落した革マル派は論外としても、中核、社青同(左)、第四インター、共労等、この間の9・12集会をめぐって明確にわれわれに敵対してきた党派は、すべて現代過渡期世界における国際階級危機の性格と形態(「戦旗」9/5日号・「9・7集会提案」を参照)に盲目であり、帝国主義国内部に形成されている権力斗争(武装ソビエト運動)の質を理解せず、運動を質的に展開させようの方針を提起できないままに、大衆の自然発生性に押され、権力との攻防の局面毎に、一喜一憂するというプチブル性を多分に残している。いかえれば、今秋斗争がどのような世界的意味をもった「決戦」なのかに盲目であるが故に、一切の展望を欠落させざるをえず、われわれの「中電マッセンスト!中央権力斗争」の提起の前に恐れおののいているのである。かれらの反対の理由は明白である。この中電マッセンストを貫徹する中で、自己の理論的破産が宣告され、更には党派の解体にまでつき進まざるをえないことを知っているからである。では、かれらの理論的破産とは何か。それは第一に、プロレタリアートの教条的、固定の把握の誤りであり、そこから出てくる生産点主義、職場主義がそれであり第二に、プロレタリアの労働組合的団結から階級的団結への道すじを明らかにできず、それを媒介する斗争形態を創出することができず、常に政治斗争と経済斗争を二元的にしか把握していない点にあり、第三に、組織的には日本型社民、民同の戦斗性に幻想を抱き、左派労働者を組合内左翼パネとして組織することによって、常に反幹部、反官僚、反民同といった消極的な組合政治の枠内プロレタリアを押しとどめる役割を果し、労働者の階級性、戦斗性を民同の補完物に押し込めてきた点にある。中核派に典型的に見られる如く、一方における生産点主義、他方における街頭主義、という分裂は、4・28斗争までは一定の自然発生性を呼びおこしたが、権力の先行的、全面的攻撃との対峙関係が形成される段階に入るや、必然的に生産点での組合主義と街頭武装斗争の分裂が戦斗的労働者の内部における分裂をひきおこし、決意主義的に街頭実力斗争に参加するか、組合内左翼反対派として民同の枠内にとどまるかのいづれかしか道が残されない。現在、今秋安保決断を前にして中核派の内部矛盾が顕在化しつつあり、生産点でのパリスト、山ネコストの方針と街

だ。フランス五月革命の敗北から何一つ学んでいないという他あるまい。かくして今秋安保決断のかれらの実践の方針(無方針?)は、次のような無惨なものとなり下ってしまう。すなわち、「職場反戦を中心に結集するこの戦斗的な青年労働者の隊列は、今日、いくつかの組合において、秋の政治ストライキの方針を指導部に強制することに成功している。総評の拡大評議会は、11月13日の全組合一時間以上のストライキを決定すると伝えられる……戦斗的労働者、職場反戦は、労働者大衆の政治的自覚を強化しつつ、この戦術の最大限の拡大強化をもちとらねばならない」と。要するに労働者大衆に宣伝して「一時間以上のスト」を指令するよう指導部に強制する(お願ひする?)ということにすぎない。だが強制に失敗すれば(失敗するに決まっている)一体下部労働者はどうするのか、何事もなく又無事に一日の勤めを果せというのか。あるいは、強制に成功したとしても(この場合には、事前に資本と組合のボスが成立している)。一体、一時間の時限ストの持つ意味は何なのか。高々、政治スローガンを掲げた政策反対の「示威」ではあっても、「斗争」ではない。従って、どう転んでもプロレタリアの革命性、階級性とは無縁のものでしかない。革命の根底にあるもともとも単純な真理。「プロレタリアートは自ら武装せずして権力を打倒しえない」ということから何とかををせよとするものだけが、「時限スト」戦術の拡大、強化といったタワ言を吐けるのだ。今、闘う労働者人民大衆から要求されているのは革命の戦略、戦術であって、組合運動の戦術ではないのだ。

ソビエト運動の開始期とは、まさに全ゆる党派が大衆によってふるいにかけられる時代であり、もともと激烈な党派斗争の時代である。われわれの「中電マッセンスト!中央権力斗争へ!」の戦術をとくに「戦略的」ということの一つの意味は、他党派の解体、再編という点で戦略的な位置にあるからである。

c 中電マッセンスト

ソビエト運動の時代とは、プロレタリアートが自らのヘゲモニーによる権力奪取を明確に意識し、革命の未来から現在を規定するに至る権力斗争の時代であり単に受動的に資本と労働の関係だけに目を注いだり、個別政策反対の意志表示をしたりするだけの存在から一歩階級として自己を形成し、権力と全面的対峙関係を形成する時代である。ここでは一切の個別経済斗争個別政治斗争が革命への道程に位置づけられ、個別斗争が全人民的斗争のもつ全体性と関係づけられる。このソビエト運動の時代におけるプロレタリアートの斗争は、まず自らの力量を全ての既成の組織からあふれさせ、一つの新しい斗争形態と斗争組織を生み出す。一九〇五年ロシア

革命についてのローザの総括に見たように、マッセントは怒濤のような大衆の自然発生性が自ら発見した斗争形態であり、その意味では全く自然発生的なものである。だが、現代過渡期世界において、帝国主義諸国家内部では戦争を媒介しない「平時」からソビエト運動が発生する条件があるが、しかし、高度管理社会たる国独資国家の市民社会末端に至るまでの権力支配構造に規定されて、労働者、学生市民が分割され、いかに自然発生的に武装したとしても、それは権力斗争として自ら発展することが、きわめて困難である。

まさしく広範に立ち上りつつある大衆が、すでに革命への道を模索し始めていながら、なお自らの負っている巨大な使命の前で躊躇しているのである。即ち、自らの革命的内実を展開しようとする新しい斗争形態、斗争組織を未だ発見しえていないところからくる困難である。この困難を突破するためには、大衆の巨大な力量の一つの方向性を指示する斗争形態を与えなければならず、プロレタリア大衆に自らの斗争の意味と形態を明らかにしなければならぬ。

これは、革命の指導によってのみ可能であり、中電マッセントを「戦略的」ということの意味はここにある。自然発生的な斗争の延長上にマッセントが形成されることは、ありえない。

中電マッセントによって明らかになった斗争形態は中央権力斗争の後を生ずるであろう全面的な階級流動に、一つの方向と軸を与え、ソビエト運動として全面的に展開されるのである。この戦略的マッセントが、党にとって指導され組織されてのみ可能であるという点において、え党の正規軍、地区階級軍団、反戦行動隊を軸にしてその周辺に巨大な大衆を結集していなければならない。正規軍は党の戦略を具体化する軍事的政治的指導部隊であり、地区軍団はソビエト軍団としての階級性を体現し、反戦行動隊の中軸として位置づけられたのである。党的にはキムがその中心的役割を果さねばならない。

中電マッセントを「戦略的」とする第三の意味は、現代帝国主義の今日における階級攻防の戦略的配置の問題である。官公労決戦といわれるように、民間大企業の再編を完了した日帝ブルジョア権力にとって、日本型市民の存在基盤である官公労は弱環の一つであり、その体制からの解体、再編が緊急の課題となっていると同時に、環太平洋地域の経済、軍事的、政治的な支配権の確立にとっても、交通運輸、通信体系の再編合理化は戦略的意味をもつのである。国内的、国際的通信網の高度化と大量情報時代における情報機関の権力支配は、ブルジョア権力の生命である。云うまでもなく、中電は権力にとってもわれわれにとっても戦略的拠点の一つ

ビエト運動の直接延長上には決して地域ソビエト権力が展望されるのではなく、地域ソビエト権力の樹立は、中央権力斗争からブルジョア権力打倒によって初めて現実のものとなりうるからであり、地域ソビエト運動は、不断にソビエト樹立にむかう斗争の下部構造を形成するものと位置づけねばならないからである。だから、地域ソビエトは、一つの潜在的な地域権力として、地域マッセントから地域ソビエトを荷う母体として不断に解体、再編されていかねばならないが、同時に、その解体再編の理論的基軸は、真に地域マッセントを実現するためには、その個別性、分散性、一時性を止揚することが不可欠の要因であり、現在のにはまさしく戦略拠点としての中電マッセントへと集中することによってのみそれが可能となるという点にある。

すでに9・12集会で明白なように、他党派は今秋安保決戦におけるストライキ斗争を、何ら革命斗争の射程から把握することをせず、われわれの方針に真向から敵対してきている。かれらはまさしく解体の対象であり、また現に解体の危機に瀕している。その解体再編の方法は、一つは斗う大衆をスト実に結集し、無方針、非革命的な他党派を下からつき崩し、一つは、かれらの無方針を大衆的に暴露するために、かれらを出来る限りスト実に吸引して、その中で徹底的な党派斗争、理論斗争を展開し、一つは、たとえ他党派がセクト的に対応してきたとしても、断固としてわれわれの正しさを証明するための実践的、組織的準備としての軍団形成に全力を挙げることである。9・20のスト実(準)結成大会には、われわれの方針を断固として推進し貫徹する中核部隊の最終的な政治的意志統一をはかり、直ちに地域におけるスト実結成にとりかかり、10・3「21スト貫徹大集会」に結集させ、他方、各地区における軍団の最終的な戦術的意志統一を9・23に予定されている関西地区軍団結成大会において計らねばならぬ。

同志諸君！、一カ月余に迫る10・21中電マッセントから中央権力斗争に、全力をあげて邁進せよ。われわれ以外に、今秋決戦から七〇年代革命戦争を領導しようする党が存在し得ないが故に、われわれが全人民に、更に全世界の斗う兄弟達に負っている責任は重大である。この任務の重さに押しつぶされず断固として耐えぬき、不拔の精神と自己規律と実力をもって、現代を切り拓こうではないか。われわれの後に続く兄弟達のために！

## (2) 安保決戦と地区労研(階級的労働運動論の整理)

△地区労研の活動の新しい質△

として存在する。さらになお、現代過渡期世界のソビエト運動が、党に領導されるのみ自ら現実に展開できるとするならば、中電こそ、わが同盟10年にわたる実践の蓄積をもつ最大の拠点であり、今秋こそ共産主義者同盟の理論と実践の一つの決算期であり、全プロレタリア、全人民の前に武装を呼びかけ、プロレタリアートの進むべき道と闘いの形態を明らかにすることが、中電内部の先進的労働者とわが同盟の旗の下に結集している斗う労働者、学生の負うべき任務である。

今秋安保決戦における中電マッセントは、以上のような意味において、われわれは「戦略的」と呼ぶ。

△中電マッセント中央権力斗争を闘いぬき、地区ソビエト△

われわれはまず、戦略的マッセントが、単なる一揆主義的な街頭武装斗争に終るものではなく、連続的恒常的武装斗争の構造を生産点、地域に形成していくための突破口であることを確認しておかねばならない。今秋決戦が、権力とわれわれの全面的対峙関係を形成し、内戦から世界革命戦争を切拓くものとするためには、明らか、中電マッセントから中央権力斗争への進撃は、直ちに全国各地、地区、職場、学園のマッセントへと発展させられ、地区ソビエト権力に向けての潜在的二重権力へと発展させられねばならない。まさしく、マッセント中央権力斗争の戦術を貫徹してはじめて一切の自然発生的斗争に軸を与え、構造を明示することができる。

そのために現代的には何が要請されているか。われわれはこれを10・21にむけて山ネコストをも含めたストライキ斗争を組織する媒介機関としてのスト実の結成と、その軍事的先端を荷う地区軍団、行動隊の形に求める。

ストライキ実行委員は10・21以降の決戦を、連続的ストライキ斗争(戦術形態を問わない)で斗おうとする全国の労働者と、その労働者と、その労働者の無期限連続ストを基軸にして、その周辺に結集する全ての人民大衆(ベ平連、全共斗、在日朝鮮人、未解放部落民、高校生、反戦グループ等の反帝統一戦線)を包含する組織である。真に斗おうとするすべての個人、集団、組織を、スト実に結集させなければならぬ。

反戦、全共斗、その他諸々の自然発生的斗争組織を結合してスト実へと高め、組織する過程で、われわれは明確に地区ソビエト運動の内実を形成し、地域武装マッセントから地域ソビエト運動を展望し、しかもこの展望は、唯一、中電マッセントから中央権力斗争を闘いぬくことによってしか現実化しないことを明らかにしなければならぬ。何故なら「9・7集案提案」でも明らかにしたごとく、地域ソ

地区労研という組織は、単なる学習サークルや、ないしは、各職場の活動報告情報交換の場にとどめることはできない。それはむしろ地区における階級的労働運動の実践的荷い手として自らを登場させねばならない。この地区における階級的労働運動の展開が日程にのぼったのは、まさしく、67年10・8以来の地区反戦の活動を前提としている。この新しく登場した反帝統一戦線と結合した労働運動のもつ巨大な可能性こそが従来の社研、労研に代表される革命的左翼の職場活動の領域を大中に変革し地区労研を必要としているのである。したがって、地区労研は何よりも従来の社研、学研活動の内容であった組合左翼反対派の活動を止揚し、より高次の内実によってその活動を開始しなければならぬのである。地区労研活動を新しい質において展開しようとするれば反帝統一戦線、階級的労働運動、ソビエト運動といった諸概念を明確にすることがせまられる。というのは地区労研が荷う労働運動の質は今だかつて史上存在しなかった内容であり、それゆえ、これらの新しい概念をしっかりとらたてることなしには、絶対にその質を獲得しえないのである。この新しい質とは、改良斗争と革命斗争とを結合する内実であり、経験主義的対応によって決って到達しえないのである。

△改良と革命に対する新しい観点△

改良斗争と革命斗争の関係に関して諸党派の見解をみれば、まず革マル派は、改良斗争においてその中で党を形成し、その党が革命斗争を展開するといったような改良斗争と革命斗争の関係を党建設のみに歪小化してしまい、しかも革命斗争の内実を今日的に単なる宣伝とバックロとしてしか提起してないが故に党建設の内容自体が改良主義的色彩をもってしまっている。中核派は、一方で改良斗争の戦斗化において革命斗争との結合を展望しつつも、それが不可能であるが故に他方で、革マル的党建設その弱点を補完しようとしている。だがその決定的な欠陥は、階級形成論における無内容さである。だから中核派は、たえず大衆運動主義と党建設の間をジグザグする。青解や構改派はニエアンスの相違こそあれ改良斗争を革命斗争として位置づけようとする四苦八苦ししている。青解の反合斗争と社会的権力といった主張は、その努力の表われといえるが、しかしいくら頭の中で改良斗争を革命斗争として把握したとしても現実には、何ら変らないのである。フロントによって提起された問題は、これら諸党派の試みがいずれも現段階での「正確に言えば、10・8以前の政治斗争の構造を固定化した上での発想であり、階級斗争の発展過程との関連で論じられていないことを明らかにした上で画期的な意味をもっている。すなわち、六七年十・八以前の階級斗争の構造の上に改良斗争と革命斗争とを結合することは

本来不可能である。むしろ問われていたのは、改良斗争と革命斗争が結合する条件をいかに作り出すかということであった。改良斗争と革命斗争の結合の環が党であることは、それ自体正しいが、実は何も言っていないに等しいのである。党である規定することによって何か解決したかの如く考えることは全く幻想であり重要なことは今日の階級斗争の中で両者を結合するための方針を明らかにすることである。いかに言えば、改良斗争と革命斗争との関係は、単に党の強化として語られるだけでは不十分であり、労働者階級自体の団結の形態（階級形成）として明らかにされねばならない。反帝統一戦線や階級的労働運動、そしてソビエト運動という概念は、この労働者階級の団結の形態（階級形成）に対する規定である。

#### △階級形成論の意義

現段階においては街頭武装斗争として斗われている革命斗争と改良斗争とを結合する観点からソビエト運動である。それは直接ソビエトを作る運動といった内容ではなくソビエト形成の観点から諸斗争を指導する指導の質である。ソビエト権力が、労働者階級の改良斗争と革命斗争とを結合した組織形態であること、そしてそれがブル権力打倒の政治斗争の中で労働組合機関の指導とは、独自の地点から形成されることは、歴史的に証明されている。そして、過去の教訓は、帝国主義戦争がソビエト形成の条件だったことである。だが今日、われわれは、帝国主義戦争を許すことはできないし、その前段においてブルジョア権力を打倒しなければならぬ。そのためには、いわば「平時」からのソビエト形成にむけての政治、組織活動が要求されるのである。そして、この路線の正当性を立証するものこそ、67年10・8以来の階級斗争の歴史である。

67年10・8以来の階級斗争の歴史は、階級斗争の構造が変らないまま危機に突入し、その過程でダイナミックな構造の変化が、いわば客体的な危機によってもたらせるといった事態ではなく、むしろ現段階から階級斗争の構造が大きく変わりつつあり、労働者階級が前段階決戦に勝利しうる条件が固まりつつあることを証明した。そして、このいわば「平時」から進行しつつある労働者階級の階級形成に対する指導をぬきにして、革命を語ることはできないのである。何故なら、レーニンの時代において未だ未分化であった改良斗争と革命的斗争とは今日に明確に分離をとり、改良斗争の荷い手たる労働組合をはじめとする合法の大衆組織は、まさしく革命斗争と敵対し、改良斗争を改良斗争として持続させる組織へと変質しているからである。したがって革命斗争がどのような大衆組織に立脚しているのか、そして、その革命的斗争が立脚する大衆組織は従来の合法的大衆組織といかなる関係に立っており、そし

を、その下部から解体し反帝統一戦線へと再編してゆく展望を明らかにした。そこからどうなるのか、この問いに答えることが必要であり、革命にむけての労働者階級の階級形成について明らかにしたソビエト運動論こそそれに対する解答である。ソビエトは形態的には、労働、農民、市民、学生の地区評議会であり、質的にはコミューン四原則が貫徹し、労働者人民大衆の武装によって樹立された地区政治権力であり、プロ独の萌芽である。従ってソビエトは全人民による武装によって持続せられるのであるが、しかし地域的、分散的地域権力は、決してそれ自体持続しえない。それは、ブルジョア権力中核を解体し、全国的な政治権力機関として自らを飛躍させねばならないのであるが、過渡期世界においては一国におけるプロ独の成立は不可能であり、世界プロ独にむけての世界革命戦争の根拠地として自らを世界（＝一国）同時革命の主体として持続することが要請される。権力斗争のこのような展望にむけ、何が準備されなければならないかが明らかにされねばならず、それは反帝統一戦線と階級的労働運動のソビエト運動への展望であり、そうした質の指導をはたしえる革命党の建設である。

#### △安保決戦と地区労研

今秋安保決戦は、現象的には、4・28をのりこえる本格的武装斗争の開始としてありつつも、階級形成論の観点よりみれば反帝統一戦線と階級的労働運動が、ソビエト運動の端緒の形態としてのマッセントを闘い切れるかどうかである。一方、党形成の観点より見るならば、武装斗争を荷う党への飛躍とソビエト運動の指導の質の獲得として、そのような革命党の試練の時代として、安保決戦が煮つまっていることである。階級斗争の最前線においては、このような問題に直面しつつも各地区段階においてみるならば、問題の成熟は非常に不均等であり、様々な段階が存在している。だから地区労研活動としては、最前線の問題提起に対しどのような対応をするか（突撃隊の選出と拠点マッセントの形成）を個人及び組織のいかなるレベルで解決するかを説明しつつも同時に地区労研と地区労働運動者全体としての成熟度を明確にしその上たって具体的方針を打ちださねばならない。

#### ③ 社学同の活動の総括の一視点（山代論文の評価）

##### △はじめに

すでに我々は67年10・8以来の階級斗争を総括することによって、70年代階級斗争の特質及び形態を明らかにすることができた。67年10・8から今秋安保決戦に至る過程は、まさしく70年代階級斗争にむけての過渡期的形態であったのであり、そし

て最終的には、合法的大衆組織を再編する力量をもっているか、どうかを明らかにすることがわれわれにとって重要な課題となるのである。

#### △階級的労働運動のスローガンについて

10・8以来の全学連、反戦の政治斗争を日本の階級斗争の構造そのものをダイナミックに変革する闘いとしてとらえ、全学連、反戦の政治斗争の構造を地区段階における新タイプの政治斗争の機関の形成（地区反戦）として位置づけ組合主義的統一戦線とは、区別した反帝統一戦線としてこれらを規定したのは、何よりも先述した観点からの帰着に他ならない。そして地区段階において全共斗や地区反戦が形成され、活動家が結集してくるなかで、そのような地区における力量を背景にして、はじめて労働運動を革命的観点から展開する地平を獲得しうるのである。この新しい質の労働運動に対し、われわれが階級的労働運動と規定するのは故なきことではない。毛派のいう革命的労働運動という概念は、労働運動を革命と直結させる指向を内に含むが故に正しくない。何故なら、革命は労働運動の産物ではない。全人民的政治斗争の産物であるからである。また多くの革命的左翼が口にしてはいる戦闘的労働運動という概念は、その内に組織論的内実を含みえず、その結果、民間労働運動の戦闘化を期待する指向を生みださざるをえず、それゆえわれわれの労働運動の基本方向を説明する概念として正しくない。日共のいう階級的民主的労働組合は、組合運動の方針として、日共が組合を乗っ取ることをによって民族民主統一戦線の下部構造にしようということにほかならず労働者の階級の団結を、組合的団結の連合としての民族民主統一戦線としているが故にわれわれの労働運動とは、無縁である。さて階級的労働運動という概念は、日常的な労働運動の中で労働組合的団結を打ち破り階級的団結をつくりあげること指向したところの労働運動である。そして労働者の階級の団結は単なる職場や工場内の団結として語られるのではなく、一つの地域における全人民を共産主義革命へと組織してゆく統一戦線の中軸としての労働者階級の団結である。だから階級的労働運動を提起する場合、あらかじめ地区における一定の政治勢力の存在が前提にされるのである。

#### △ソビエトの規定

だが、反帝統一戦線や、階級的労働運動という概念自体、労働者階級の階級形成の段階に規定された過渡的なものであることを忘れてはならない。反帝統一戦線は従来の社・共による組合主義的・議会主義的カンパニア斗争にかわる実力斗争を形成し、そのことによって政治斗争の構造を大きく変えていった。そして、この反帝統一戦線と結合した階級的労働運動は、社・共の組合主義的、議会主義的統一戦線てそれ故70年代階級斗争をいかなる質において獲得するかが今秋安保決戦における我々の斗争にかかっているのである。したがって、ここ一年間の我々に問われていた問題は70年代階級斗争への過渡期としての現段階の階級斗争の質を明らかにし、それらにみあった党の活動をつくりだすことにあるといえる。だが、すでに何度も明らかにし、我々にとってはいわば常識的なことがらであるが、70年代階級斗争の質は、何ら自然成長的に展望しうるのではなく、まさしく党派の革命戦略が決定的に問われるのである。我々はすでに9回大会において戦略的内容を確立した。そして今われわれに問われているのは、そうした戦略を実現すべき運動、組織である。運動、組織の確立過程は、戦略のそれとはちがひ、多分に経験的要素が入りこまざるをえない。しかし経験的要素のみによつては乗りこえることのできない壁に我々は直面していることを確認しておかねばならない。我々は戦略を導きの糸に一大飛躍を実現せねばならない時期を迎えている。ここ一年間の我々の活動の総括は、それゆえ戦略論における未確立と、それによつてされるところの組織における経験主義としてその視点がすえられねばならない。

#### △党の革命の視点を欠落した対応

われわれは、この過渡期におけるわれわれの活動を総括するとき、その基本的骨格は、8・3論文一四中委10・21斗争という過程と11・718回大会一東大斗争4・28という過程における社学同指導の質の差違を明らかにするとともに両者を止揚した地点こそが問われていることを明らかにしなければならぬ。そしてこの止揚への道は、何か両者の弱点を視摘し両者を折ちゅうすることによって切り開かれるのではなく、むしろ両者の路線が破産せざるを得なかつた根拠を明らかにし、それを突破する方向を新しく獲得することによってしか開かれることはないであろう。8・3論文一四中委10・21斗争（理論戦線七号、共産主義二号）の道程に於ける指導的政治路線の弱点は一口に「政治過程論」の破産として語られているが、このような総括は何ら主体的な総括たりえない。何故ならわれわれは、総括する場合、単に主体の側の理論的、政治的弱点に注目するのみでは不十分であつて、むしろ階級斗争総体の中で主体の破産を位置づけることが必要なのである。周知のごとく「政治過程論」は60年安保斗争の総括から導き出された、政治斗争の発展過程に対する分析であり大衆が国家権力に対する政治斗争の中で、前衛党の戦術に媒介され国家権力が大衆の幻想を自ら打破るなかでより革命的意識へと目ざめてゆくという民主主義斗争の発展過程の分析であったことであり、それ故党組織論なき大衆運動主義的政治論であることは確認すべきことである。だが、同時に、一つの階級斗争の新し

い地平が切り開かれ、大衆の政治的成長がはじまるとき「政治過程論」はたえず再生産される。それは、新しい質の運動が国家権力の壁につき当るまで「政治過程論」で描かれた過程は一般的に発生するとみておかねばならない。

だから8・3論文14中委10・21の過程において同盟内部に「政治過程論」的ヘゲモニーが貫徹しているのは、何よりもこの間の階級斗争の局面から規定されていることをみぬいておかねばならない。それゆえ騒乱罪の適用と権力の体制のたてなおしの中で大衆斗争が停滞してゆく中で「政治過程論」はもはや通用しなくなり、同盟の政治主張としてもそれが下げられ、代わりに学園斗争論、党組織論、なしくずしファシズム論が主要な主張となって来たのである。この路線転換は、必然的な経過であるが、問題は、この路線転換を戦略的な観点から位置づけられず、むしろ大衆の動向にあまりにも追従するかたちでなされてしまったことにある。

すなわち全共斗運動に対する党派の溶解である。だが全共斗運動が階級斗争の新たな地平を切り開いたことは明らかであり、この地平で、またもや「政治過程論」は復活するのである。それは、全共斗運動にみられる端緒的武装斗争を赤軍の建設から臨時革命政府の樹立にまで引きのばして語る路線として開花したのである。

△自然発生性に拝跪したコンミュニオン型全学連論

では以上のような政治指導上のジグザグをたらした要因は、どこに求められるべきであろうか。それは両者ともに客観情勢の危機に全てが帰着する構造をもってあるが故に、主体的条件も客観的にしか分析しえず(すなわちプロ独か、ファシズムかといった分析や、世界革命戦線の提起等)主観主義、無政府主義へと転化せざるをえないのである。一方、日向論文にみられる階級形成、党組織論は、戦略論における新たな内容によって提起されるに到らず、基本的にはレーニン戦略に規定された階級形成、党組織論の領域をこえることができず、その結果、これとも全共斗運動への党の溶解を阻止することはできなかったのである。われわれは「前段階決戦を革命の勝利へ」として世界革命戦争の内容を把握するとき、こうした戦略を実現する組織は「平時」からの軍事を組織しうる党としての党の革命が必要である。その党の革命をおし進めることこそ問われていた核心的内容であったのである。この視点がない故に赤軍派の如く軍の建設に全てがかけられてしまいか、一方全共斗運動の位置づけを行うことが党の任務として提起されてしまうことになるのである。コンミュニオン型全学連(山代論文)においては、その多大な意義にもかかわらず、ソビエトが党に指導された武装蜂起によって、プロレタリア権力へと飛躍することが一般的に確認されながらも、ソビエト運動が端的に展開された地点で忘れさら

## 第二章 安保決戦をめぐる階級情勢

(九月二十八日関西にて執筆さる。)

### (I) 新たな昂揚と党的飛躍

(京大決戦総括―パルチザン、赤軍派、中核派批判)

京大決戦を前にした局面の情勢は、①愛知・ロジャース会談による「沖繩返還」での日米帝国主義の合意が、事前協議制の空洞化によって決着づけられ、ブルジョアジーは、十一月佐藤訪米―日米共同声明での乗り切り体制に入ったことであり、②広大、早大、東大、を始め各大学拠点への大学立法をカナメにしての連続的攻撃が、芝工大事件、赤軍派への捜索などをとりあげ、二つのプレミアップ、自衛隊の治安出動を宣伝しての恫喝などともかけられてきた局面であった。

京大決戦は、この権力の大学立法に安保根拠地破壊に対して、広大、早大の徹底抗戦―死守戦型斗争がぶつかった限界を如何に越えるかが問われていた。そして、京大全共斗を中心とする「パルチザン遊撃軍団」の登場は、この限界を突破せんとする左派の自然発生的対応としてあったのであり、佐藤首相は九月二十日、芝工大事件とからめて、「学園で公然と武斗訓練が行なわれている状態を許すことはできない」と、この部隊に対する弾圧を示唆したのである。すなわち、このパルチザン部隊は、①個別全共斗の枠を越えて斗おうとし、②かつ恒常的武装部隊として自らを維持しようとする方向を持ち、③「中央権力斗争とマッセンストライキのラセン的展開を下から積み上げ支える」(「ストラグル」89)ものとして自らを位置づけている点で、これまでの全共斗の武装の、①個別大学斗争の防衛に限定される傾向、②斗争のある度に武装するといった非連続性、からの飛躍であり、このような学生軍団の全国的形成の可能性は、帝国主義にとって新たな脅威として受けとられたのである。

二十日の奥田学長(京大)の強制退去―機動隊導入声明は、二十日午前の百万遍

れ、武装の問題―これは党の問題にほかならないが―を提起せずに、コンミュニオン型全学連を提起し、その結果、全共斗運動の中に党派を溶解させることになったのである。赤軍派の場合をよりくわしく見るならば、彼らが軍事問題を最も重大な政治問題として提起しつつも、それを党の問題として、新たな戦略に武装された軍事を組織しうる党への革命を経ずに軍団の建設の設立でもってこれに応えようとし、その結果形成された軍団の論理に彼ら自らがつき動かされ、解党主義―無政府主義へと自らを純化させていたのである。しかも彼らは、この無政府主義的内実を、共産党内に寄生することによっておおいにかくし、延命をはかるうとしていたのである。彼らのわれわれに対する党派性は「世界プロレタリアート」という概念の指定と、みせかけの「国際主義」と「軍」である。そしてこれらの諸概念の中で最初から本質を最も鮮明にするものが世界プロレタリアートという概念であり、この概念をアプロオリに立てることによって現実から乗離し空想の中に入ってゆけるのである。われわれにとっては世界プロレタリアートの登場は獲得目標であり、決して世界プロレタリアートの存在が前提にならなければならない。何も拘わらず「ヴェトナム反戦斗争をもって開始された世界プロレタリアートの登場は67年10・8羽田斗争でもって過渡期世界のプロの高次の自然発生性―世界性―永続性―社会性を世界各国に全面的に登場させた」(赤軍創刊号)として提起することにより、そこから「世界革命戦争―世界赤軍―世界革命戦線」を直接的に日本の階級斗争に導入し全共斗、反戦をそれに再編しようといった政治路線を提起するに到ったのである。しかもこの「国際主義」を「帝国主義軍隊の解体―国民的統合力の崩壊―ソビエト運動の開始―一国的―一挙の権力奪取」に对立させて展開しているが故に右翼日見主義へ転換する可能性をひめている。すなわち、安保の内容を「世界革命戦争―世界赤軍―世界革命戦線」にむけての前段階蜂起という無内容かつ無規定に提起しているが故に失敗すれば、いつでも引きさがれるような構造に向っている。こうした政治内容こそ現代無政府主義にほかならない。

以上のことから今日社会学同が直面している問題点を明らかにするならば、それはまさしくソビエト運動開始の時代における革命党のあり方の問題であり、軍事を組織する党への飛躍を勝ちとることにほかならない。

この今日の革命党に要求されていることがらに答えず現実をいろいろに解釈してみたところでわれわれが直面している困難を突破することはできないのである。

斗争を契機としながらも、以上のような日帝政治委員会の要請に基いて行なわれ、二十一―二十二日の決戦となった。この決戦を闘った部分は、①徹底抗戦―死守戦派―中核派十青解十四トロ、②社会学同及びBUND系地区反戦労働者、③全共斗パルチザン隊、④数千の大衆であり、⑤赤軍派は分解し、一部が鳥丸今出川派出所(同志社大前)を攻撃した。それぞれの部分について、詳しく見てみよう。①の部分には中核派に代表され、この間の全国全共斗の主流派である。すなわち、急進民主主義―戦斗的組合主義の潮流であり、従来の社会党―総評の運動―市民主義的政治斗争と組合主義的経済斗争との補完の枠の中で、戦術を徹底化させ、日帝打倒の意識性を上から附与せんとする部分である。この部分の限界は、広大―早大斗争、九・五全国全共斗の中で既に明らかであった。すなわち「第二、第三の安田を!」のローガンは、一・一八―一九斗争以降の三ヶ月余の全国学園斗争の昂揚の中に既に実現されたスローガンであり、三月入試粉砕斗争と四・二八斗争の中で、更なる飛躍を問われていたスローガンであったのであり、その飛躍とは、大学占拠―大学解体として実現された資本制分業の大学に於ける解体、麻痺を、他階層に拡大すること、②地域マッセンストによって、帝国主義支配秩序の下部構造を破壊し、その上に立つた帝国主義治安警察、軍隊の解体斗争―中央権力斗争を闘うこと、として問われていた。そして、四・二八斗争とは、この課題に答えることに失敗したのであり、以降の斗争の停滞状況の中で、大学立法強行採決を契機とする権力の個別拠点破壊が相次いだのであった。

この攻撃に対して、広大―早大斗争は、最も戦斗的な部分を結果して、果敢に闘われたにもかかわらず、斗争の性格としては既に防衛的なものに転化していたし、波及力を失っていた。すなわち、死守戦型の斗争に対する権力の対応は、軍事的にも、ヘリコプター、サク岩機、など、完成されたものとなっており、死守戦は「一座して、死を待つ」ものでしなくなりましたし、階級斗争の構造転換を導く路線ともな

り得なくなっている、ということである。地方で斗われようと、その斗いが階級斗争の普遍的な課題に答えたものであれば、必ず全国的な波及力を持つのであるが、その意味では、死守戦型斗争は、この間の大衆斗争の昂揚の中で、個別的、分散的な性格に転化していったのであり、政治の質としては、大学立法粉碎戦後民主主義防衛という質であり、安保決戦に向けて、大学拠点での斗争、全共斗を如何に位置付け、飛躍させるか、という点での積極性を持ち得ないものであった。

九・五全国全共斗大会は、このような限界を持ちながらの全国的結集という「量」による補完としてあったのであり、カンパニア的結集に終わったのである。しかし、二万五千という結集、六〇年安保以来の学生運動の動員力の回復は、言わば、この限界が学生運動次元に於いて、飽和点に達したものとされたのであり、九・五を期して新たな展望を求めた分解、再編が党派斗争への出発点となったのである。九・五での我々と赤軍派とのゲバルトと、ゲバルトの仲裁に入った諸党派（特に、青解、M.L.）との対比は、その意味で象徴的であった。すなわち、大衆斗争次元の方針では、我々と赤軍派は、ともに全国全共斗の限界を指摘しながらも、赤軍派は「世界革命戦線」として全共斗の軍への解体をソビエト運動の否定、アナキズム、テロリズムを主張し、我々は党の正規軍と結合した地区軍団への全共斗行動隊のケン引をバネにした全共斗運動の地区ソビエト地域労学評議会運動の一環の飛躍という主張として、根本的に対立した。諸党派は、我々の対立の意味さえ理解できず、赤軍派の登場の階級の意味を武装斗争の本格的開始の時期に於ける急進派のアナキズム、テロリズムへの分解傾向も理解し得なかつたのである。

京大決戦に於いて、中核派は、以上のような自らの限界を認識し得ず、戦后民主主義防衛大学立法粉碎を提起し、死守戦を提起したが故に、戦斗の大衆を収約できなかつたのである。死守戦への大衆の非協力的対して、二十日夕方、中核派八十名の部隊は、二十一日の街頭戦を約束しながらも、実際は時計台死守の四名を残して斗争から引き上げてしまったのであった。斗争の方向を提起できないことによって、彼等は、今秋安保決戦にそなえて部隊を温存しようという党派防衛を選んだのである。

③の部分は、新しい潮流である。この部分のハバルチザン遊撃軍団ハバルチザン五人組の形成とハバルチザン戦争Vの提起は、全共斗運動がその個別的運動の展開から一点突破をはかることで限界にぶつかっており、中央権力斗争と地域マッセントの構成部分として再編されなくてはならないことを、自然発生的に感じとった無党派戦斗の大衆である。すなわち、帝国主義国家権力を如何に打倒するかというこ

して、本格的武装の緊急性に直面させ、先進的部分の軍団化を促進し、中央権力のカナメ帝国主義軍隊と対決すべき党の組織するプロレタリア正規軍を要求させるのである。⑤ただし、この場合街頭占拠は、拠点占拠と結合しないかぎり、持続性をもたないのであり、大学工場占拠による資本制分業の生産過程における解体を含むことによって、単なるゲリラ戦、都市交通麻痺、サボタージュによる武装宣伝と区別されるのである。⑥以上の①②③④の戦術を導く政治の内容は、安保再編を媒介とした日帝のアジア侵略・反革命粉碎、アジア侵略反革命体制の構築なくして、シファジズム帝国主義的社会再編粉碎であり、大学斗争の任務を日帝の軍事・外交路線と諸階層の再編との関係で定めることである。

そして、この政治を実際にやりとげるべき党の権力斗争が中軸にすわるのである。ハバルチザン隊は、彼等が戦斗の大衆であり、党の軍隊でないかぎり定住性を持っているし、地域性をもっている。すなわち、彼等は意に反して、拠点から分離することのできない本質をもっているのである。

それは一面では、中央権力斗争への消極性としての弱点をもっているが、他面では、その定住性・地域性によって大衆と結合し、大衆を組織しうる強さをもっているものであり、党の正規軍との結合によって、その遊撃的方向を生かしつつ、地区軍団へと組織されるか、先進的部分は正規軍へと組織されるのである。

正規軍をもった党の組織的関わりがないとき、ハバルチザン隊は死守戦派ハナルコサンディカリズムに反発するあまり、逆に、遊撃戦のみを志向し、遊撃戦を陣地戦との関係で位置づけて大衆をプロレタリア権力へと組織する政治活動を放棄してしまふ危険をもつ。

中核派とハバルチザン隊の戦術をめぐっての対立に対して、社学同はブンド系地区反戦労働者とともに、基本的には新しい左派大衆ハバルチザン隊に依拠しつつ、両者を統一して領導止揚するものとして登場した。そして、我々とハバルチザン隊との共同した百万遍斗争が、二十一日二十三日の二千人の学生大衆を牽引したのである。

百万遍斗争が神田地区斗争から飛躍し、三月の東一条斗争から飛躍していることは、一つには、ハバルチザン隊の登場であり、二つには、社学同共青の「10・21中電攻撃のマッセント」の原型を作る位置づけをもった参加であった。三つには、非公然ではあるがBUNDの正規軍の登場である。すなわち、端初的であり、いまだ十分に組織されずに政治的意志統一も不充分であったが、(一部の社学同では「社学同の公然たる登場」という位置づけにとどまっていた)われわれが安保決戦

とを、直接的に問題にし始めた部分である。だが、この部分が、基本的には無党派であるにせよ、その指導部分がかつて党派に所属していた経験を持っており、自らを擬似前衛として位置づけようとしている。その限りで、この潮流を潮流として見るならば、ハバルチザン行動の「非組織性、無秩序性、無党派性」、「ハバルチザン戦争の浮浪人的歪曲」という質を備えており、アナキズムへの傾斜も持っている。彼等は自からの体質を認めつつ、その止場の方向を語ってはいるが、それは、この潮流の指導部分の党的飛躍を抜きにしては空語(「自らの党派の曖昧性の合理化として」)に結果する。だが、われわれは党派的批判を批判として加えるだけに終わってはならない。

まさにかつての自己否定派ノンセクト・ラジカル自身が、革命党の手工業性ハポツダム自治会への拝跪を告発するものとして登場したのと同様に、全共斗ハバルチザン隊の登場は、BUND・SS・SLKIMの正規軍をもった党として、中央軍事委員会と地区党とを媒介にして、党と軍と統一戦線の三結合を党組織の中に包含した組織として対処することによって、はじめてこのような大衆のハバルチザン行動を「大衆の戦斗の指導者を直接に養成する」ものとし、先進的部分を正規軍に組織し、全共斗運動を中央権力斗争地域マッセントの拠点、地区労学ソビエト運動の一環に組織することができるのである。

すなわち、党と、党の正規軍こそが、革命的政治の全体性を、プロレタリア権力樹立世界プロレタリア独裁の方向で表現できるのであり、われわれは自らをそのような組織へと、組織しなくてはならないのである。

京大決戦におけるハバルチザン隊の戦術は、「街頭戦」であり、死守戦ハ中核派に敵対した。しかし、われわれが総括しなければならぬのは、われわれとハバルチザン隊とが大衆を結集して闘った二十日・二十一日の百万遍斗争が河原町斗争ではなかつたということである。

すなわち、大学占拠と街頭占拠の有機的連関を、階級形成権力奪取に至る一連の戦術として把握しなければならぬことである。軍事的にいっても、①拠点死守はそれ自体攻撃的になされなくてはならないこと、②街頭占拠は市民社会の部分的麻痺を地域住民をまきこんだかたちで拡大することによって、全共斗運動総体を国家及び諸階級との関係の領域に直面させることによって、斗争主体の発展を促進すること、③街頭占拠地域占拠は、工場占拠を媒介としつつプロレタリアートによる地区一全国にわたる支配地区一全国労学ソビエトをめざすのであり、当然中央権力の打倒と結合しなくてはならないこと、④このことはプロレタリアート人民を

を端初的蜂起ハ10・21霞ヶ関中核占拠大阪中電ハ北大阪一帯マッセントの同時的実現として提起していたことによつて、この京大決戦ハ百万遍斗争は、一方での左派大衆の自発的武装と結合しつつ、安保決戦の観点から戦略的に位置づけられて斗われることによつて、新たな意味をもつたのである。

反戦労働者を動員したのはBUNDのみであったが、われわれは中電マッセントをになう地区軍団の一翼へと反戦行動隊を組織するための実地訓練として労働者を動員した。SS・SLKIMのこの戦略的牽引力によつてハバルチザン隊を吸引し、両者の共同斗争が、のべ二千の大衆を二日にわたり結集させたのであった。

そして、我々は、ハバルチザン隊に対して、10・21霞ヶ関中核占拠に呼応した、大阪中電マッセントの戦略目標を与えることにほぼ成功した。すなわち、百万遍斗争は、その斗争形態に於いて神田地区斗争と同様であり、規模に於いて劣っているが、街頭地区占拠がなせ現段階では一時的に終るのか、という問題を、工場占拠を軸にしたプロレタリアートの地域的ヘゲモニーの未形成、及び、全国政治斗争における権力との力関係が優位であることとして総括するならば、中電マッセントは、霞ヶ関中核占拠斗争と呼応して、目的意識的に追求されなくてはならない。今秋斗争における、この戦略目標に向けて、部隊をどう組織するか、として位置づけた場合、百万遍街頭占拠斗争は、新たな意味を持ったということである。

さて、このような百万遍斗争の新たな突出に対して、「前段蜂起」ハ大阪戦争を唱えていた赤軍派の諸君はどう対処したか？二十一日、三十名で登場した彼等は、「こんな斗争をやっても仕方がない」として引き上げた部分と、烏丸今出川派出所を襲撃した部分とに二分された。彼らの二分解の要因は、彼らがプロレタリアートの蜂起について全く無理解であることである。「蜂起が先か、ソビエトが先か」という愚問は、クーデター革命論に行きつく。①蜂起がプロレタリアートの蜂起である限り、帝国主義国家権力の粉碎、破壊のうちに、プロレタリア権力機関の創出を包含するものとしてある。②国家とは暴力装置警察、軍隊を要しているけれど、現代帝国主義では帝国主義軍隊、治安警察、裁判所、牢獄官僚金融資本帝国主義的労働組合は、一体となって国家機構を形成している。国家は、資本制分業と密接に結合し、総資本として行動することによって(財政投融资、金融政策、重要産業の国有化)その幻想的共同性を維持している。③プロレタリアートの蜂起は、この国家機構を全面的に粉碎することを目指して準備されなくてはならず、ソビエトは、この全面的な斗いを貫徹するという意味で蜂起の機関として形成され、全人民的武装によつて敵の暴力装置を粉碎する。④そして、ソビエトは権力奪取

(一) 国に於ける権力樹立、あるいは、ベトナム革命戦争の如く、ヘゲモニーなき自  
国ブルの反革命と国際反革命の結合に對して対峙しつつ権力を維持することを過渡  
として世界プロ独樹立に至る。) 後において、プロレタリア独裁の政治単位である  
と同時に、社会主義的生産の単位ともなるのであり、資本制分業を破壊してゆく  
のである。⑤「中央権力斗争とマッセント」は、ソビエト権力樹立の蜂起へ向けて  
のプロレタリアートの戦術であり、中央権力斗争か、マッセントかという議論は、  
実は中央権力斗争とマッセントを全く理解していないのであり、論者の主観とは  
裏腹に市民的政治斗争と組合主義的経済斗争の補完という人民戦線派の戦術の枠  
中の急進市民主義とアナルコサンジカルズムとの対決に転落するのである。

⑦赤軍派は中央権力斗争の蜂起とすることによって「都市戦争—世界赤軍—世界革  
命戦線」を主張するにいたったのであり、ソビエトと党をすべて軍隊に解消した。  
ブルジョア革命であれば、資本制的生産様式はすでにその本源的蓄積過程におい  
て形成されており、革命の決着は、市街戦における封建制軍団と市民軍との対決に  
よって決まった。しかし、プロレタリア革命はその社会的生産をも蜂起の機関ソ  
ビエトの中に準備することによって、社会関係そのものを新たに創出する革命であ  
り、プロレタリアートの軍はこのソビエト形成との関連の中でその任務を持つので  
ある。だから、赤軍派の軍はブルジョア軍隊と何ら変わらないのであり、ファナ  
トの突撃隊と変わらないクーデター革命の軍に転落するのである。

⑧「しかし、現代過渡期世界における革命は一国的に終わらないし、ソビエトも一  
国的には形成されない」と赤軍派の諸君は主張する。なるほど、革命は世界革命戦  
争であり、世界プロ独樹立が当面の目標である。しかしこのことは、ブルジョア階  
級に對するプロレタリア階級の斗争は、内容上ではないが、形式上は何よりも第一  
に、国民的斗争である。

おののの国のプロレタリア階級は、当然まず自国のブルジョア階級をかたづけ  
ねばならない(共産党宣言)こと、と矛盾しはしない。一国におけるプロ独は、本  
質的に過渡的であり、世界革命戦争の機関として自らを維持しつつ、国内における  
不断のソビエト・コンミュニオン運動を展開しなくてはならないのである。

国際反革命の介入によって、一国に於けるプロ独樹立、ソビエト形成がそもそ  
もありえないと結論づけることはできない。そのような議論は、世界党を媒介にし  
た世界革命戦争の一環として各国の革命戦争が斗われること、そのことによって国  
際反革命が分断されることを無視している。すなわち、NATO・安保—国際反革  
命同盟は永遠のものではありえず、日、西独、伊の不均等発展によって動揺と分解

## (II) 国際—国内情勢と任務

### (I) NATO安保再編と亭国主義の死の苦悶

愛知・ロジャーズ会議によって、安保再編の内容はほぼ確定した。すなわち沖繩  
「核ぬき本土のみ返還」の内容は、事前協議をベトナム朝鮮台湾など百例ほどの具  
体的例を上げて情勢分析し、特に朝鮮・台湾情勢の判断についてはほぼ日米帝国主  
義は一致した。

ベトナム出撃については「沖繩返還時にかりにベトナム戦争が続いているような場  
合には、日本政府は沖繩からの米軍のベトナム出撃を事前協議で絶対に断ることは  
しない。」というものである。すなわち事前協議事項の全面的空洞化が宣言され  
たのであり、沖繩への安保条約の適用をバネにして、日米帝の合意は沖繩—本土全体  
に及ぶことになる。結局日帝のアジア侵略、反革命の全面的強化である。沖繩への  
自衛隊派遣を媒介とした沖繩基地に於ける日米共同軍事行動の強化、日帝のアジア  
侵略前線基地としての沖繩基地の転化のみならず、全土にわたって、アジア侵略  
反革命体制の構築が押し進められようとしている。

中核派の諸君は「沖繩の返還は、沖繩での米軍の行動を制限するから意味がある」  
などと言っていたが、事態はまったく逆であり、日帝の侵略・反革命の強化をカナ  
メにして日米帝国主義は、より自由にアジア侵略・反革命をはかるうとしており、  
特に朝鮮・台湾情勢での合意は、朝鮮危機を突破口にした日帝の海外派兵の道をさ  
らに切り拓いたのである。核装備についてもボラリス核潜の寄港と、サブロック  
(核爆雷)など海上核の貯蔵などで肩替りされるのであり、むしろ日帝は、米帝の  
核戦略と積極的に結合することによって、核持ちこみから核武装へと歩んでいるの  
である。

資本自由化・輸入制限撤廃は以上の軍事・外交路線とあいまって、国内農業・中  
小企業者の反対を押し切って進められており三菱と防衛庁との結合、三菱・クライ  
スラー合併、富士・八幡合併など三菱資本の単一支配を狙った金融寡頭制支配の確  
立—帝国主義的社会再編が進んでいる。帝国主義は後進国のみでなく先進工業国を  
も市場再分割の対称とするのであり、戦後の重化学工業化は先進国市場再分割戦を  
深化させている以上、米帝の保護貿易の強化に對して資本自由化は日帝にとつて不  
可避なのであるが、この米帝との市場再分割戦の激化は、原料、労働力の安価な後  
進国市場を安定した勢力圏として確保しようとする衝動を日本帝国主義に形成して  
くる。資本自由化は国際金融危機のありを日帝に直接にもたらすであろうし、

の危機にあるのであり、サブロックの階級斗争が、世界革命戦争として自からを結  
合することによって、いよいよその動揺と分解を促進することによって勝利できる  
のである。これは、ブルジョア階級は生産手段を私有しており民族国家をその政治単  
位としているのに比して、プロレタリアートが鉄鎖のみしか失うべきものをもたな  
い階級であるという、基本的な事実に基づいていのである。赤軍派の諸君は、  
こうして実は、世界プロ独樹立に至るプロレタリアの権力斗争から召還してしまっ  
たのであり、攻撃的人間観なるコスモポリタニズム、疎外革命論によって自からの  
クーデター革命論、プロ独の否定—アナーキズムをこまかしているに過ぎない。  
(だから、彼らの世界プロ独論も、世界革命戦争の過程で分業関係の再編まで行な  
うというもの—世界プロ独—社会主義ということになり、世界プロ独自身も否定さ  
れるのである。)

彼らはこの五ヶ月の階級斗争の混迷の表現として登場したが、百万遍斗争として  
10・21へ向けての新たな権力斗争の方向が出現し、大衆的昂揚が形成されたとき分  
解せざるをえなかったのである。  
このことは二十二日、同志社赤軍派の下部活動家が京大サークル共闘その他とも  
に鳥丸今出川での街頭バリケード戦を闘わざるをえなかったこととして結果した。  
二十二日に、赤軍派が大阪の三ヶ所の派出所を襲ったことも百万遍斗争の波及力に  
対抗しようとしたのであったが、蜂起を準備すべきソビエト運動と結合しないグリ  
ラ活動の路線化は、「イデオロギーと関係がない。」として官憲に逆手にとられる  
結果となったのである。

こうして百万遍斗争は、真の革命派としてBUNDISSE—KIMを登場させ  
る第一歩となった。我々は10・21へ向けて、権力との全面的対決に入らねばならな  
い。京大では新たな大衆の分解が形成されている。権力—奥田大学当局は、機動隊  
を常駐せざるをえなかった。関大当局も京大に追随した。大学の自治—自主規制  
路線の権力との着は明白となった。そして闘いの方向は、10・21霞ヶ関中核占拠  
—中電マッセントとして示された。大衆の新たな昂揚は確実に拡大されつつある  
のである。この昂揚を組織したのは我々であり、継続して組織しうるのは我々のみ  
である。動揺する者をして動揺せしめ、大胆に大衆と結合せよ。全共闘に結集する  
大衆をすべて中電マッセントに組織せよ。すべての社学同は正規軍—地区軍団の  
一員へと自らを組織せよ。安保決戦の勝利へ向けて次に10・21をめぐる政治情勢と  
我々の政治方針について述べよう。

○日帝の不均等発展はドル危機を促進する以上日帝はASPAOとして形成しよ  
うとしているアジア勢力圏をなくすために円ブロック化する方向をもとらざるを  
えないのである。  
以上の日米関係の再編は、国際反革命同盟の再編が実は国際帝国主義の死斗であ  
り、にもかかわらず後進国革命戦争と帝国主義国プロのソビエト運動の昂揚に對し  
て反革命同盟を結ばざるをえないという帝国主義の危機としてあることを示してい  
るのである。西欧帝国主義と米帝との関係においても事態は同様に更に深刻に進ん  
でおりベトナム反戦斗争の反NATO斗争への発展と山猫ストの拡大との結合とし  
て階級斗争の新たな昂揚が形成されている。すなわちドル、ポンド、フランの過大  
評価に對するマルクの過少評価という不均衡は、西独への異常な資本流入をもたら  
しこのことによる西独の過剰資本、インフレーションの拡大は遂に西独為替市場閉  
鎖をもたらした。フラン切り下げとあいまった国際融資によるマルク切り上げの圧  
力に對して西独帝国主義は農業での仏帝との市場再分割戦上マルクの防衛を堅持し  
なくてはならないのであり、西独のマルク防衛によって平価切り下げを強要される  
英帝、仏帝、米帝と西独帝の対立が進行している。

この国際金融危機は、EBCをカナメとして英仏を統合せんとする西独とEBC  
への資本輸出を強化している米帝との市場再分割戦を潜在させているのであり各国  
での金融寡頭制—帝国主義的社会再編の強化が進み、中近東・アフリカをめぐる勢  
力圏争い—なくすし、ブロック化が進んでいるのである。  
こうして、NATO・安保再編は国際帝国主義の死の苦悶の現代的表現であり、こ  
の間の軍縮問題をめぐっての対立は経済的対立の政治的軍事的対立への転化を示唆  
しているのである。

すなわち、国際反革命同盟の再編はなくすしブロック化として反革命同盟の解体  
を内包して進んでいるのである。反革命同盟解体のメルクマールは軍事的には、日  
—西独帝の核武装、核保有であるが(核をもたない限り帝国主義の本格的戦略の確  
立は不可能)、このことは日帝、西独帝の国家形態の超国家主義的転換をとまら  
のである。日帝、西独帝におけるなくすしファシズムは市民社会内部にプロ独派  
と人民戦線派とファシズム派との三分解傾向を内包しながらも、帝国主義軍隊の強  
化を軸にした社会再編の中で、権力が人民戦線派とプロ独派を分断し、人民戦線派  
とファシズム派をいまだ明確に分化せしめ包摂しているものとして、存在してい  
るのである。インフレーションの増大と合理化の強化、軍事力の不断の増強に對し  
て生活を破壊される大衆の不満の累積は、帝国主義階級斗争の新たな昂揚を形成



してあり「NATO・安保粉砕、ベトナム革命勝利、ワルシャワ条約機構解体」の国際反帝統一戦線は、10・21斗争の西欧・米・日での統一した取り組みを突破口にして11・13—11・17と山猫スト、大学占拠斗争と反革命同盟粉砕とが結合した闘いによって、新たな飛躍を勝ち取るうとしていっている。今秋安保決戦はこの国際階級斗争の新たな昂揚の中で斗われようとしていっている。われわれの霞ヶ関中枢占拠—大阪中電マッセンストによって、この昂揚を世界革命戦争へと飛躍させねばならぬのである。

## ② 帝国主義のなしくずしファシズムと諸党派

だが決して帝国主義は自動崩壊しないのであり、世界革命戦争の勝利は血みどろの党派斗争を通してのみかちとられる。すなわち、国際帝国主義は、ソ連の平和共存路線の反革命的再編との結合によって、自からの危機を乗り切ろうとしていることである。国際帝国主義の危機—侵略・反革命の激化、後進国革命戦争の拡大、帝国主義国のソビエト運動の昂揚の中で、平和共存—人民戦線路線の破壊と解体が進行しており、帝国主義の高度成長に比して、ソ連特権官僚は帝国主義に屈服し、後進国革命戦争と帝国主義国プロを分断し、武装反革命の役割をかって出ることによって、自らの国際的地位を維持し国内プロを収約しようとしているのである。

①英帝・仏帝の後退に乗じた、中近東、インド、パキスタン、東南アジアの民族ブル、軍事経済、軍事ポナバルティズム政権への援助、②ソ連海軍のインド洋、東南アジア、日本海への派遣、③国連総会での地域集団安全保障—帝国主義者との反革命同盟の提唱、④西独、日帝のシベリアその他への資本輸出の承認、⑤チェコ、東欧に対するソ連防衛路線の暴力的押しつけなどがそれである。

そして、特に日帝・西独帝は一方でソ連との同盟を計りつつも、領土問題（オーデル・ナイセ問題、北方領土問題）などを媒介として、反ソ—反共ナショナリズムの形成をはかっており、国内共産党を屈服させ、プロ独派に対する反革命防衛隊の役割を果たさせつつ、侵略・反革命の強化を進行させているのである。そして中国派は以上の動向に対して、反米帝反修正主義路線を打ち出し、ソ連—社会帝国主義と規定しつつも、世界プロ独に向けて、三ブロック階級斗争を結合する世界革命戦争の戦術をもちえない事によって内部に於けるソ連派を完全に粉砕することができず、米中会談—中ソ会談—カナダを通じた国連加盟打診などプラグマティックな動揺を見せている。この事は、日・西独帝国主義の侵略・反革命の激化に対して対処しえず帝国主義国プロ独派を領導する戦術をもちえないところの反米・反ソ周辺革命—中

としての自衛隊の治安出動に関する防衛庁—警察庁での一致とテレビ・週刊誌での宣伝、右翼私兵の軍事訓練、大学立法をタテにの機動隊の相次ぐ導入、反戦派労働者のレッドバージなど、何が何でも佐藤訪米・日米共同声明を強行し、アジア侵略・反革命体制を完成させようとする日帝の治安体制の強化に対して—議会—組合に依拠してはいかなる闘いも展開できないにもかかわらず、議会—組合に依拠するのが人民戦線派である以上、彼らは屈服の道を選び、トロツキストの挑発—米日反動の強化を阻止するというデマの下にプロ独国際主義派の主力斗争を弾圧する役割をかってることによって、資本と取引しようとしているのである。こうして社共は十二月解散—一月総選挙に焦点を合わせており、安保決戦の昂揚を議会へと収約しようとしている。（岩井総評事務局長の「七十年代は自民党が議会の半数を割るので、社共を中心として連立政権を樹立するため、統一戦線協定を結ぼう」という提唱）

この人民戦線派の動向に対して、一方ではファシズム派—反米・反共派：「安保破棄・自主防衛・沖繩—北方領土返還」が萌芽の状態から伸張の傾向を見せている。日帝同その他の新生右翼がそれであり、ブルジョアジーは安保堅持をしながらも、日帝の侵略・反革命を強化することによって人民戦線派とファシズム派の双方を統合している段階が現在なのである。我々が日帝の権力再編とその世界戦略をなしくずしファシズムと呼んでいるのはこのことであり、この権力性格は、国際階級斗争の一時代的停滞（いわゆる平和共存体制）—国際帝国主義の相対的安定期から世界革命戦争が帝国主義戦争—体制間戦争かがとられる時代における、国際帝国主義の権力再編の一環なのである。現代過渡期世界において、議会制民主主義の支配体制が危機におち入るとき—プロ独派の公然たる登場—革命的激動期においてブルジョアジーは小ブルを中心として、ファシズム派を形成し結合するのであるが、現在ではいまだ議会制に依拠しつつ、帝国主義軍隊—金融資本—官僚—帝国主義的労働組合を主軸にした支配を行っているのである。だから自民—民社—公明の連立構想が農業人口の減少—都市化に対する自民党の議会多数派維持構想としてあり、公明—民社の婦スウをめぐって人民戦線派との対立が存在する（岩井構想）。そしてこの対立はプロ独派の公然たる登場—ブルジョアジーの決定的危機が自民党のファシズム派（三菱を中心とする旧財閥—大地主に依存する部分）と人民戦線派（新興ブル—中小企業—中小農民に依拠する部分）との分裂をもたらすことによって本格的なものになるだろう。しかし、我々にとってはこれら総体を共に解体し、これらの対立に惑わされている全人民をソビエトMへと組織していくことのみが問題なのであ

間地帯論の明白な破壊なのである。

以上のように、国際帝国主義の危機は、国際プロレタリアートの指導の危機なのであり、現代国際主義派は世界党への飛躍を目指して国際的党派斗争に勝ち抜いていかななくてはならないのである。現在、後進国革命戦争は帝国主義国ソビエトMと結合し、NATO・安保—国際反革命同盟粉砕を帝国主義国プロと共同して斗わぬ限り、その分散性・個別性・民族性から飛躍することができず、攻勢から守勢へと転化せざるをえないのである。第二回国際反帝集いに結集した、西独SDS、米BPP、SDS、日本BUND各組織の任務は重大であり、10・21をもって開始され十一月中旬に至る「NATO・安保粉砕—ベトナム革命勝利」斗争のもつて開始されるまでの同時的展開の中で、世界階級斗争の構造的転換が勝ちとられるか否かが問われているのである。この課題はNATO・安保粉砕斗争が①中央権力斗争—マッセンストとしての本格的展開、学園占拠ゲッター占拠の工場占拠への拡大と中央権力占拠斗争の同時的展開。②党の正規軍の建設と労働者・学生の地区軍団—武装民兵への組織化、③地区—全国にわたる労働ソビエトMの波及を実現しうるかどうかということである。この階級斗争の構造的転換は、ひとえに革命主体の飛躍を条件としているのであり、「国際主義と組織された暴力」の内容が問われているのである。

愛知・ロジャーズ会談によって「沖繩返還」の内実が確定されたことで、国内階級斗争は新たな流動を開始している。一方では共産党及び沖繩屋良主席の「佐藤訪米には反対せず、その内容を変えていく」という屈服が生まれており、社会主義協会派が次第に吸引されている。この人民戦線派の日帝への屈服は単なる戦術的な屈服でなく、排外主義への転化の決定的段階へ入ったのである。彼らは①「沖繩返還」—「北方領土返還」という日帝のナショナリズム攻勢に完全にまきこまれていのである。共産党はこの日帝の「独立」「自主防衛」「領土拡張」の方向に対して「対米従属を深めるから反対」という反対の仕方はすでにできなくなっている。そして、「北方領土返還」—シベリア開発をからめて「沖繩返還」が提起されているとき「NATO・安保粉砕—ベトナム革命勝利—ワルシャワ条約解体」のスロ—ガンの下、国際反革命同盟がソ連をもくみこみつつ再編されようとしていることを徹底的に暴露し、世界プロ独へ向けた世界革命戦争の一環として安保決戦が存在することを認識して斗わぬいかり決して国家権力を打倒する闘いへとむかうことができないのである。②人民戦線派の屈服—排外主義への転化の原因の第二は、この間の日帝の階級斗争に対する徹底した弾圧であり権力再編である。「支援後援」

る。そして世界プロレタリア独裁樹立に至る、我々の党派斗争は、権力が基本的に未だ人民戦線派を排外主義へ組織することによってプロレタリアートを支配する形態をえらんでいる以上、人民戦線派に対する徹底した党派斗争が基軸でなくてはならないが、この党派斗争に我々が勝利していけばいくほど、ファシズム派が形成されるのであり、革命か反革命かを問う階級決戦は、七十年代において、国内—国際的には、プロ独派—人民戦線派—ファシズム派の間で争われるだろう。この時人民戦線派は反ファシ—統一戦線として階級斗争を収約しようとするのだが、我々は、人民戦線派とファシズム派が基本的には共通してプロレタリアートに敵対していることを帝国主義の批判を通じて明らかにし、ソビエト権力樹立を世界革命戦争の一環として現代過渡期世界総体の変革の展望を世界プロ独として明らかにしつつ遂行していかななくてはならないのである。

## ③ 大衆的昂揚と反帝統一戦線内の党派斗争

さて、帝国主義国家権力のなしくずしファシズムへの推転と、人民戦線の排外主義への決定的転化にもかかわらず、大衆的昂揚は明確に形成されつつある。

①沖繩反戦復帰派の分解は、日米両帝帝国主義に対決する方向に進んでおり、10・21—11・13セネストの爆発は必至である。②9・15関東反戦集会への四〇〇名の結集を契機として、全国反戦の実質上の再建が、構改左派と社会党中央との分裂的対立を通して行なわれたこと。（社会党十総評は別個のカンパニア機関—反戦中央協議会を提起するに至った。）この再建全国反戦と全国全共斗を中心にしての10・10東京10万の結集も確実。これらの動きは、沖繩返還のロコツを内実に対する大衆的噴激を契機として帝国主義的社会再編の中で蓄積されていた不満が政治的展望をもつて一挙に爆発しようとしているのである。ブルジョアジーはこの昂揚に最も敏感であり、「社会資本の拡充」を唱えることによってささえようとしている。しかし、このことも日帝は、金融資本の道路、港湾の拡張に対する要請を優先させて行なうのであり、後進国資本輸出は、すべてに優先され、ASPAO体制として運輸・通信—「社会資本」部問の合理化が強行されている現在の中では、階級対立の非和解性はますます明らかになりつつあるのである。物価・住宅問題・交通事故・医療問題などは、資本が利潤を求め市場分割戦をかけて斗っている以上「やむをえないもの」としてますます拡大していくであろうし、資本自由化の中で、農業・中小企業の解体も進むであろう。（食管制の解体—米価格の統制。中小企業保護の停止）基本的に、帝国主義は旧財閥—特に三菱—を中心にして、すべての経済の独占と、

政治の独占をはかることによって、世界市場分割戦に勝利しようとしているのであり、このことから生ずる人民の大多数との敵対を、反共ナショナリズムを徹底的な治安体制の強化の上に立ってうえつけることによって、強行突破せんとしているのである。この体制が「帝国主義軍隊—金融資本—官僚—帝国主義的労働組合」であり、コンピューターを軸にした個人の地域別での管理体制である。(道州制など)このように、日常次元にまで権力の統制がゆきわたり、思想統制にかかろうとし、諸個人を労働力として徹底的に管理しようとするとき、プロレタリアートの反撃は根底的・全体的なものとなり、現代過渡期世界の本質に迫らざるをえないのである。そして、プロレタリアートの階級的利害の徹底化した追求が全人民を組織することができるのである。

このような大衆の昂揚に押し上げられて、構改左派の左傾化が特徴的である。共労党・統社同の党内斗争は左派の勝利に終り、彼らは「沖繩奪還」のスローガンを「民族的」としてとり下げ「沖繩の日本共同管理体制粉砕」「米軍政打倒」「本土—沖繩基地撤去」を唱えるにいたった。「攻撃的政治斗争」「NATO—安保粉砕—ベトナム革命勝利」のスローガン「10・21決戦—中央政治斗争と政治拠点スト」など、この間の構改左派の我々への接近はいちぢるしい。中核派も基本的には、一時の陶山—労働M派の台頭から再度左傾化し、「十一月決戦—肉弾の思想」を唱えるに至っている。ただし、中核派の場合「沖繩奪還—安保粉砕—日帝打倒—アジア革命—世界革命」論の破産は余りにも明白であり、「核つきでも返還されたらよい(するはずがない)」「本土復帰は民主主義斗争として意味がある」などと言っていた手前、「佐藤訪米実力阻止」の論理が全くはつきりせず、その反帝反米戦略—全般的危機論の全面的な総括が迫られているのである。彼らは4・28斗争・ASPAC斗争の総括を恥ずかしげもなく「大勝利」として宣伝してきたが、安保決戦を前にして、その階級的重みに耐えきれず「肉弾の思想」なる決意の強制を同盟員に押しつけることにヤッキとなっているのである。

反帝統一戦線内の党派斗争はこのような諸党派の動向の中で、大衆の昂揚をいかに組織し、権力をいかに打倒するかをめぐる、①十月決戦か十一月決戦か、②斗争形態—革命論、③武装—軍団形成、④沖繩斗争のスローガン、⑤安保決戦の世界戦略上の位置づけ、⑥世界戦略そのもの—過渡期世界論の六点において争われている。反帝統一戦線としては、帝国主義と人民戦線派に対する党派斗争であるが、反帝統一戦線内部ではわれわれと中核派との党派斗争である。ここでは主に①②③に限って中核派を批判しておく。中核派は、①十一月決戦、②10・21新宿斗争、

我々はいま、4・28斗争以降、同盟の解体的危機を賭けて斗ってきた党内斗争の教訓を無駄にしてはならない。「10・21霞ヶ関中核占拠—大阪中電—北大阪—帯マッセスト」を同時蜂起で斗い抜くことを徹底的に宣伝、扇動し、大衆を組織し、十一月決戦論、中央騒乱論を粉砕しなくてはならない。中央権力斗争自体がマッセストの同時的展開によって、騒乱の域から飛躍しうるのであり、10・21がそれ以降の四週間、あるいはそれ以降の斗いの性格を決めるものとして煮つまってきている以上絶対的10・21が最高の戦術をもって斗わねばならぬ斗いとして存在する。10・21を新宿斗争などとして斗えば、佐藤帝国主義政府実力打倒斗争として斗わなくてはならない斗争の性格が全くボケてしまし、以降の斗争は、反米反革命斗争に終ってしまし羽田斗争として結果せざるをえない。かつ、10・21を最高の戦術で斗うとするならば、まず霞ヶ関中核占拠斗争を断固としてカネツツすることであるが、この霞ヶ関中核占拠斗争が4・28斗争を一步越えようとする場合に、軍—武器の登場をもってそれ自体をエスカレートさせると同時に、拠点との結合、権力の下部構造の破壊が不可決なのであり、大阪中電—北大阪—帯マッセストはそのようなものとして、霞ヶ関中核占拠と固く結合して、10・21同時蜂起として斗われねばならないのである。10・21斗争がこのような斗いとして斗われて初めて、全国政治斗争における力関係の転換と拠点の拡大が勝ちとられるのであり、一方で再度の中央権力斗争が十一月月中旬へむけて組織されていくであろうし、一方では公労協(特に国労)、自治労その他、大学拠点における斗いも拡大し、これらの結合はさらに大きなうねりを十一月十九日佐藤訪米に至る四週間においてつくり出すことが可能となるし、地域スト突はその実体を中央権力斗争とマッセストの機関として獲得していくだろう。正規軍—地区軍団を形成することによって我々のみがこの斗争の昂揚をひきだしうるし、以降の巨大な流動をもケン引できるのである。10・21が近づくに従ってこの決戦を端初的蜂起として考えず、正規軍—地区軍団を準備していない諸党派は、権力の予防反革命と大衆の昂揚の間にはさまれて動揺を深めるだろう。そのようなものとして必ず煮つまっていく10・21安保決戦の突破口を我々は断固として徹底的に斗い抜くならば、必ず大衆の昂揚と結合することができるのである。

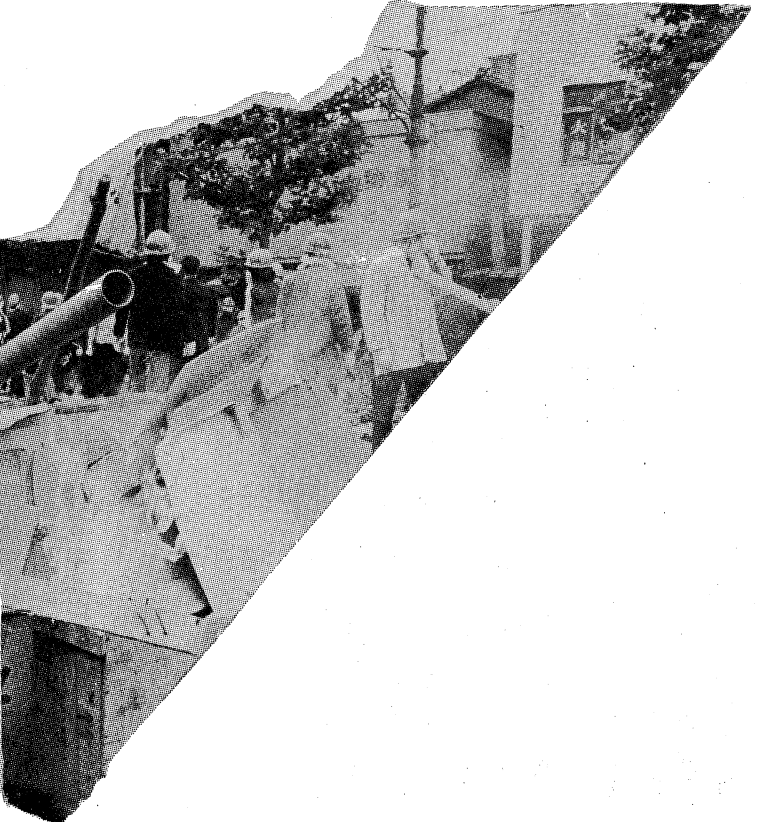
現在すでに萌芽的に出てきている十一月決戦論、新宿斗争論、10・21全力中央結集論などは、こうしてさまざまな左翼的言辭で粉飾しているけれども、決定的な斗いを回避し、ひきのばし、党派を防御しようという、諸党派の日和見主義の表現にすぎないのである。彼等はなまじ決定的な「10・21霞ヶ関中核占拠—大阪中電—北

十一月中央結集—中央騒乱及び拠点政治スト、③「肉弾の思想」で学生・労働者の武装軍団を形成するといっている。①②は誰でもが認める決定的な誤りである。

④権力の対応は、10・10以降の戒厳令状態に入る準備をしているのであり、10・21で突破口を切りひらかない限り、以降の「決戦」は不可能となる。⑤十一月決戦は羽田斗争を軸とせざるをえず、総評・社会党とスケジュールを合わすことになるが、これは「訪米阻止」を政策阻止斗争と考えていることである。「訪米阻止」は国際反革命同盟粉砕であり日帝の権力再編の粉砕であることは、安保決戦をいかなる権力斗争として斗うことができるかどうかと問われているのである。すなわち、訪米前に佐藤が訪米できないような政治危機を創出することであるが、このことは一般的騒乱斗争では到達できないのであり、端初的武装蜂起の型—現代革命論の本質的な課題が問われているのである。中核派の「10・21新宿—十一月中央騒乱及び拠点政治スト」は、大衆のやりやすい斗争を徹底的にやるというだけのことであり、人民戦線派の転落であり、階級斗争の構造転換を実現しえないのである。端初的蜂起の型とは「霞ヶ関占拠—大阪中電—北大阪—帯マッセスト」であり、軍団に荷われたソビエトMの飛躍であるし、地区—全国労学評議会建設に向けた、全共斗労働者共斗会議・反戦の再編である。⑥の「肉弾の思想」による学生・労働者の武装については、④武装の決意は、革命戦略に裏付けられたものでなくてはならないが、その革命戦略の破産を「肉弾の思想」なる思想なき肉体(実存?)主義で置きなうことは、革命党派として墮落である。⑦4・28斗争の水準から軍事の飛躍が要求されているのであり、党の正規軍—地区軍団—全共斗—反戦行動隊の党形成論—階級形成論での位置づけがない限り、そのような軍事を組織できないことを指摘しておこう。これまでの中核派一流のプラグマチズムと官僚統制では斗いえないものとして安保決戦があるのだということであることを老婆心までいっておく。

プロ学同、フロントは、一年前の我々を水で薄めたようなことを云っているが、軍団建設を要した党組織論—ソビエト運動論が不在であり、このことからいられるものとして、世界プロ独について曖昧であり、世界党—世界赤軍—世界反帝統一戦線の観点から、党—軍—統一戦線の組織論を導き出すことが出来ない。彼等に対しては沖繩斗争論を総括させることから、戦略論を人民戦線派に対する党派斗争抜きで客観主義—主観主義としてたたく、世界—一国同時革命論を認めさせなくてはならない。また「中央政治斗争—拠点政治スト」の提起に対しては、組織方針、軍事方針の欠落を糾弾しなくてはならない。彼等は自分達では実行できない政治方針を提起していることになるのであるから。

大阪—帯マッセストの意味を知っているだけに、自らの党派が解体されかねないことを感じて、BUND—SS—KIMに对立してきているのである。かつてロシア十月革命において、ボリシェビキに对立して、ケレンスキーが云い、エス・エルが云ったように、今、我々に対して諸党派が「蜂起できるものならやってみろ」と云いだし始めているのである。客観的には諸党派はこのようなかたちで我々のみしか安保決戦をケン引する党はないことを認めているとも云える。我々はレーニンと同様に彼等に云ってやる、動揺する者は動揺せよ。大衆は我々の側にあり」と。10・21まであと三週間、社学同は正規軍—地区軍団へと自らを飛躍させ、全共斗行動隊を組織し、徹底的な党派斗争を遂行せよ。70年代階級斗争に対する確信を持って、断固として安保決戦の先頭に立て!



# 第三章 安保決戦と党の革命

(十月十六日執筆)

## (I) はじめに

10・21斗争を直前にひかえ、10・21斗争のもつ階級的意義とわが同盟の任務がますます鮮明になりつつある。いまや一切の準備は完了しつつあり、われわれはすみやかに残された準備を完成させるとともに、ためらうことなく戦闘に入らねばならない。

この歴史的戦闘に入るにあたり、われわれの確認点を再度簡単に整理し、戦闘準備の最後の追いこみに役立てることにしたい。

## (II) 10・21と同盟の歴史的位

10・21斗争の準備が進むにしたがって、わが同盟の戦略論の正しさが立証されるところに、わが同盟の位置の決定的な重要さが鮮明になりつつある。われわれはすでに、4・28斗争総括のなかで、日本における斗争も、世界革命戦争の質でもって斗われない限り、権力のなしくずしファシズム攻撃によって粉砕されてしまうことを確認してきた。

そして、この世界革命戦争はなによりも日・米をはじめとする帝国主義列強における内戦の開始としてとらえられねばならず、こうして世界同時革命の内実の具体化は、必然的に、「帝国主義戦争を内乱へ」といったレーニンの古典的テーゼの再検討をせまったのであった。われわれは9回大会において、世界同時革命の戦略を、「前段階決戦を革命の勝利へ」と具体化し、従来の革命運動に対する革命家の価値観の転倒をおし進めたのであった。

この価値観の転倒の中軸は、軍事問題にあった。すなわち、すでに確認すみのことであるが、レーニンにおいては、帝国主義軍隊の解体が革命情勢の客体的条件とされること、この世界革命戦争はなによりも日・米をはじめとする帝国主義列強における内戦の開始としてとらえられねばならず、こうして世界同時革命の内実の具体化は、必然的に、「帝国主義戦争を内乱へ」といったレーニンの古典的テーゼの再検討をせまったのであった。われわれは9回大会において、世界同時革命の戦略を、「前段階決戦を革命の勝利へ」と具体化し、従来の革命運動に対する革命家の価値観の転倒をおし進めたのであった。

さらに、この事態は、単に街頭斗争のみ見られるものではない。学園においては、すでに先行的に進んでおり、それは全共斗の従来の斗争のパターンである徹底抗戦戦術を古ぼけたものにしてしまっている。また労働運動に対しても例外ではない。中電―北大阪一帯マッセントの組織過程は、労働組合に対する一切の常識をふっしょくしない限り理解できない内容でもって進行している。

こうした情勢の進展のなかで、わが同盟のみが最も首尾一貫した戦略を確立しているのであるし、日本階級斗争の新しい地平を切り拓く光栄ある任務を果さねばならないのである。わが同盟の重大さは、単に戦略論における優位性ととどまるものではない。それは何よりもわが同盟が、新たな戦略に導かれた革命的戦術を具体化する唯一の党派としての物理的・理論的蓄積をもっていることである。

われわれが労働者階級の斗争を日本階級斗争の最前線へとつき出し、その拠点斗争を軸に労働運動の新たな型を形成すべく提起した中電マッセントが、単にわが同盟の拠点であるにとどまらず、革命的左翼内部においても最大の拠点であることが確認されねばならない。いかえれば、われわれは労働運動の最先端を切り拓く位置におかれているのであり、また逆にいえば、そのような拠点をつくりえた唯一の党派なのである。

次に確認しなければならないことは、中央権力斗争の出撃の拠点としての神田地区におけるわれわれの圧倒的なゲモノの存在である。諸党派が権力のなしくずしファシズム攻撃による重苦しい雰囲気の中で、戦略的な観点を忘れ去り、もっぱら即目的な大衆との結合にむけて安易な武装斗争を提起していることに對し、われわれこそが、中央権力斗争の軍団を形成してゆくに最もめぐまれた条件を獲得しているのである。

この二要因は、もちろん、われわれのこれまでの党活動の蓄積によるものに他ならないが、これらの蓄積こそがわれわれがいまあらゆる党派にさきがけて世界革命戦争を担う革命の正規軍として世界赤軍の建設に着手しうる条件なのであり、そして、われわれの勝利の保障である。

して前提されており、革命家の任務は、敗戦によって解体した軍隊をいかに革命の軍隊(赤軍)へ組織してゆかが課題にされていた。だが、「前段階決戦を革命の勝利へ」と提起するならば、それは、「平時」からの帝国主義軍隊の解体＝革命の正規軍の建設という、従来のマルクス主義の常識を超えた問題の解決をせまられているのである。(ここで使用している平時はカッコつきの平時であり、その意味は過渡期世界においては、革命への客体的条件は平時から成熟しており、その意味では平時においても危機が存在していることであり、単なる平和時との区別が必要であるからである。)

われわれは、この困難な課題を、世界同時革命を実現すべき世界プロ独権力の樹立として確立し、そして、この樹立されるべき世界プロ独権力の性格は、世界一國同時革命としての質(「労働者国家」におけるプロ独の樹立が、世界プロ独と同時)をもたねばならないことを明らかにし、このような質の革命が、世界赤軍による世界革命戦争によってしかありえないことを確認してきた。と同時に、こうしたわれわれの戦略的内容が、単なる主観的願望ではなく、過渡期世界の成立以降の階級斗争の全過程が世界同時革命に向けての客観的条件を準備しつつあることを明らかにしてきたのである。

ところで、いま、われわれの眼前でくりひろげられている事態は、まさしく、この日本において、従来の常識を打破するかたちでの情勢が存在していることを示している。まさしく革命に対する価値観を転倒させ、一切の常識にとらわれることなく大胆に進む者以外には、10・11月斗争の戦力にすらならないことがますます鮮明になりつつある。

即ち、10・21中央権力斗争が、すでに4・28において鮮明になったごとく、従来のカンパニア的中央権力斗争の組織論であっては聞えないことである。その場合は斗争の組織過程において武装解除され、その結果、単なる平和デモにまでおしこめ

## (III) 革命戦争の戦略

10・21斗争をとりまく諸条件は、このようにわれわれに有利に存在している。では、われわれは死活をかけた10・21斗争を突破口とする安保決戦において、階級斗争のいかなる地平が切り拓きうるかが次に確認されねばならない。

安保決戦において、階級斗争のいかなる地平が切り拓かれねばならないか。この問に対してわれわれは鮮明な解答を与えることが出来る。それは、諸党派も語る如く「世界革命の現実性を獲得する」ことに他ならないが、その内実こそが問題である。中核派は、機動隊を粉砕するというそれ自体は全く正当な目標を一面的に美化し、世界は全般的危機だから機動隊をせん滅すれば階級斗争の質的転換が獲ちとれるかの如く夢想している。だが、このような夢想こそ戦略なき政治過程論に他ならない。われわれは、機動隊をせん滅するために自己の肉体を弾丸とせよという中核派の思想なき肉体に對し、まさしく正しい革命思想と戦略を確定することによって、困難な戦闘に耐え抜く戦士を生み出すことが出来ることを身をもって示さねばならない。

赤軍派は革命戦争を戦略的に位置づけることが出来ず、世界プロレタリアートの形成という観点から思想的に位置づけることにとどまったが故に切り拓かれるべき革命戦争が革命戦争の存在と混同され、革命戦争の存在を前提としたが故に軍事を組織する党の革命が欠落し、党の軍への乗り移りが進んだのであった。

だから彼らの世界革命戦線の提起は、彼らが提起している意味において獲得しえず、ブルジョアジャーナリズムによって幻想的に誇大宣伝され、大衆からの一定の共感を得つつもついに戦争が登場しえないことによって破産してしまっているのである。

その他の諸党派が安保決戦において新しい役割を果たしうるかどうかは特に軍事問題の点においておよそ問題になりえない。だから次に、われわれの内容が確認されねばならない。

その第一は、69年以後の階級斗争は好むと好まざるとにかかわらず戦争の質をもつて斗わざるを得ないことである。第二は、この階級斗争の新たな質に對してわれわれが恒常的武装斗争を展開し、世界革命戦争を開始するために党の飛躍が必要であり、軍事を組織しうる党への飛躍をわれわれがなしとげねばならないことである。第三は、この切り拓かれるべき戦争の質をもつた70年代階級斗争を勝利的に展開しうるかどうか、69年秋の安保決戦におけるわれわれの斗争にかかっていることである。第四に69年代の斗争は、われわれの党の飛躍と同時にプロレタリアート

の斗争総体を新たな質へと領導するという二つの任務が、われわれの双肩に荷せられて、これを確認しなければならぬ。そして第五に、これら一切の事態が党直轄の革命の正規軍としての共産主義突撃隊の建設によって切り拓かれることが確認されなければならぬ。

第一の「70年代階級闘争が戦争の質をもたざるを得ないこと」は、次のように理解されねばならぬ。

まず、合法的大衆組織（労働組合、自治会など）の総体をまきこんだ（その大衆組織に於ける多数決原理に従って）大衆闘争の時代が終り、いわゆる「バリケードの思想」に立脚した政治闘争が定着したことである（バリケードの思想とは、多数決原理を否定した、直接民主主義の立場であり、組織の中の少数派が自らの行動をもって多数をひきつけ、自らを多数派へと転換させることである。こうした質の闘争が持続しうるのは、合法的大衆闘争組織がブルジョワ支配機構の一角に組み入れられたことによる）。

このような事態は、帝国主義権力が合法的大衆組織を政治的、思想的に統合する力をもたえず、諸階層の対立が、大衆組織を分裂させることによるが、このことは、過渡期世界における帝国主義の反革命同盟の存在に規定されている。すなわち、帝国主義の侵略が、反革命同盟の大枠の中での侵略として進行している間は、帝国主義権力の国民統合力はその内部に様々な階層分裂を生み出さざるを得ないのである。そして、この階層分裂がプロ独派を登場させるとき、帝国主義権力はプロ独派を抑圧し、そのことを通じて、人民戦線派及びファシズム派を自己の基盤にしようとするのである。

この帝国主義国におけるプロ独派の登場による階層分裂の進行が、戦争の条件を形成しており、プロ独派の登場と前進が、これら三つの分裂を進め、そのことによって、帝国主義権力の存立基盤がゆらぎ、階級闘争は戦争の質をもった地平に到達するのである。

植民地従属国においては、民族解放戦争としてはじまり、やがてそれが世界革命戦争へと飛躍せんとするとき、帝国主義国における戦争の質を解明することが迫られるが、帝国主義国における戦争は、この諸階層の分裂の中にその条件があるのであり、従って、プロ独派が直接自らの暴力と組織によって大衆を集約してゆくソビエト運動の質が要求されるわけである。

すなわち、共突は単に選出されるだけでは機能するものではなく、従来の党の活動と組織をその選出過程において飛躍させることなしには活動しえないのである。

共突の選出は何か突撃専門の部隊が形成されそれが戦闘を請負うことでは決してない。まさしく、党総体が戦闘を担わなければならないが、党総体が戦闘のための組織活動を担わなければならない。

党がそのような飛躍をとげることによって、党の正規軍としての共産主義突撃隊の任務を明確にすることができるのである。もちろん、個々の戦闘における最も困難な任務を、共産主義突撃隊が担わなければならないことは前提条件である。この党の武装と、党を中心とした軍団の建設が進むことによって、われわれは来るべき非合法下における広汎な政治活動の領域を獲得しうるであろう。

軍事問題を回避した政治問題は、今日ではもはや空語でしかないであり、なによりこの党の飛躍の内容を意志統一してはじめて、われわれは政治を語る資格を獲得しうるのである。

反帝戦線は、この党総体の飛躍による武装と、共産主義突撃隊の建設を前提としてはじめて、画期的な内容を獲得することができる。反帝戦線は赤ヘル軍団であり、それは今日の反帝統一戦線を飛躍させる領導力である。

10・21斗争の過程で、党の飛躍を獲ちると同時に、反帝戦線を新たに組織すること、ここに安保決戦における党の革命の内容が結実している。そして、10・21斗争の勝利の展開はその後の安保決戦における共産主義突撃隊と反帝戦線の急速な拡大の条件を形成するのである。ここに現代革命の核心的内容があることが確認されねばならない。この基本軸を確認した上にたつて、われわれはあらためて全共闘運動・労働運動等に対する指導の問題を明らかにしなければならぬ。さらに、党の独自活動の領域についても、この新しい観点から再検討がされねばならない。

まず第一に確認されねばならないことは、革命の正規軍の建設によって、われわれと権力との力関係は変化し、そのことによって、全共闘運動の新たな展開が可能になることである。

全国全共闘が連合体としてしか機能しえない現実に対し、われわれは各大学全共闘内部に巨大な反帝戦線を結集することによって、全国全共闘を戦略部隊へと領導してゆかねばならない。その際、徹底抗戦派やバルチザン軍団派といった傾向を克服することが不可避の要因であるが、これら二つの傾向が過渡期世界においてわれわれにつきつめられている軍事問題に対する自然発生性として生まれている以上、われわれの戦略的な軍事の正規軍の下に包摂される内容をもっているのである。

第二の、「党の飛躍の問題」は、周知のごとく「前段階決戦を革命の勝利へ」導くべき革命の軍隊の建設が「平時」から要請されており、そのような軍事を組織する党への飛躍として確認されてきた。だが、この軍事を組織する党への飛躍は、党そのものの組織の型の革命であり、それは単に共産主義突撃隊の選出や新戦略内容の確認に留まるものではなく、党の基本組織において、細胞の末端に至るまでその活動の質を飛躍させるものとして提起されねばならないのである。

そして、この党の飛躍を前提として、統一戦線の再編を中心的に推し進める部隊として赤ヘル軍団としての反帝戦線を組織してゆかねばならない。

第三の、「69年10・21安保決戦」は、70年代階級闘争の序幕であり、階級闘争が戦争の質をもった闘いである以上、恒常的武装闘争を展開しうるかどうかを要めである。したがって安保決戦は恒常的武装闘争の準備なくして闘いきれないものとしてある。

それゆえ、第四の問題として、「党の飛躍と統一戦線の再編」がそのような意味として問われているのであり、

第五の「共産主義突撃隊」はその組織化、及びその活動の中に飛躍すべき党の内実の結晶が存在するものとしてある。

このように、われわれの共産主義突撃隊（革命の正規軍）の建設と、それによって10・21以降切り拓かれる安保決戦は、まさしく階級闘争の世界史的転換点として存在していることが確認されねばならない。

#### (IV) 軍事を組織しうる党への革命

10・21闘争をめぐる諸条件は明らかにされた。われわれは、これらの諸点を確認した上に立って、わが同盟が秋にいかなる飛躍をかちとらねばならないかを明らかにせねばならない。

われわれは、既に九回大会以降、今日までの共産主義突撃隊建設過程において、共突を選出すること自体、従来の革命運動の常識を打ち破ることなしには不可能であることを総括しうる。そして、この過程は同時に、個々の同志たちが一人一人より高次の質を獲得することを抜きにしては一步も前進しえないものでもあった。

そして、既に共突が選出され、軍団としての機能を発揮する時点において明らかになった問題は、細胞や支部レベルや、また個々の同志たちの飛躍の問題にとどまらず、総体としての党の飛躍が死活問題として問われてきたのであった。

一方、地区反戦や、労働運動の内から輩出している戦闘的活動家を反帝戦線に組織し、戦略的マッセントを継続的に展開することによって、われわれは、人民戦線派の立脚基盤を解体させ、プロ独派の独自の基盤を確立してゆくことができる。

とくに、労働運動においては、軍団による武装ソビエト運動を継続しうるかどうかが決定的な問題として存在している。なぜならば、単なるヤマネコストは労働者の階級的団結をソビエト運動として明らかにできず、労働組合に抱括される内容をもつがゆえに、人民戦線派の左からの補完物として集約されてしまうからである。

中電―北大阪―マッセントによって索引され、全国で統々と形成されつつあるスト実を、プロ独派のヘゲモニーで領導するのか、それとも、人民戦線派の補完物に歪小化させてしまうかが、まさしくわが同盟の共産主義突撃隊と反帝戦線の双肩にかかっているのである。



# 第四章 10・21の敗北の総括

(十月三十一日執筆)

## (I) 総括の方法(同盟の弱点とその克服)

10・21斗争において、われわれは政治的にも軍事的にも敗北を余儀なくされた。そして、この敗北の内実は、10・21斗争が、同盟の全力量を集中してとりくまれることがなかったことにある。だから、総括の第一の視点は、安保決戦として提起された10・21斗争にわれわれが何故同盟の総力量を結集しえなかったのが解明されねばならない。

この同盟の総力を結集しえなかったことは裏がえせば、同盟の解体が進行していることに他ならない。そして、この同盟の解体は、何よりも、この間、われわれが包括した階級斗争の転換が、現実のものとして進行していることを示しており、そして、同盟総体が、この階級斗争の転換を主体的に切り開く方向性を未だ獲得していないことを示すものに他ならない。

だから、われわれは、総括の内容を、単に、従来の総括の方法のワク内で考えることは出来ない。すなわち、現在われわれが直面している階級斗争の転換を主体的に切り開くための党の準備がどのようなものであるかを明らかにすることが基軸にされねばならないのである。

第2に、とくに、われわれの停滞をはなれだしたものは、拠点大学において、われわれがつかって来たいわゆる「主流派ヘゲモニー」が10・21斗争においては発揮しえず、従来のわれわれの弱点である組織活動の弱さがモロに露呈したことがある。このことは、階級斗争の転換の要因をからめ、われわれの停滞に拍車をかけたのであった。

第3に、しかしわれわれの敗北は、「他党派がやりやすいところで闘う」というプラグマティズムに対して、戦略的に高次元斗争を提起したが故に、逆に、この敗り開くべき自然発生性をうちに秘めながらもそれを実現しえなかったことを意味しており、党の指導が決定的なものとして、問われていたのであった。

だからまずもって現段階の全共斗運動に対する正しい評価をなさねばならない。その際、わが同盟においても、全共斗運動や労評運動に対する統一的理解がなされていないゆえ、ここで簡単に整理しておくことが必要であろう。

全共斗運動や労評運動(マッセンスト)等をソビエト運動として規定することはまちがっている。それは、過渡期世界においては改良斗争すら、合法の大衆組織から自立したソビエト型組織によって担われること以外の何ものでもない。それゆえ、今日の革命党は、この労働者階級の階級形成に対する目的意識性をもって指導せねばならず、ソビエト運動とは、現段階においては、革命党の指導の内実の一つとして理解されねばならない。

ところでこれらの内容規定に一定の混乱が生じたのは、次の理由にもとづく。この全共斗運動や労評運動が一つの新たな地平を切り開くためには、すなわち、その端緒においてはまさしく、そこに全階級の攻防戦が展開されざるをえず、それ自体全人民的焦点を形成することである。この端緒における全共斗運動の質と、それが全大学に波及した時点でのその質とは、明確に区別されねばならないのである。

今日の全共斗運動の質は改良斗争であり、それがそれ自体として全人民的政治斗争へと転化することは、党派の指導を媒介しなくてはありえないことなのである。さらに、この今日の全共斗運動の質を規定しているものは、権力との関係である。全共斗運動がソビエト型組織に立脚した運動であるがゆえに、それは大衆の武装を生命力としていた。権力が全共斗運動の武装を解除することによって、全共斗運動の社会的な波及力は急速におとろえてゆくのである。(地方都市においては、いまだ全共斗運動の武装は解除されておらず、徹底抗戦の成立する基盤が存在している。

10・21北大)

ところで、一方、全共斗運動は、改良斗争がその形態をかえ、それゆえその質をかえる可能性をもったものとしてとらえられねばならず、その出現は革命党の飛躍を要求したし、この要求に応えることの出来ない党派は解体を余儀なくされるのである。構改諸派の左傾化は、この全共斗運動がもたらした階級斗争の新たな地平のなかで、党派を解体されまいとし、必死に左にカジを向けた結果である。

そして、反革命の強化による全共斗運動の武装解除は、決して全共斗運動を消滅させることは出来ない。なぜなら、それは、過渡期世界における帝国主義的法則的運動の帰結であり、さらにわが同盟の飛躍によって、階級斗争の質的転換を内戦の

北を、非常に貴重な教訓として総括しうることである。すなわち、われわれが試みようとしたものは階級斗争の転換を主体的に切り開くべき新しい質をもった斗争であり、その意味では、10・21の敗北は、一時的敗北にすぎず、むしろわが同盟の弱点を鮮明にし、克服すべき方向をひき出した点において、その視点をさだめねばならず、精算的な総括は一切ありえないことである。

第4に、とくに、軍事技術的な面において総括すべき豊富な内容があることに注目しておかねばならない。(この点は別途提起する)

## (II) 全共斗運動の現段階の評価

最初に確認した如く、総括の最も中心的な内容が、階級斗争の質的転換にあり、同盟の敗北も、基本的には、こうした要因にその基礎をもっていることが明らかである以上、何よりもまずわれわれは、70年代階級斗争への過渡期たる69年秋の階級斗争の質的転換に関して正確な分析をしなければならず、そして、そのことから、この質的転換を主体的に切り開くべく提起されたわれわれの政治路線の総括をしなればならない。

われわれはすでに9回大会において、安保決戦を内戦の突破口として位置づけ、内戦の質をもった階級斗争を闘いぬげる党の飛躍を勝ちとらねばならないことを提起した。そして、安保決戦において、中央権力斗争とマッセンストへと革命的左翼全体を領導し、階級斗争の新たな地平を切り開くことをめざしたのであった。この路線は、全共斗運動の力量を総体として牽引しえた時はじめて可能な路線であったといえるが、この党の飛躍の内容を同盟内部においても解決しえないまま(赤軍派との分裂等)反帝統一戦線総体を牽引する力量を失っていったのであった。

このことは、全共斗運動そのものが、生命力をもたず、階級斗争の新しい質を切り

質へと切り開くことが日程にのぼっているからである。

## (III) 再び党の革命

われわれが全共斗運動を総体として安保決戦へと領導しようとし、それが失敗に帰ざるをえなかった要因を、主に、全共斗運動の内実の分析のなかに求めることが出来る。そして、全共斗運動が、その唯一の生命力たる武装を解除された段階においては、党の問題が決定的に問われることである。そして、この党の指導は、何か、全共斗運動をどのように指導するかという点に求められてはならず、何よりも、党がその領導する大衆とともに、安保決戦をいかに闘いぬぐかを明らかにし、それを実行することに他ならない。

このことは、全共斗運動に対する武装解除が、まさしく、今秋安保決戦をめぐっての敵階級の政治的攻撃として存在しており、それゆえ個別全共斗のワクでは決して闘いきれぬものであったがゆえに、全共斗運動の武装解除が進められたのであり、だから、われわれが現段階において、全共斗運動を領導しようとするとき、まず何よりも、この敵階級の政治的攻撃に対する武装反撃を組織しうるかどうかにかかっている。そして、この武装反撃は、云々までもなく、個別学園の再封鎖ではなく、機動隊との正面戦においてこれを粉砕することを頂点としたところの、街頭斗争におけるわれわれの勝利なのである。

この組織活動は、まさしく、党I.S.S.Lを中心とした反帝戦線の活動として、全共斗とは組織的に独自の地点からはじめられなければならない。何故なら、いまだ全共斗運動が一定の狭さを持っており、むしろ、党が、新たな大衆との結合を独自のになしとげることによって、このことによって、全共斗運動の再生も可能になることが確認されねばならない。(もちろん、具体的な点に関しては、個別大学の実態を分析した上でその組織方針の確立が望まれる。)

この党の独自活動は、それ自体が強調されても何もならない。むしろ、それがどのような政治的内容をもったどのような組織によって担われねばならないかという点にまで具体化されねばならない。その際第一の点は、内戦の質をもった階級斗争の時代においては、党の独自活動の飛躍が問われ、それがなしえない党派は、階級斗争の最前線に登場しえないことである。それ故、この党の独自活動の問題は、何か思いつきな組織改革でなされるものではなく、まさしく、安保決戦を闘いぬげるかどうかというこの点に一切がかかっていることを見ぬかねばならない。この安

保決戦の最前線を担い切れぬ党派はいくら口先で色々提起しても、それはギマンにすぎない。

だから、われわれが提起する党の独自活動の飛躍とは、まさしく、安保決戦の中で準備され、安保決戦を最前線において斗い抜くという訓練にたえぬけるものでなければならぬ。われわれはすでに9回大会においてこの党の飛躍の基準を戦略論において明らかにしたが、今問われているものは、安保決戦の鉄火の訓練の中で、われわれが、この戦略論に導かれた党の実体をつくり出すことに他ならないのである。

以上の内容から、われわれが、10・21を同盟総体の力量によって斗いぬくことができなかった要因を明らかにした。いま簡単に把握するならば、第1に、「神田制庄」霞ヶ関政府中枢占拠」というわれわれの戦術は、全共斗運動及び8派全てを牽引した上でこの戦術であったことであり、第2に、この諸党派の牽引が、全共斗運動の武装解除にもとづく力量の後退の中で成功せず、第3に、われわれ自身の党の独自活動が、全共斗の領導との関連で位置づけられていたが故に、当初の戦術が貫徹しない段階において、次への転換をなしえきれなかったことである。そしてこれらの事態は、進行しつつある階級斗争の転換に、われわれの対応がおくれていることを意味する以外の何ものでもなく、われわれは、早急に戦線をたてなおさねばならない。

#### (Ⅳ) 階級斗争の転換と「戦略・戦術」

われわれの中央権力斗争とマッセストライキという戦術が、10・21において、貫徹しえなかったことが、次に総括されねばならない。この総括の基準も、階級斗争の質が変化してから設定されねばならない。

大衆斗争の時代においては、戦術と戦略は直結して提起されることによって、その大衆斗争に方向性を与え、それを発展させることができる。われわれは、昨年6月神田カルチャータン10・21防衛庁占拠、本年1月安田死守戦などを唯一中心的に担い、この大衆斗争における最もすぐれた党派としての伝統をもち、また、戦略論においても他党派を領導する内容を提起してきたが、このことは、この大衆斗争の時代において、戦術が戦略と結合されて提起されるとき大衆斗争の飛躍が実現することに立脚していたのである。

だが、階級斗争の質が、内戦の質をもつとき、この戦術の展開そのものが敵の暴

力装置によって封じ込められ、従って、この戦術が不発に終ることによって、戦略が空語化するようになるのである。とくに、主体的力量と無媒介に、戦略から規定される戦術を提起してもその戦術自体が貫徹しえない状況が訪れていることである。従って、少くとも11月斗争においては、戦略と直結させた戦術によって階級情勢を切り開くことは可能性がなく、むしろ、戦略と直結した戦術を展開するための戦術として位置づけなければならないのである。

階級斗争が内戦の質でもって斗われている時における中央権力斗争とマッセストとは武装蜂起の実現であり、この武装蜂起の実現は、内戦を現に闘う戦線の具体的な配置の中から組み立てられねばならない。だが大衆斗争の時代においては、こうした戦略的斗争は可能であったし、そして、階級斗争の転換点としての10・21斗争においては、従来の反帝統一戦線総体を領導し切れれば実現可能な戦術であったといえる。(この場合は、蜂起の基本的構造をもった階級情勢を大衆的に明らかにするという意味をもった、半合法的斗争となつたであろう)

だから、従来、中央権力斗争とマッセストを大衆斗争の戦術として位置づけてきたのであるが、それは階級斗争の質が内戦の質をもった時代に移行しつつある今日においては、武装蜂起の計画としてあり、それゆえ、日常的な戦術をその計画にむけて結合してゆくところの結合環としての意義をもっているのである。すなわち中央権力斗争とマッセストの実現を目標にしつつそれはいたる具体的な戦術の内容を明らかにすることがせまられているのである。11月斗争においてはそれは「機動隊粉砕」である。

## 第五章 11月闘争と同盟の任務

(十一月八日執筆)

### (I) 内戦の端緒的開始

10・21斗争を安保決戦の突破口として位置づけて我々は斗ってきた。そして、10・21斗争の敗北の中に、我々は日本帝国主義の権力構造の再編の実体をありありと見ることができたのであり、70年代階級斗争の展望の中に、安保決戦の位置をより具体的に確定することができる。すなわち、10・21を期しての治安警察・機動隊の前面への登場と、その暴力を軸にした市民社会の反動的再編、小ブルの反革命的武装は、この間の階級斗争の昂揚に対処しつくり出された反革命であり、この反革命の性格を明らかにすることによって、我々はプロレタリアート人民のすべての力を、この反革命の粉砕に向けて集中し、70年代階級斗争の展望を切り開いていくことができるのである。

10・8羽田斗争が切り開いた局面は、安保以降の階級斗争が、日帝の海外膨張の進行の中で、その市民的政治斗争と組合主義的経済斗争の補完という定型を解体され、特に街頭デモに対する機動隊の並進規制によって、革命的左翼の政治展望が封じこめられていたところの停滞局面を、q棒斗争が暴力的にこの並進規制を打ち破り、治安警察・機動隊との対峙を作り出すことによって、佐藤訪ベトナム日帝の軍事外交路線を赤裸々に暴露したことであった。以降の階級斗争は、このプロレタリア国際主義の荒々しい復活によって蓄積されていたプロレタリア人民の不満が反米、反・反革命の自然発生性をもって一挙に爆発していったのである。だが、68年10・21・69年1・18・19を過渡として、69年4・28斗争に至って、「霞ヶ関中枢占拠」のスローガンの下に反帝統一戦線が結集したことを期にして、国家権力は新たな反革命体制を整え、全面的に登場させた。すなわち、大学臨時措置法がそれであり、機動隊による都市の全面制庄体制がそれである。「67年10・8・69年4・28」の「1

つ時代」は、日帝が、国際反革命同盟を維持しつつ、アジア侵略・反革命を強行する中で、戦後議会制民主主義体制をなしくずし的に解体してくることに對して、革命的左翼が、大学・官公労に依拠しつつ、逆に帝国主義の打倒と、その支配体制の解体を掲げ、「国際主義と組織された暴力」によってプロレタリア人民をケン引していった。これに對し、大学臨時措置法は、「休校・廃校」として、大学共同体の帝国主義の側からの解体を提起し、そのことによって学園主義者を分解させ、機動隊の暴力による大学共同体の反動的復活を容認させるものであったし、4・28・6・9を経て、10・21に全面的に顕在化した機動隊による首都・大阪の制庄、その暴力の下への自警団の組織化、交通機関、会社、銀行の結合も、プロレタリアートの街頭斗争が都市の制庄として発展しようとする局面で、治安の解体による政治的流動の拡大を食いとめ、逆に帝国主義の側から市民社会の暴力的組織化を計ろうとするものであった。

こうして、10・21斗争は我々に新しい時代が始ったことを教えている。半合法的「中央権力斗争とマッセスト」の時代は終った。10・21斗争における「霞ヶ関中枢占拠・新宿・神田制庄」中電マッセスト・北大阪制庄」斗争への10万余の大衆の結果は、我々が「端初蜂起の型を切り開く」とした、このような斗いの軍事的勝利は政府危機につながっていくことを物語っている。そして、だからこそ、敵の反革命は全面的なもの、密集したもの、攻勢的なものであった。安保再編を通して日帝の軍事外交路線が、更なる昂揚を作り出さざるをえない以上、この敵の反革命はより恒常的なもの、全面的なものならざるをえない。そしてこのような階級関係が、日と場所を定めて提起するところの半合法的「中央権力斗争・マッセスト」の極限化と機動隊のその日1日の首都制庄として10・21に煮つまったのである。こうして帝国主義軍隊の解体の以前にまず機動隊の暴力を軸にした反革命体制をいかに粉砕するのが課題になるような階級斗争の一時代が始まった。この一時代は

「プロレタリアート」として恒常的武装斗争の開始の一時代であり、この一時代を勝利することによって連続的に内戦Ⅱ世界革命戦争（自衛隊・米軍—国際反革命軍との斗争）の時代を切り開くことができるのである。このような時代の端初において、敵は一步進んでおり、優勢に武装している。革命的プロレタリアートは、闘いのすべてが、ブルジョア政府打倒→プロ独樹立によってしか勝利しえないことを認識し、闘う意欲を持っているが、その武装斗争形態—組織は旧来のままであり、敵の新たな武装に対して動揺し、ためらっているのである。そしてこのような時代こそは前段階決戦に至る過渡なのであり、ブルジョアジーがプロレタリアートかどちらか一方が相手を倒さずには決して止まないような、そのような闘いへの過渡なのである。11月斗争における我々の任務は、この新たな時代の開始を我々が恒常的武装斗争の型を創出することによって、全プロレタリアートに告げ知らせ、全人民の武装を組織化していくべき端初とすることであり、機動隊の都市制圧を中軸とした敵の新たな反革命体制の一角を切り崩すことによって、安保再編Ⅱ「沖繩返還」をカナメにした日帝のアジア侵略・反革命の陰謀を暴露し、反帝統一戦線の再編を促進することができるのだ。この斗争の勝利は、何よりも機動隊に対する軍事的勝利でなくてはならず、我々は、これまでの半合法的「中央権力斗争とマッセメント」の時代の最大の牽引車であったが、いまわれわれが、まさききその時代の残りカスを一切払しょくしてこの闘いに臨まなくてはならない。たとえば「政府中枢占拠」というスローガンはこの時代Ⅱ政府打倒斗争の時代の宣伝・煽動のスローガンであるけれども、前衛党の「計画としての戦術」は、政府打倒にむけていかにして全人民的武装蜂起を組織し、世界革命戦争へと結合していくかとして設定されなくてはならないのであり、敵の政治的・軍事的配置に対して、恒常的武装斗争の路線がリアルに定められ、武装ソビエト運動の内実が、まずもって党の武装（R.G.反帝戦線）として形成され、反帝戦線への全共斗・反戦の先進的大衆の結集による、全人民の武装の組織化によってこそ、政府中枢占拠が軍事的にも可能となり、それに対する敵の更なる反革命（自衛隊の治安出動—朝鮮反共戦争の提起）が登場し、内戦Ⅱ世界革命戦争の時代へと突入していくのである。革命党が武装蜂起—世界革命戦争の党であるかぎり、「党としての斗争」党のための斗争が本格的に要求され、それに答えなにかぎり、一切の斗争が勝利しえないような時代が始まっているのである。

敵権力が、なぜ治安警察・機動隊を前面に押し出さざるを得ないかは、国際反革命同盟再編の中における日本帝国主義の位置に規定されている。すなわち、日本帝国

主義は国際反革命同盟を維持しつつ、アジア侵略・反革命を展望せざるをえず、このことは、戦後議會制民主主義秩序を擬制的に維持しつつ、帝国主義軍隊を強化してゆかざるをえないこととして結果するのであり、このなしくずしの帝国主義的社会再編と軍事・外交路線の展開に対して増大する大衆の不满を、治安警察・機動隊を準軍隊化することによって「治安問題」の次元に押え、「非政治化」しようとするのである。（「過激派」という新しい呼び名）だから、治安警察・機動隊の粉碎・せんめつは、単なる政治的民主主義の問題や、斗争の障害になるから粉碎するといった問題ではなく、日本階級斗争を内戦Ⅱ世界革命戦争へと飛躍させるべき過渡にあって、戦略的意味をもっているものであり、治安警察・機動隊の準軍隊化・ブルジョア私兵化に対するプロレタリアートの恒常的武装斗争の一時代は、諸階層の武装勢力としての登場、その全人民武装への解体・再編及び自衛隊の「④化」（ブルジョア私兵化）を通して、内戦Ⅱ世界革命戦争の時代に直接連続的につなげていくのである。10・21斗争を我々が内戦の突破口と規定したことは、この意味で正確であり、このことは「中央権力斗争とマッセメント」の提起の仕方の不正確さにつながっていた。だが我々は、このことから、史的唯物論の方法論その他のみに召還していくのではなく、戦略の更なる具体化と軍事路線の確定、党の革命の遂行として自らを再組織しなくてはならないのである。

#### Ⅳ 大陸革命戦争と反革命同盟再編

戦後米帝の一元支配体制とソ連のそれへの屈服として構造化した現代過渡期世界は、米帝が1930年代を通して国際市場分割戦に最終的に勝利し、世界の総資本として行動することによって、プロレタリア世界革命の現実性に対する帝国主義の国際反革命同盟が初めて結ばれた世界である。

そして、窮乏化法則の国際的貫徹の表現としての後進国危機を突破するものとして形成されてきた後進国革命戦争を軸に、「労働者国家」、帝国主義国に波及し、拡大している世界階級斗争は、プロレタリア世界革命の現実性をあらためて表現しているものであり、帝国主義諸国は独自の利益を追及しつつも反革命同盟のきずなを強めざるをえないのである。

そして、日、西独、伊は勃興しつつも米帝にかわって、国際反革命同盟の盟主たることができない。なぜなら、米帝は戦略核を独占することによって世界戦略のヘゲモニーを掌握しているのみならず、戦略核体系に至る一連の軍事技術の独占を、再分割戦と各国の軍事的不均等発展、英・仏の平価切り下げと、西独の平価切り上げ、円為替制限撤廃がもたらすドル・インフレーションの拡大と帝国主義的社会再編）

そして、この帝国主義の国際競争戦に対するソ連圏内部の矛盾の蓄積はワルシャワ軍の暴力によってのみおさえられ、幻想の共同性を維持されているのであり、再度の東欧危機その他として顕在化するであろう。こうして現代過渡期世界は世界革命戦争への自然発生性を不断に形成し、拡大しているものでありこの自然発生性を革命党がくみとり、自身を世界革命戦争の党として変革することによって、前段階決戦へ突入していくのである。

世界革命戦争の党として革命主体が登場しなにかぎり、決して現段階過渡期世界は自動崩壊することはないということは、国際反革命同盟内での帝国主義の不均等発展の鉄の法則の貫徹が、こうして帝国主義国内の階級的攻防に煮つまっていくということなのである。

さて、このような過渡期世界の危機の前期的成熟の中において世界階級斗争は煉獄の火をくぐって前進している。すなわち、後進国革命戦争の再編は、中近東、中南米、東南アジアを軸にして行われつつあり、その典型は中近東ゲリラの民族主義から社会主義Ⅱ反米・反ソへの動向と、武装を軸にした統一戦線の形成（30数党派の統一戦線が急速に形成されている）である。東南アジアでも事態は同様であり、ラオス・カンボジア・タイへと波及している革命戦争は、即目的ではあれ、総合的方向を見ている。

この武装を軸とした統一戦線の登場は、反革命同盟再編強化に対応した米ソ平和共存—非同盟中立の反動的再編の動向に規定されて解体的危機に陥った民族解放の政治路線の固定化の上に立った統一戦線に代り、後進国ブルジョアジーの非同盟中立の反動的再編そのものを根底的に動揺させ、イスラエルの反革命突撃国家となるか、最近のナセルの如くこの勢力を許容しつつアラブ民族主義Ⅱ地域主義による国民統合力の復活を目前しつつ動揺（そしてクーデター）を重ねるか（レバノンのゲリラ基地容認、ペルー軍事政権のキューバ「接近」）という新しい時代を切り開きつつある。

以上のような階級攻防の性格から、この統一戦線は大陸革命という形態を通して世界革命戦争の軍事戦略へ接近しつつある。（たとえばその現象形態が、中近東・ベトナム・中南米で全く異なっているとはいえない）

すなわち大陸革命の展開は、反革命同盟の再編を中ソ平和共存の再確立（日独の

重化学工業部門に生かすことによって、世界企業として、個別資本としては、各国との重化学工業部門での市場分割戦に勝利しているからである。ニクソンの「新孤立主義」とはこのようなものであり、商品貿易における西独、日に対する敗北を、輸入制限その他によって補いつつ、世界企業と銀行の進出によってドルの地位を保とうとするものである。鉄鋼、自動車、電機工業など60年代をリードした成長産業が頭打ちとなってきた中での原子力産業、海底開発、情報産業などの新産業分野の登場は、いよいよもって戦略核を頂点とした米帝の産軍相互依存体制の優位もたらしているものであり、この技術独占と資本力を媒介にした米世界企業の進出に対して、西独、日はこの資本輸出を甘んじて受け入れつつ、英、仏に対する市場再分割戦を展開する道を選んでいるのである。だから、我々は単純に国際反革命同盟の解体がおとずれると想定するわけにはいかない。西独、日の米帝の資本輸出をうけ入れながらの、英仏に対する市場再分割戦の展開は、内部に米帝に対する対立要因を含みつつも、なしくずしの「勢力圏」の形成として行われ、NATO、安保再編を通して帝国主義軍隊強化の過程が進んでいるからである。英はもとより、仏の没落（ド・ゴールの退陣・フラン切下げ）は、中近東、アフリカでの権益確保のための独自の軍事行動をいまだ展開しつつも、総体として、戦略核をめぐる米への屈服、通常兵力によるNATO強化に向っているし、西独における社民政権の成立とマルク切り上げ、核防条約調印への動き、日本における円為替制限撤廃の動向、資本自由化、「沖繩返還」とひきかえでの核防条約調印の動向もまた同様である。

ソ連による東欧の暴力的制圧と、マレーシア・シンガポールなど、英仏の後退した地帯への軍事的・経済的進出、西独・日の資本輸出受け入れと領土問題（オーデル・ナイセ線・北方領土）での「平和共存」への動向は、以上の国際反革命同盟の再編に対応するものであり、過渡期世界の危機は、西独、日による国際反革命同盟の再編をテコとして、一見、米ソ平和共存体制の再確立が進んでいるかのように見えており（戦略核兵器制限交渉—SALTをめぐる米ソの取り引き）、このように事態の進行に対する中国の動揺—文革の停帯、米中交渉、中ソ交渉、核実験—が存在する。

だが、この「新ヤルタ体制」の形成は解体の危機を秘めて進んでいるのである。国際反革命同盟の再編は決してスムーズに進んでいるのではなく、国際帝国主義の死闘の表現なのであり、なしくずしプロレタリア化の進行は各帝国主義国内に、インフレーション・産業合理化・軍事・外交路線をめぐって、矛盾を蓄積させているのである。（中近東、アフリカをめぐる米・英・仏・西独・アジアをめぐる日・米の市

なくしプロック化を通したその補充（オーデルナイセ承認、ベトナム開発基金構想）による革命の封殺というすべての帝、スタの願望を打ち砕き、米帝が自己の体内に抱えこんだ戦争（ゲット）の全階層的な拡大に七転八倒しつつも、仏、英の戦争縮小を許容しえず、日独の侵略、反革命戦争への現実的動員を要求せざるを得ない地点に追いこんでゆくのである。そして、このような形でしか、戦争を行えないのが過渡期世界に於ける帝国主義なのであり、このような形で侵略、反革命戦争が準備されようとしていることこそ、日本における闘いが内戦の質を萌芽的にもった恒常的武装斗争の時代を開始し、ここでも武装を軸とした統一戦線の再編が始まりつつあることの規定要因なのである。そして、この現代過渡期世界における戦争の性格は、各国帝国主義軍隊の統合力を弱め、排外主義の形成を困難にしており、各国帝国主義国は議会制を維持しつつ、行政官僚機構を肥大化させ、治安警察を準軍隊化することによってプロ独一革命派を大衆からきりはずし、人民戦線派を排外主義に転化させつつ、侵略反革命を遂行しようとしているのである。（仏の国家安保隊、イタリア警察の戦車装備、日本の機動隊の準軍隊化として国家警察建設の動き、その他）

だから、現在我々に主体的に問われているのは、70年代を通じて斗われ続けるNATO、安保粉砕斗争を恒常的武装斗争として斗うことであり、世界革命戦争の戦略から位置づけられて闘うことなのである。すなわち、70年代における東欧一中東危機朝鮮危機は後進国革命戦争の大陸革命としての再編にもなっており、新たな質をもって形成されてくるのであろうし、これらに対する米帝の侵略、反革命の拡大は、三ノクソン演説にも見られるように米帝のアジア戦略は変更されていない。西独・日の海外派兵を促し英・仏をまきこんで展開されざるをえない。そして帝国主義は「共産主義の侵略からの防衛」を掲げて侵略、反革命を遂行しようとするであろうが、帝国主義国プロレタリアートは、この反共イデオロギーが実は東欧一中東・朝鮮に対する帝国主義の侵略、反革命であることを暴露しつつ、内戦へ突入していくことができるのであり、後進国革命戦争と結合しつつ、帝国主義をヘゲモニーなき反革命へと追いこんでいくことによって、各帝国主義軍隊を解体することができるのである。

安保決戦のこのような国防的位置を確認し、10・21斗争の敗北の総括をふまえるならば、11月斗争の勝利をもって恒常的武装斗争の型を定着させ、佐ト訪米日米安保再編の意味を全人民に暴露し、67年10・8斗争の切り開いた地帯を数段上回って、世界革命戦争へ向けた新たな階級斗争の構造転換を勝ちとるべく、我々は死活「み」としての沖縄基地への適用による事前協議制の空洞化によって、日米侵略反革命共動行動は、自衛隊の通常兵力とボラリス核潜の自由寄港による米帝の核戦略との結合として、極東を軸に飛躍的に強化されようとしているのである。

さらに、沖縄基地を軸とした安保ANZUS（オーストラリア・ニュージランド・米）米韓米比相互防衛条約の結合は、相互防衛条項（安保5条）を媒介として、東南アジア全体への日帝の侵略、反革命の布石となろうとしており、日帝は当面極東への侵略反革命体制を構築しつつ、兵器輸出その他として東南アジアへの軍事的ヘゲモニーを強化しようとしているのである。

こうして佐藤訪米日米共同声明の内実はほぼ確定し終り、「核ぬき」をめぐる文章上の調整を残すばかりである。

この安保自動延長に名を借りた実質上の安保改定と日米侵略反革命の強化に対して沖縄人民の闘いは新たな再編を遂げようとしており、屋良一自民、社大党、同盟系労組の「訪米に反対せず、本土なみの生活の安定、基地公害からの保障」を唱える改憲主義が公然と登場しようとしている一方、反戦復帰派の日・米帝への対決の動向が進んでいる。これまで「復帰」を軸に大結合されてきた沖縄人民の闘いは、日米共同声明の内実が明らかになるにつれて、ますます左右への分解を遂げざるをえないし、すでに「復帰」によって解決されることのない日米侵略反革命共動行動、自衛隊の沖縄派遣という現実を直面するに従って爆発的な闘いの昂揚・恒常的武装斗争の開始へと向かっていかざるをえないのである。「沖縄返還」は日帝のアジア侵略、反革命の要請からして必然であり、帝国主義者は北方領土問題をも提起しつつ、安保粉砕斗争の昂揚を逆にナショナリズムへと吸収しようとしているのであるが、一方で日・米帝の侵略、反革命に対する本土、沖縄人民の闘いの同質化も形成されてくるのであり、革命党による世界革命戦争の戦略の具体化と恒常的武装斗争の形成をカナメとして、大衆の左右への分解はいよいよ激化せざるをえないのである。

日帝にとって、安保粉砕斗争の恒常的武装斗争への転化を抑制することは、こうして死活の課題なのであり、治安警察、機動隊の徹底的強化によって、革命的左翼と大衆との分断をはかっているのである。そして、日帝のアジア侵略、反革命が、米帝との共同行動として行わざるを得ず、かつ後進国革命戦争と対抗して行わざるをえないところからくる自衛隊の国民統合力の弱さは、反帝統一戦線の拡大を媒介として議会に於ける民社、公明を問にはさんだ自民・社共の拮抗関係をつくりだしているものであり、日帝はいよいよ治安警察・機動隊の暴力を肥大化せざるを

をかけて自らを組織してゆかなくてはならないのである。

### (III) 訪米阻止を突破口に機動隊せん滅へ

我々は朝鮮危機が単に朝鮮半島の枠のみを形成されると考えることは出来ないし、そのような仮定を媒介にした70年代前半の展望を語ることは出来ないだろう。日本帝国主義のASPAC体制の形成自身、南朝鮮の「反共軍事同盟としての形成」の主張を押しつつ、東南アジアへの資本輸出を保証するものであるからである。そして、この資本輸出は「太平洋・アジア経済圏」として、アメリカ・オーストラリア・ニュージランド・カナダ・中南米などとの自由貿易地域確立の構想として存在し、米帝の金融力と結合して進められているのである。（日帝は商品貿易では米帝に勝利しているが、インドネシアでの石油など、資本力の要求される部門では敗北している）だから、むしろ、このようなアジアにおける日・米帝の侵略・反革命に対して、アジア人民の武装解放斗争が総体としていかなる発展を遂げるかの関連で、朝鮮危機を位置づけなくてはならないのである。「韓国」の「改憲国民投票」は圧倒的「改憲賛成」票と宣伝されているにもかかわらず、実際は学生運動・野党に対する激しい弾圧（大学の50%、高校の50%近くの臨時休校・学生生活動家の徴兵）と、「国民投票法」による大衆運動一切の禁止、国家権力を総動員した買収・戸別訪問・脅迫に対抗しての、三・一・一の反対票は、プロレタリアートの不満が極限にまで達していることを物語っている。

重化学工業化の強行的遂行はインフレーションと農村の荒廃とを生み出しており、借款に次ぐ借款は致命的な国際収支危機を蓄積しているものであり、米帝の在「韓」地上軍削減に伴って、朴政権は日帝への従属を深めざるを得ない。71年朴三選の強行から72年にかけて、南朝鮮危機は確実な煮つまるざるをえないが、このことはベトナム革命戦争を中心とするアジア革命戦争の再編、中近東、アフリカ、インド、パキスタンへの中国の南下路線、金日成の72年朝鮮武装統一宣言などとの関係に規定されるということである。

沖縄基地からの米軍の自由発進をめぐってのこの間の日米協議は、この様な情勢にいかに対処するかとして行われてきたのであり、朝鮮、台湾での侵略、反革命共同行動ベトナム出撃において基本的に一致したのである。72年を期しての沖縄基地への自衛隊派遣をカナメとして展開されようとしている四次防は①海上防衛力の強化②兵器国産化③沖縄防衛④陸・海・空の総合力強化であり、安保条約の「本土をえないのである。我々がなしくずしファシズムと呼んできた日帝の権力構造は、ブルジョアジーが人民戦線派（反米親共）とファシズム派（反米反共）の双方を親米反共として統合して支配している支配体制であり、安保同盟と議会制を維持しつつ、帝国主義軍隊・帝国主義的労働組合・治安警察、機動隊を軸に、一方では人民戦線派を排外主義へと転化させ、「自主防衛」へとファシズム派を吸収しようとしているのである。

米帝の軍事技術を導入した産軍相互依存体制の形成（三菱・防衛庁の結合、三菱・クライスラー提携）の進行は農業・中小企業を解体させ、自民党の旧来の基盤を崩壊させており、自民党は帝国主義的労働組合・民社、都市小ブルジョアを買収した連立政権構想、都市を軸にした支配様式を目指さざるをえず、これと対抗して、共産党の民主連合政府構想が、社会党、総評の分解を収約しながら本格化し、革命的左翼に対して武装して対決してきているのである。

こうして日本階級斗争における政府打倒斗争のはじまりは、武装と政府、戦争問題をめぐって党派斗争が形成されてきている。そして50年代の市民主義的政治斗争を支えてきた社会党の非武装中立路線の破産は明らかであり、日本共産党の武装中立論の伸長は、日帝の侵略・反革命の強化と極東危機の現実性の中でリアルさによっているのである。この情勢は我々にとって日帝の「自主防衛」がアジア侵略のための武装であり、ブルジョアジーの人民に対する暴力であることを暴露しこの暴力に対抗して全人民の武装を組織していくべき条件の蓄積として逆にとらえかえさなくてはならず、この全人民の武装の路線を大胆に、具体的に提起し、組織し抜くことを抜きにしては一切の政治的勝利はありえない段階に入っているのである。そして全人民の武装は党の武装を抜きにしてはありえないのである。ブルジョアジーはこのような我々の恒常的武装斗争の路線に対して、「間接侵略」の名をもって恫喝してくるであろうが、我々は逆に後進国革命戦争との結合を断固として主張し、ブルジョアジーをヘゲモニーなき反革命へと追いこんでゆくことができるのである。

佐藤訪米まであと一週間余、我々は徹底的に佐藤訪米の意図をアジア侵略、反革命、自衛隊の海外派兵と核武装を暴露し、RGI反帝戦線の建設を押し進めることによって、11月斗争に全力量を集中し、治安警察、機動隊を解体する恒常的武装斗争の型を創出することによって安保粉砕斗争の新たな地平（政府打倒斗争における我が同盟にケン引されたプロ独一国際主義派の政府スローガン、革命戦争のスローガンを掲げた武装した登場、全人民の武装・軍国建設をカナメにした反帝統一戦線の再編による、ブルジョアジーの人民戦線派とファシズム派への分解の促進、すべ



ての政治勢力の武装した対峙を作り出さなくてはならないのである。すでに11・16羽田空港占拠斗争として斗争戦術は決定された。我々は10・21斗争で明らかにされた「中央権力斗争とマッセンスト」の現段階が治安警察・機動隊との恒常的武装斗争の一時代の開始であることを確認するならば、この斗いにおいて、実際に機動隊を部分的にでもせんめつする斗いを展開することによって、この一時代の斗争の型をつくり出さなくてはならないのである。この斗いは少人数のゲリラによる破壊活動のみによってはなされず、また従来の日棒斗争のエスカレートによってもなされないであり、組織された密集した、比較的少人数の正面戦と遊撃戦の結合によってなされるのであろう。10・8羽田斗争以降2年間の斗いが生み出したすべてがこの斗いの帰趨にかかっているからこそ、全国の学生、市民、反戦労働者は、ぞくぞくと結集しようとしており、官憲は「10・21斗争以上の結集は確実」と発表せざるをえなくなっている。10・21斗争の敗北が我々の主体的転換の未貫徹のゆえの敗北であったとするならば、我々はこの2週間の総括の中から、すべての教訓を学びつくすことによって、いま11月斗争の勝利の条件を掌握しているのである。全国の同志諸君、70年代階級斗争の未来と、我々の革命党としての死活を賭けて、残された1週間で斗い抜き、11月斗争に勝利せよ！



## 第六章 当面する「軍事」の政治的質

(十一月八日執筆)

### (I) 過渡期世界の階級斗争

#### (1) その基本性格

過渡期世界の階級斗争の基本性格は、国際的階級斗争を世界階級斗争へと止揚する点にある。国際的階級斗争、すなわち歴史的個別的過渡的限界性をもった今日の世界のプロレタリアートを階級斗争とおして世界単一の階級に組織することである。

最も最高の質をもって要求されている任務は、民族的階級としてのプロレタリアートの歴史的個別的過渡的限界性を止揚、突破してプロレタリアートを世界的階級に組織することである。すなわち、プロレタリアートの世界独裁を媒介として社会主義を建設することが、今日の過渡期世界の階級斗争の基本性格である。

この目的に向けて、世界のプロレタリアートと階級斗争を指導することは共産主義者の目的任務であり、共産主義は、この斗争によってのみ、プロレタリアートの国境や国語に左右されない総体としての利益を代表することが出来る。

共産主義者その他のすべての潮流・組織の思想、理論、そして路線をわかつ根本的相違はこの点にほかならない。

又、今日の階級斗争とプロレタリアートとは、まさしく、その歴史的個別的過渡的限界性を突破し、自らを世界的階級に組織しつつあるし、組織せしむにはおかないのであり、ここに世界史の基本的方向性をもっているのである。

たしかに今日の世界の階級斗争とプロレタリアートは、ブルジョアの民族主義をはじめとする色々の歴史的個別的過渡的限界性をもっている。そしてこの限界性こそは、一方でブルジョアジーの支配、収奪、搾取をゆるしている原因、いま

定帝国主義のくびきのもとにプロレタリアートをしばりつけている元凶にほかならないし、他方では、プロレタリアートの世界的団結を阻止し、プロレタリアートの今日の資質の低さ、制限されたエネルギーと能力の限界を示しているものにほかならない。

共産主義者の基本的任務は、プロレタリアートのあれやこれやの歴史的個別的過渡的限界性を指摘し、これを説明し、説教することではない。それは、かつてブルジョアジーが封建的、中世的地域主義的な狭い世界を打ち破り、民族国家を形成したのに対して、このブルジョアジーの経済的、社会的、政治的、文化的な一切のブルジョア民族主義の限界、狭さを突破すること、民族国家に固着した資本制生産様式における生産諸関係の障壁を粉碎し、打壊することによって、この地球上を唯一の共同社会に、「世界社会主義」に組織することである。

共産主義者は、プロレタリアートの欠点、限界性をあれこれとあげつらうのではなく、この偉大な歴史的事業に参画させることによって、この事業を押し進めることによってだけプロレタリアートを成長させることが出来るのである。

プロレタリアートを世界社会主義（地球上で唯一の共同社会）の建設に参画させることをおとして、ブルジョアジーを打倒する過程を経験させることによってだけ、自らの歴史的個別的過渡的限界性を自覚させ克服させてゆくことが出来るのである。

プロレタリアートの世界独裁の樹立を媒体とするこのプロレタリアートの事業は、世界のブルジョアジーに対するプロレタリアートの斗争、この二大階級対立にもとづく、二つの陣営のあいだの斗争のほかにない。

すなわち、ブルジョアジーを打倒する過程をおとしてだけ、プロレタリアートは自らを高め、世界的階級に自らを成長させることが出来るのである。

## (2) 帝国主義の運動

今日のプロレタリアートは歴史的個別的過渡的限界性をもちながらもブルジョアに対して国際的な階級斗争を闘っている。

そして、この国際階級斗争に規定されて帝国主義の国際国内にわたる反革命同盟は存在している。

この反革命同盟は、(1)帝国主義列強(巨大独占体)、(2)植民地・后進国の軍事反革命政権(買弁資本、民族ブルジョア、地主)、(3)スターリニスト官僚(労働の質にもとづく配分、ブルジョア民族主義、分業の強化、拡大、固定化にもとづく官僚の体系)によって構成されている。

この反革命同盟は、世界のプロレタリアートの階級斗争に対抗して階級利害にもとずいて結ばれている。資本主義の矛盾、帝国主義の不均等発展は、基本的にブルジョアとプロレタリアートとの階級斗争を激化させずにはおかず、これは反革命同盟をますますブルジョアに強要せずにはおかない。然し、ブルジョア相互の矛盾、対立競争は、その市場をめぐる、不断にこの反革命同盟をつきくずさずにはおかない。

しかし、ブルジョア相互の、独占相互の矛盾、対立、競争の激化、緊張関係は、国際階級斗争の存在に規定されて容易に帝国主義戦争へ導くことが出来ない。

ここに今日の帝国主義がその市場再分割戦において、反革命を先行させた侵略体制を政治的軍事的にとらざるを得ない原因がある。

先行的権力再編、反革命同盟の再編を媒介とした市場再分割、侵略を、今日の帝国主義の基本的運動法則として、いるのである。

このブルジョア、独占の階級利害の貫徹形態の特殊性に過渡期世界における帝国主義の基本的運動法則をみなければならぬ。

反共イデオロギー攻撃、反革命を先行させた先行的権力再編、反革命同盟再編そして侵略反革命戦争に対する斗争を今日の世界階級斗争の基本軸にすえることによって、ここから指導しなければならぬのである。

この先行的権力再編、反革命同盟再編を媒介とした市場再分割戦、その軍事的形態としての侵略反革命戦争に対する斗争を階級斗争の環とすることによって、プロレタリアートの国際的階級斗争を単一の世界階級斗争に高めることが出来る。世界革命戦争はこの帝国主義の侵略反革命戦争に対するプロレタリアートの階級斗争、人類史から人類史への一時代にわたる実現形態である。

級斗争、人類史から人類史への一時代にわたる実現形態である。

## (3) 世界プロ独と社会主義

米帝国主義のベトナム反革命戦争を媒介とした東南アジア市場への侵略と反革命と、これに対するベトナム人民の革命戦争は、帝国主義の足下における本格的な階級斗争を生み出した。

この一昨秋以降の帝国主義足下の階級斗争のはじまりこそは、一方で帝国主義列強の同時打倒を世界のプロレタリアートの中心的任務におしあげると同時に、他方において、帝国主義に対する「自国政府打倒」の斗争を歴史的日程にのぼらせたのである。

そして、この自国政府打倒と帝国主義列強の同時打倒こそ、第二次大戦以降、特に35年以降の資本主義の高揚によって生みおとされた広汎なブルジョア民族主義の克服とともに「労働者国家」「帝国主義国」「後進諸国」の、いわゆる三プロックのそれぞれの階級斗争の三つの形態を結合し、統一的に闘い指導することを要求したのである。

従来このようにプロレタリアートの歴史的個別的過渡的限界性の止揚を日程にのぼせたのである。

帝国主義の侵略反革命戦争に対するプロレタリアートの世界階級斗争、世界革命戦争は、一方で民族国家の廃絶を日程にのぼせているだけでなく、他方では、プロレタリアートの世界的な民主主義の中央集権、プロレタリアートの世界独裁をプロレタリアートの当面の任務におしあげたのである。

この二つで一つの原則「民族国家の廃絶」と、これをプロレタリアートの世界独裁(世界的民主主義の中央集権)の樹立こそ、帝国主義の侵略反革命戦争に対するプロレタリアートの世界革命戦争の目的であり、又結果にほかならない。

資本制生産諸関係を粉砕し、資本制生産様式としてかわる社会主義的生産様式の建設の課題を、帝国主義の運動法則と、これに対するプロレタリアート階級斗争の現実形態が今日、共産主義者とプロレタリアートにもたらしたのである。

世界社会主義の建設は、遠く未来のことではなく、われわれの今日的課題として、日程にのぼったのである。

## (II) 「自国政府打倒」の今日的課題

### (1) 内戦のはじまり

帝国主義列強同時打倒の斗争、そこにおける自国政府打倒斗争の位置づけについては別の機会にのべることにして、ここでは「自国政府打倒斗争」を、日本における我々の任務との関係で明らかにする。

自国帝国主義政府打倒斗争は、日本の共産主義者とプロレタリアートにとって基本的な任務であり、この斗争を系統的に、計画的に闘ってゆかねばならない。

ところで、この政府打倒斗争の中心は、なによりも、帝国主義軍隊の解体である。自衛隊は、日本の独占の国内外にわたる支配の中心であり、この自衛隊に対する闘いこそは、プロレタリアート国際主義とともに日本のプロレタリア人民の利害を守る斗争である。

今日、日本帝国主義政府は、その「侵略、反革命、抑圧」の中心環を国内外にわたる反革命を中心として、すべての先行的権力再編、帝国主義的社会的再編、そして反革命同盟の再編を行ないつつある。

一方、日本から極東、東南アジア、太平洋への安全保障条約の拡大(アジア安保)、沖縄を橋頭とする70年安保は、日本帝国主義の侵略反革命の本格的準備をはじめ、他方国内においては、自衛隊の治安出動演習、パレードをはじめとして公然と大衆斗争、共産主義運動に対決しはじめた。

国防白書の発刊は、直接侵略・間接侵略に対する国防強化をうたい、第四次防は、一ノ三次防とは質をかえたものになろうとしており、又船田私案は70年代におけるブルジョアの反革命路線を描いてみせた。

日本帝国主義の侵略反革命は、直接侵略・間接侵略に対する国防強化の名をかきりて公然と進められており、自衛隊・議会・独占が一体となってこれを進めている。

71年自衛隊の国防庁昇格、陸軍50万、沖縄を侵略反革命の前進基地化するための海軍の増強、空軍の戦術範囲の拡大と強化とは、陸海空をまさしく侵略反革命軍隊として質的に強化飛躍させようとするものにはかならない。

今日、自国政府打倒斗争の中心環は、この自衛隊の侵略反革命軍隊化に対する斗争であり、この帝国主義軍隊の解体をおしてのみ実現することができる。そして、このことは、全人民をまさしくんだ政治選択を「侵略武装」か「自衛武装」

か「非武装」か、それとも「全人民の武装」かをめぐって争われているのである。

70年安保をめぐる根本問題はこのようなかたちで提出されているのでありそれ以外ではない。

日米安保条約の「自動延長」か「長期固定化」か「段階解消」か「廃棄」か等々の問題は、現在の日本の階級斗争にとっては第二義の問題にほかならない。われわれは、現在すでにはじまっている階級斗争の新しい段階が、あれやこれやの政策阻止斗争ではなく、まさしく「政府」そのものの打倒斗争として闘われなければならないことを明らかにしてきた。

最も重要で根本的なことは、このはじまり出した階級斗争の新しい段階が、あれこれの政策をめぐる争いではなく、どのような政府をわれわれがつくるべきかという問題が、「侵略武装」「自衛武装」「非武装」「全人民武装」というかたちで、まさしく「武装」をめぐる闘いはじめたこと。この「武装」をめぐる人民のあいだの分解がはじまっているという点にほかならない。

われわれが内戦のはじまりを公然と宣言しなければならぬのはこのためである。

### (2) 武装をめぐる闘い

非武装は問題外として、まさしく今日の政治斗争が「侵略武装」か「自衛武装」かそれとも「全人民の武装」かという根本問題をめぐって闘われはじめていること、そしてこの「武装」をめぐる対立と斗争こそ、武装とその行使(戦争)、武装の目的とその政治の本質としての国家権力(政府)をめぐる二つの問題を提出しているのである。

戦争に対する共産主義者の態度、「政府問題」(国家権力)をめぐるわれわれの態度をこの武装を基礎として提出することなくして、今日の政治斗争を語ることはできなくなっているのである。

内乱をめぐる根本問題は、侵略武装、自衛武装に対して全人民の武装をわれわれが主張する点にあり、この主張を公然と主張、宣言、宣伝することがわれわれのすべての政治の前提、大前提にほかならない。

「全人民の武装」||「プロレタリア独裁」||「常備軍の廃止」||「帝国主義軍隊の解体」こそ、わが共産主義者同盟の政治政策の基礎である。

同盟の第一義的任務は、すべての大衆と大衆組織、大衆斗争において、このプロレタリア独裁の原則を貫徹することである。

第二に、この原則をわれわれがみとめ、主張するだけでは足りないであって、全人民の武装をわれわれの行動の基準とすること、武装を実現することである。「非武装」とわれわれのちがいは、われわれが人民の武装を主張する点にとどまるのではなく、われわれは武装し、彼らは武装しない点にもとめるべきである。

第三に、「自衛武装」派に対する弾固とした党派斗争、大衆の斗争を公然と組織すること、これが重要である。誰からの自衛か？、何のための自衛か、この点をはっきりさせよ。今日「自衛武装」派は二つの潮流がある。一派は、国防白書のごとく、革命に対する自衛、反革命武装であり、これは「直接侵略・間接侵略」対策に名をかりて、押し進められている。10・21の機動隊も、自警団も、まさしく、この革命に対する自衛―反革命武装の現状にほかならないのである。もう一派は、日本共産党をはじめ右翼を含めて、米帝国主義に対する日本民族の自衛権の要求という、まったく馬鹿げた主張である。現に日本帝国主義は武装しているのであり、又米帝国主義は日本の反革命武装を要求しているのである。彼らの「自衛武装」の承認、要求が、誰の目にも明らかのように、日本帝国主義の反革命武装とまったく同じものであることをはっきりさせ、これと斗わねばならない。

第四に、この「自衛武装」との斗争をより冷静に見ればわかるとあり、現実には、この自衛が、反革命武装、革命に対する自衛に名を借りた帝国主義者の反革命武装にあること、そして、この反革命武装こそは、日本帝国主義の「侵略反革命戦争」の準備、先行的権力再編、帝国主義的社会再編、反革命同盟再編の中心環をにぎっており、その基礎をなしているのだ。

### (3) 帝国主義の侵略反革命を世界革命戦争へ

さて、武装は、戦争を前提とし、又、結果とするものであって、武装の進行は当然戦争ともなってしまうにはおかないし、又進んでいるということである。ここに武装と戦争の基本的関係がある。

今日我々が当面しているこの武装と戦争の関係は、戦争に対する共産主義者の原則的な態度を要求している。

すでにわれわれが「内乱のはじまり」として主張しているのは、今日の武装が、革命に対する反革命戦争、反革命に対する革命戦争として進んでいること、いや、もっと正しく言えば、この革命と反革命の戦争が、帝国主義者に反革命武装の強化を強制し、又、われわれに革命の武装（全人民の武装）の強化を要求しているということ、この現実をみとめないものは、すべて今日進行しつつある階級斗争を

第三に、帝国主義の侵略反革命戦争と、そしてこれと反革命同盟を結んでいる植民地・後進国の軍事反革命政権・地主・買弁資本・民族ブルジョアジーに対する、これら諸国のプロレタリアート人民の「民族解放・社会主義」の革命運動を支持すること、共に闘うこと、これが今日の戦争に対する第三の原則である。

米帝国主義のヴェトナム侵略反革命戦争を媒介とした東南アジアの市場再分割と、これに対するベトナム人民の英雄的革命戦争が、全世界のプロレタリア人民の帝国主義列強をかしらす世界の反革命同盟陣営に向けて闘われたように、全てのプロレタリアート人民が、この第三の原則を支持し、承認し共に闘うことは今や当然となった。

第四に、ベトナム戦争は、かつての朝鮮戦争とともに、「労働者国家」の共産主義運動、社会主義運動としてある革命運動・戦争に対する帝国主義の反革命侵略戦争に対する「労働者国家」の、国家を手段とする革命戦争、社会主義共産主義戦争を世界のプロレタリアートが断乎として支持、承認することをおしえた。それは「労働者国家の自決」に制限されない「労働者国家」の帝国主義に対する革命戦争の原則の承認である。

「帝国主義の侵略反革命戦争を労働者国家の革命戦争で打倒せよ」これが第四の原則である。以上4つの戦争を承認し、おし進め、帝国主義列強と、ありとあらゆる反革命同盟軍を打倒し世界革命戦争を勝利させること、これが今日の、過渡期世界の段階における戦争に対する共産主義者の態度をこのように鮮明に打ち出し、世界革命戦争を勝利させねばならない。

### (III) 「自国政府打倒」と「全人民の武装」

#### (1) 自民党政府を打倒せよ

今日、日本帝国主義は、自民党政府をその政治委員会としている。プロレタリアートが支配階級として自らの国家権力を樹立するためには、この「自民党政府」を打倒しなければならぬ。

しかし、この「自民党政府打倒」の闘争は、多種多様の「反政府運動」を伴って進行するのであって、これらの運動やまた「自民党政府打倒」闘争内部における共産主義者以外のブルジョア・小ブルの闘争との区別を明らかにし、党派闘争

理解できなくなるのだ。

われわれが当面している戦争の問題の根本がここにある。戦争に対するわれわれの第一の原則的立場は、革命と反革命の戦争、階級戦争、全人民の武装にもづく自国帝国主義政府打倒の戦争、「内乱」が、われわれの原則であり、立場である。

ところで、この革命と反革命の戦争は、日本帝国主義軍隊の解体を任務とするが、この侵略・反革命軍隊の強化、反革命を推し進めているのは誰か？ それは、三菱を中心とした巨大独占であり、岸・佐藤・福田を中心とした自民党系であり、「ストップ・ザ・三菱」を旗印とする三井・住友も同様である。

われわれの帝国主義軍隊・侵略反革命軍隊の解体の闘いは、この巨大独占体の解体・収奪・自民党政府粉砕の斗争である。この標的に向け、斗争の射程を合わせ、全人民を武装させてゆくこと、そして自民党政府、巨大独占体そして自衛隊の必死の反革命を打ちやぶることが、反革命に対する革命戦争の日本における任務である。

自国政府打倒・自国帝国主義打倒、自国帝国主義軍隊・侵略反革命軍隊粉砕の闘い、これが、今日のはじまりである戦争の日本における政治的任務・目的である。

第二に、この戦争は、決して一国的斗争によって勝利することが出来ないことは、革命と反革命が、世界ブルジョアジーに対するプロレタリアートの二大階級の間の、二つの陣営のあいだの戦争である点である。すなわち、「自国政府打倒」の斗争は、世界帝国主義の「侵略反革命を世界革命戦争に転化せよ」という共通の一つのスローガンのもとに結集した戦争の一部分、一環、一構成要素として闘うことによつて、はじめて勝利することが出来るのである。ここに、我々の戦争に対する第二の原則的立場がある。

この第二の原則、プロレタリア国際主義の原則と第一の帝国主義足下における「先進諸国」の「自国政府打倒」斗争とは矛盾したものではなく、第一の原則は、まさに第二のプロレタリア国際主義の過渡期世界という現段階の原則の一部分である。

「帝国主義の侵略反革命を世界革命戦争に転化せよ」そのために、帝国主義足下における日本のプロレタリアは、「自国自民党政府を打倒せよ」「帝国主義軍隊・侵略反革命軍隊（自衛隊）を解体せよ」「独占体（三菱・三井・住友）を収奪せよ」

を断乎としておし貫くことが要求されている。「自民党政府打倒」も従来の反政府運動と同様、決して共産主義者だけが掲げる政治スローガンではなぬ。

今日、階級闘争が、60年代の反政府運動から「政府打倒」闘争に転化していることは誰の目にも明らかである。階級闘争は、現行政府に反対することによって満足していた段階から、現行政府を打倒することによって新しい政府をつくらねば一歩も前進することができないような段階に入っている。

この転換の中にあつて、共産主義者に要求されていることは、階級闘争が反政府から政府打倒の質へ高まっていることを指摘するだけでは不十分である。

反政府運動にもあれやこれやの政治潮流がありこれとの党派闘争を展開せねばならなかつたように、いまははじまりつつある政府打倒闘争の内にもブルジョア的小ブル的なあれやこれやの潮流が混在しているのであって、これを鮮明にさせることなくしては、政府打倒闘争を共産主義者が指導することができないという点に、今日全ての党派がゆきあたっている問題がある。

「政府打倒」より正確には「自国政府打倒」もっと詳しくは「自民党政府打倒」の政治目標は、確かに反政府よりはより正しく現在の階級闘争の当面している段階を指摘している。しかし、共産主義者は、この「自民党政府打倒」闘争がひきおこしているあれこれの潮流とプロレタリアートの政治目標を区別し鮮明にすることがなければ、「武装」と「戦争」の問題と同様、大混乱を招かざるを得ないのである。

東大闘争から4・28霞ヶ関占拠闘争の過程で論争 た「内閣打倒」か「政府打倒」かをめぐる争点は、「反政府」から「政府打倒」への転換をめぐる闘争であったが、4・28霞ヶ関占拠、中央権力占拠、首都占拠という政治目標は、反政府から政府打倒の中間か、過渡的政治要求に終わったのである。

そして、4・28以降、全党派に問われた政治の中心問題はまさしく、「政府打倒」のより正確な政治要求を提出することであり、この問題に未だ解答を与えられていないということ、ここから赤軍派の「大阪戦争―東京戦争」や中核派の「人民の敵―機動隊を粉砕せよ」とか「首都制圧―北大阪制圧」とかいった、アイマイな一般的政治要求にとどまっているということである。それは4・28の「占拠」よりもアイマイであったり、部分的であったりしているのである。

ここで我々に要求されていることは、第一に、この新しい段階の大衆闘争の全体のスローガン、又一切の統一戦線のスローガンを「自民党政府を打倒せよ」

という、短いスローガンとして提出することである。そしてこれにもとずき、機動隊の問題を「自民党政府の私兵（ボディ・ガード）機動隊を粉砕せよ」といった形で明らかにすることである。

第二に、より詳しく「侵略反革命の自民党政府（佐ト政府）を打倒せよ」又は、「独占（三菱・三井・住友）の先兵・自民党政府（佐ト政府）を打倒せよ」又は、「侵略反革命（戦争）を目ざす独占の先兵、自民党政府（佐ト）を打倒せよ」といった形で提出しなければならない。

第三に、これが決定的に重要であるが「武装問題」における全人民の武装を、この「政府打倒」と結びつけて提出することである。即ち「侵略反革命武装の推進者、自民党政府を打倒せよ」「侵略反革命武装を目ざす独占の私兵……」といった形で提出することである。

第四に、われわれの戦争に対する4つの原則と結びつけて「政府打倒」の性格を鮮明にすることである。

以上は党派闘争と統一戦線の程度によって決まることであるが、重要なことは自民党政府の性格を、そのよって立っている基盤である独占と武装と戦争の基本性格からはっきりとさせて提出すること、ここにわれわれの「政府打倒」における立場、他の潮流と自らを分かち基本性格を、政治要求の内容をはっきりさせることである。

### ②\* 臨時革命政府の樹立

しかし、こうした「政府打倒」の要求とその政治性格は、まだあいまいであり、漠然としており、共産主義者は「政府打倒」を打倒にとどめるのではなく、プロレタリアートが現行政府を打倒して、どのような政府をつくらねばよいか、という点まで深めない限り、共産主義者が、他の全ての政治潮流からプロレタリアートを守り、正しく指導することは出来ない。

第一に、われわれは、「政府打倒」を本当に実現しようと思えば、現行政府のあれやこれやの又、基本性格をあげつらっているだけでは足りないのだから、われわれが現行政府を打倒した場合、どのような政府をつくるのかという問題に答えなければいけない。この問題を提起出来るのは政党だけであって、大衆団体にこのことを期待するわけにはいかない。当面、われわれは、この問題をたゞえ不十分であったとしても、「臨時革命政府の樹立」の要求として提出しなければならぬのである。このことを認めようとしなければ、本当に「政府打倒」

そして世界プロ独がどれほど困難であらうと、歴史はこれ以外に解決の道をもっていない以上、他の諸国の労働者、全ての民族と、全ての民族の労働者が共同して、この困難な任務をまっとうしなければならぬこと。

そして我々はこのことを承認するどんな民族、人種、国家、労働者、人民、個人をもうけ入れ、又共に努力するだろうことを謙虚に訴えることである。

### ③ 全人民の武装

わが共産主義者同盟は、プロレタリア独裁を基本的な結集点としている。然し、プロレタリア独裁の問題を思想、政治一般としてではなく、「プロレタリアートの武装」「全人民の武装」の問題として提出するためには、まず何よりも党が武装されなければならないこと、軍事を指導する党にならなければならないことである。

これはすでに67年10・8以降、なかんづく今年4・28以降我々が基本目標としてきたことである。

東大闘争前後のキム（共産主義青年同盟）の結成はその第一歩であった。然しキムの結成をめぐって、その組織性格をめぐる議論があった。それは、キムに大衆の性格をもたせるのか？ それとも戦闘団としての性格をもたせるのか？ というものであった。そしてキムは党の直かつする大衆の組織として結成されたのであった。然しまさしく東大闘争によって切り開かれた局面は党が予想する以上に巨大な大衆の高揚、武装（バリケードとゲバ棒とビン）を一挙に促進したのである。このことよってキムはその大衆の性格によつては決してこの新しく生まれる武装集団を組織し、指導することはできなかった。4・28に向けての「突撃隊」の結成をめぐる討論はまさしくこのキムのおちいっただけをどのよりに打破するかであったし、「軍事」を指導する党になるために、党が革命されなければならないこと、党が武装されなければならないことである。

まさしくこの「キム」と「突撃隊」をめぐる問題、又党の武装・革命をめぐる問題こそ、特にキム、突撃隊の同志から提出されて来た問題であった。

この間の党内闘争、党派闘争の根本問題はここにあったし、決して戦術をめぐる論争ではなかった。

を実現しようとしなければならぬ。

第二に、この「臨時革命政府の樹立」の要求を、当面、まず何よりも上記の武装問題と、戦争問題としてまとめて提出することであり、共産主義者同盟は、もし大衆が望みならば、政権をとる用意があること、政権を維持する能力を、われわれ共産主義者同盟だけが持っていることを断乎として宣言しなければならぬ。われわれが国家権力を握り、これを維持することは、もしプロレタリアートがこの権力を望み、支え、全面的に参画し、政治・社会・経済の諸機構を掌握する用意があれば、われわれははっきりとこのプロレタリア独裁権力を維持してみせるだろうことを公然と宣言しなければならない。

「臨時革命政府の樹立」の要求をこのように形で提出することである。

第三に、この政府の樹立が、何故プロレタリアートの全面的な参加によるものであったとしても「臨時革命政府」にならざるを得ないのか、何故完全な政府をつくるのが出来ないのか。

この点を今日の戦争の性格に端的にあらわれずにはおかない世界史の現段階を踏まえて説明すること。

過渡期社会における革命と社会の建設が何故「世界プロ独」にもとづく「世界社会主義」でなければならないのかという問題を明らかにすること。

単に、プロレタリアートが自衛隊を粉砕した場合、米・ソの反革命干渉戦争の不可避的な現実を説明するだけでは不十分であって、資本主義が、いやもっと長く、階級闘争の全歴史過程と、特に帝国主義の不均等発展がもたらした、又もたらしつつある世界の経済・社会・政治の現状という今後が、一国的な過渡期社会の建設を困難としており、富と貧乏の世界的不平等、社会発展の不平等、精神労働と肉體労働、世界の都市と農村との、そして民族国家に固着している資本制生産諸関係の世界社会主義による打破の不可避性、生産と消費の、労働と消費のしかた、すなわち資本制生産様式にとつてかわる社会主義的生産様式の世界性を説明する必要がある。そしてプロレタリアートが世界的に団結するならば、歴史の発達の今日的段階が世界社会主義を可能にするのだ、しているのだ、ということの説明し、当面我々がつくる権力問題がなぜ「臨時的なもの」でなければならないかを明かにすることが第三番目に重要である。

第四に、わが共産主義者同盟だけがそのような未来の社会、世界プロ独↓世界社会主義↓世界共産主義を明かにしようとしていること、プロレタリアートの世界綱領を検討しつつあること。

ればならない。

我々はこの教訓を踏まえて軍事を指導出来る党に飛躍する試みをこの赤軍派との分裂以降努力してきた。

それはプロレタリア独裁の問題を思想から政治へ、そして武装・軍事へ貫徹することと同時に、この武装・軍事が要求するプロレタリアートの政治的要求を提出するといふ任務を同盟がはたさねばならないことを意味している。

全人民の武装は、同盟がまずもって自ら軍事を指導すること、そのために要求されるより高い政治的質にもとづく団結を行なうこと、この二つの実現からはじまっていることをはっきりさせなければならない。

より高く深い政治的質にもとづく党の新しい団結形態としてのみ、軍事を指導する党が生まれるのである。

この党の新しい団結の質とこれに主導された団結の形態の問題とせず、従来の党の質に基づいて、又従来の団結の形態に手をふれず軍事を組織した場合、軍は組織することができないか、又はこの軍事はブルジョア的、小ブルの性格、要素分子を、ひいては権力のスパイをその組織にもりこませてしまい、事前の弾圧により一網打尽となるか、又は権力に利用されることになるのである。

われわれが軍事と軍隊を組織する場合、決定的に重要なことは、第一にこの軍隊と軍事の政治的質を決定してかからねばならないことである。この政治的質は九回大会で確認され、上記の政府と戦争に対する原則的立場によつて規定されたわれわれの路線によつて定められなければならない。

第二に、九回大会はこれに基づき「全人民の武装」を、①政府中枢の大衆的武装攻撃闘争（正面対峙）、②「権力再編をばい介に、警察・自衛隊・米軍とのバルチザン戦争」、③「占拠・拠点政治ストをパターンとしたマッセストの戦略的実現」（根拠地）の三つを「日本におけるソビエトの戦略的形形成、蜂起への道すじ」としたのである。

そして「この三つが融合したものとして」「全人民的武装蜂起」は克ちとられること、この「正面対峙、バルチザン、根拠地は一つに統合し」「蜂起機関は権力機関としてソビエトを樹立する」「ソビエトの戦略的形形成、蜂起の道すじ」とした。（その組織については九回大会報告を参照せよ。）

### ④ 「自民党政府打倒」をめぐる諸潮流

今日の自民党政府打倒闘争には、いろいろの政治潮流がからみ合っているし、

このいろいろな政治潮流をなくしてしまふことはできないことではない。

自民党政府に対するクーデター、そして中間政府などの動きが、この政府打倒闘争の時代には(われわれの臨時革命政府の要求とともに)現われている。

現行政府に対する政府打倒闘争は、左からの臨時革命政府を要求させるとともに、右からのクーデター、そしてまた、「全人民武装」と断絶したテロリストのクーデターによる「臨時革命政府樹立」の試み、といった形で、諸々の動き、潮流を生み出すにはおかない。

また、自民党ニューライトを中心とした中間政府構想、共社、公明、また共産社会をはじめとする野党の「中間政府」の試みが、この運動の過程に立ち現れずにはおかない。

われわれの政府打倒闘争は、当然こうした反革命を胎んだ運動、要求、分子を不可避的に生み出すにはおかないのであり、これを恐れてはいてもできないのである。

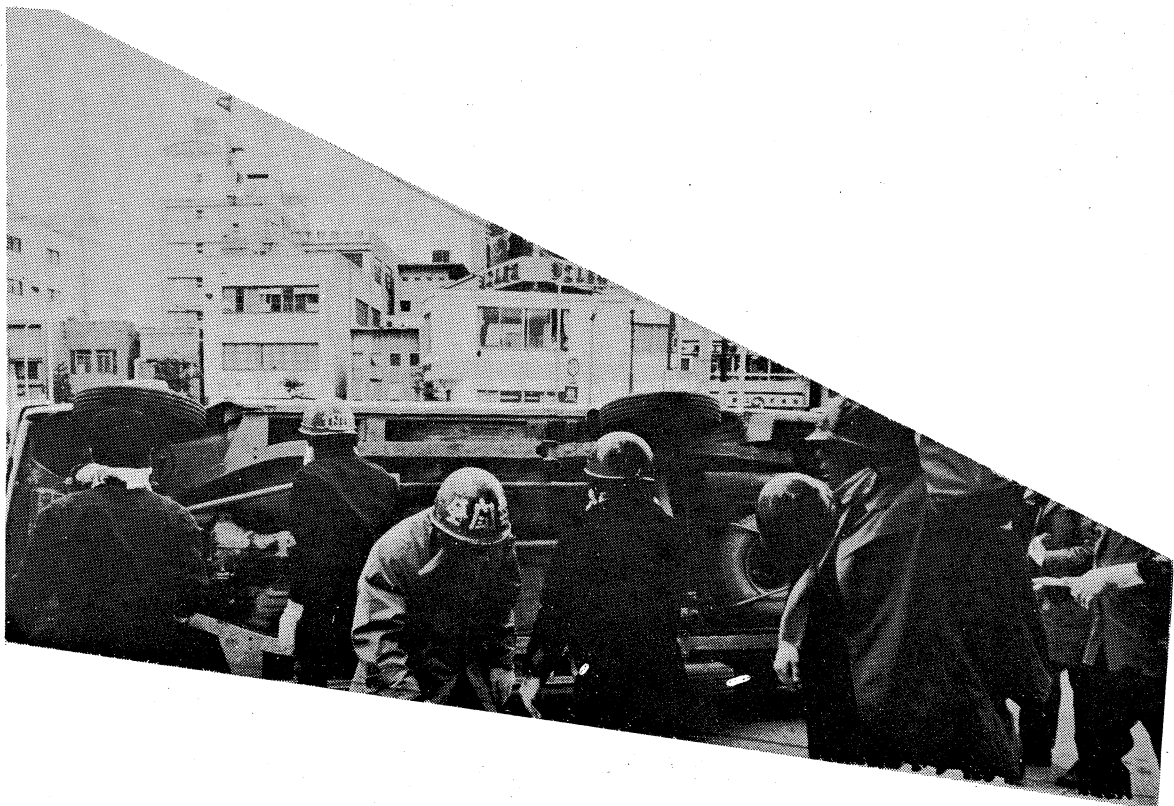
われわれは、この政府打倒闘争の過程において、こうした潮流と自らを区別し、これらとの党派闘争を不断にくりかえし続けねばならないのである。

そして、誰が真にプロレタリア人民の利益を代表しているのか、侵略・反革命をめざす独占と誰が闘っており、誰がニセモノをはっきりさせねばならないのである。

この「クーデター」と「中間政府」をめぐる問題が、この政府打倒闘争の全過程にわたる党派闘争の基本である。

## 第七章 70年代を担いきる革命党へ

(十一月七日号の「戦旗」紙上に発表)



われわれの戦略は、軍事の問題を軸にした革命党の飛躍の問題として説明され、よってもって、軍事問題を政治問題として解決しえたのであった。

### (2) 軍事と革命戦略

周知のごとく、われわれは9回大会において、過渡期世界論を、レーニン帝国主義論の継承発展として確立し、「戦争を内乱へ」といったレーニンの古典的テーゼの検討をし、世界同時革命の戦略を「前段階決戦を世界プロ独へ」と具体化していった。だがこの内容提起は、単にコトバの問題としてとらえられてはならず、まさしく、従来の革命運動に対する価値観の転倒を要求するものであった。とくにそれは軍事問題において集中的にあらわれた。

すなわち、すでに確認済みなことであるが、レーニンにおいては帝国主義軍隊の解体が革命情勢の客体的条件として前提されており革命家の任務は、敗戦によって解体した軍隊をいかに革命の軍隊(赤軍)へ組織するかが課題にされていた。だが「前段階決戦を世界プロ独へ」と提起するならば、それは「平時」からの帝国主義軍隊の解体＝革命の正規軍の建設という、従来のマルクス主義の常識を越えた問題の解決をせまられるのである。(ここで使用している平時はカッコつきの平時であり、その意味は過渡期世界においては革命への客体的条件は平時から成熟しており、その意味では平時においても危機が存在していることであり、単なる平時との区別が必要であるからである)

### (3) 帝国主義国での革命戦争

このことは、単に、植民地従属国において、革命戦争がプロ独への道であることにとどまらず、高度に組織された帝国主義国においても革命戦争がプロ独への道であることに他ならず、われわれの世界革命戦争の概念が、民族解放戦争とプ

すでに明らかにしたごとく、10・21闘争においてわが同盟は党の革命の不徹底性からその当初の戦術を貫徹しえず、挫折を余儀なくされた。この挫折は、階級闘争が70年代階級闘争への過渡期として、60年代階級闘争の質を変えつつあるとき、わが同盟がこの新たに形成されつつある階級闘争の質を指導しえなかったことによってもたらされた。それゆえ、党の革命ということも、この70年代階級闘争の質を指導しえる党への革命として提起されねばならず、党の革命の不徹底性とはなによりもまず直面する70年代階級闘争の質と、そこにおける革命党の任務を明確にしえなかつたこととしてとらえねばならない。そして、70年代階級闘争を荷い切る革命家の組織は、直面する69年秋の安保決戦に自らの全存在をかけて闘うことによってしか建設されないことが確認されねばならない。

## (I) 革命戦争論

### (1) 軍事と党の革命

われわれはすでに4・28闘争の挫折の時点から、階級闘争の質的転換、われわれが引きだした強力な反革命の登場を、単に、革命と反革命の相互の発展といった一般的な観点からではなく、過渡期世界の革命戦略との関係で説明してきた。

そして、9回大会においてマルクス以来の革命戦略を過渡期世界の科学的分析に立脚して解明し、「前段階決戦を世界プロ独へ」という戦略を確定した。

革命の根本問題が国家権力の問題であるという一般論にとどまらず、まさしく、70年代階級闘争を世界同時革命に直結した世界革命戦争の質へと引きあげねばならない現時点において、軍事の問題が最高の政治問題として登場してきているが、この現在の軍事問題を革命戦略から規定することとわれわれにとって緊急の課題であった。だから、「前段階決戦を世界プロ独へ」という内容に要約されるわ

口復活運動及びソビエト運動の結合として提起されているのも、現在の植民地従属国における革命戦争の延長上に世界革命戦争及び帝国主義国における内戦を規定しえないことを明確にしたのであった。

帝国主義戦争における内戦の問題は、第一に、過渡期世界の止揚、世界同時革命にむけての世界プロ独樹立として、それゆえ世界的規模での戦争との関連で明らかにされると同時に、第二に今日の労働者階級の即自的団結形態が、階級的に再編され、世界プロ独に向けての階級的団結形態を闘いとする内容として具体化されねばならず、第三にこの客体と主体とを結合し双方を止揚する党の問題として解明されねばならない。

われわれは、帝国主義の反革命同盟の再編がもたらす軍事外交、侵略反革命戦争が、レーニンの時代のごとき国民的集約力をもちえず、むしろ国内における政治的分裂を促進し、帝国主義軍隊自体を解体させていることをみておかねばならない。この帝国主義における政治的分裂は、現段階においては、階級自体がその内部で政治的分裂をひきおこしている点に特徴を示す。この原因は萌芽的には、レーニン帝国主義論で展開された労働貴族の問題として発生しつつ、今日においては、プロレタリアートの即自的団結形態としての労働組合が、議会制民主主義体制の一翼に組み入れられていることにその基礎をもっている。

#### (4) プロ独派登場の基礎

この労働組合が既成の秩序に組み入れられていることによって、帝国主義の反革命同盟の再編の内実たる軍事外交路線が既成の秩序総体を思想的に統合したかたちでは進行せず、むしろ、帝国主義権力は、警察・官僚等の行政機構を肥大化させつつ、その力でもって国民的集約をなしとげようとし、その政策の一環としての帝国主義的労働運動の育成として、階級分裂が促進されるなかで、労働運動の内部にプロ独派が登場する基礎が形成され、そしてプロ独派が社会的勢力として登場しようとするとき、過渡期世界における階級闘争の新たな質が展開されるのである。

すなわち、プロ独派の登場ということが、帝国主義国における政治的分裂を一層促進し、人民戦線派、ファシズム派の成長をうながし、帝国主義権力の基盤を、その政治的統合力を弱めるが故に、帝国主義権力はプロ独派の粉砕にその全精力をかけるのであり、そしてこの階級闘争の煮つまりは、帝国主義国における階級闘争をも内戦の質をもったものへと導かずにはおかないのである。

の分野をも含めた革命としてあるのだ。

そのようなものとして、大衆闘争の路線を極限化した赤軍派の11月蜂起・臨時革命政府という路線が、安保決戦の戦術に戦術内容を実現しようとし、党の革命の糸口すらつかみえなかったことが総括されねばならない。

中央権力闘争とマッセストというわれわれの戦術の不発の原因を基本的におさえた上で具体的な分析にうつらねばならない。その際のわれわれの視点は、単なる総括のための総括ではなく、まさしく11月佐藤訪米阻止闘争組織化のための教訓をくみださなければならぬのである。

#### (2) ソビエト運動論の整理

まず明らかにされねばならないものは、現段階の全共闘運動及び反戦青年委員会の闘争に対する評価である。この問題は単なる評価としてではなく、従来のわれわれの位置づけをより正確にするものとして解明されねばならない。とくに、全共闘運動とソビエト運動の関係が従来いまいにされてきたことが、整理されねばならない。ソビエト運動とは、今日の全共闘運動や、反戦の運動実体をさすものではなく、それは過渡期世界における革命党の階級形成論の内容としてあることがまず把握されねばならない。

すなわち、ソビエト運動とは現存する闘争ではなくて、その闘争を指導しぬく組織論的な意味での目的意識性なのである。そして今日の革命党が何故こうした階級形成論を持たねばならないかと言え、それは前述したごとく、日常闘争において、ソビエト型組織によってしか、階級的闘争を展開することが出来ないところの過渡期世界の階級闘争の質に対応したものに他ならない。

われわれの従来のソビエト運動論に対するあいまいさによって、ソビエト運動論を政治方針的に提起してみたり、また、今日の全共闘や反戦をソビエト運動として位置づけたりする傾向が存在したが、こうしたあいまいさが、10・21闘争におけるわれわれの軍団建設を不徹底にしたことが総括されねばならない。

もし今日現存する全共闘・反戦の運動をソビエト運動の萌芽として位置づけるならば、それは、好むと好まざるにかかわらず今日の運動の延長上にソビエトを展望しその結果、大衆の自然発生性にハイキすることになるのである。後に具体的に分析することく、今日の運動はとうていそのままでソビエトには発展しないのであり、内戦を指導しうる党に指導されない限り、ソビエトは実現することはないのである。

そして、プロ独派の立脚点が今日の労働組合に即自的に依拠することはできず、世界プロ独に向けての階級的団結として形成されねばならず、プロ独派独自の階級形成論が問われ、これに対し、われわれはソビエト運動論として、解答を与えてきたのである。

#### (II) ソビエト運動論の発展

##### (1) 階級闘争の転換と中権闘争

われわれが、69年の階級闘争を70年代階級闘争への転換点としてとらえた内容は以上のようにありそしてわれわれは、60年代階級闘争の蓄積の一切を70年代階級闘争の質へ一気におし上げるべく今秋安保決戦を位置づけたのであった。そういふものとして、われわれは中央権力闘争とマッセストを提起したのであった。だから、10・21闘争の総括は、最も中心的な問題として、われわれの軍団の闘争の十分さの問題が党の革命の不徹底性の問題として明らかにされねばならないと同時に、一方、中央権力闘争とマッセスト総体が不発に終わったところの階級情勢の成熟度を明確にすることをせまられているのである。

このふたつの問題は別々のものではなく、まさしく一体のものとして存在しているものであり、それゆえまず10・21闘争にみられた階級闘争の成熟度の問題が明らかにされねばならない。

さきにもふれたごとく、中央権力闘争とマッセストというわれわれの戦術は、革命的左翼と反帝統一戦線総体を牽引しえたときにはじめて実現するところのものであった。60年代階級闘争の質（大衆闘争）においては、個々の闘争戦術に戦術的展望を与えることが出来るゆえに中央権力闘争とマッセストという内容が、大衆闘争の戦術として提起されたが、70年代階級闘争への転換期においては、個々の戦術と戦術内容との分離が起きるのである。

すなわち、大衆闘争の時代において、われわれは個々の戦術を戦術内容から規定し、戦術内容を進ませる戦術を提起することによって、諸党派を領導してきたのであるが、階級闘争が内戦の質をもつて来るとき、戦術の実現とは他ならぬ武装蜂起の実現であり、それを個々の局面の戦術においては実現しえないのである。従来のわれわれの党派性であったところの戦術の貫徹のなかで戦術を実現しようとする傾向は、蜂起に向けての計画としての戦術としてまとめあげられねばならず、党の革命とは、軍事問題を軸としつつ、われわれの政治方針や組織活動

その意味では、党組織論はレーニン時代の武装蜂起の党から、恒常的武装闘争を指導しうる党として新たに位置づけられねばならず、そして、過渡期世界においては、この恒常的武装闘争の内実が階級形成論としてのソビエト運動論に導かれねばならないのである。だから、われわれの中央権力闘争とマッセストという戦術は、両者のラセンの展開や、ないしは相互作用として存在するのではなくわれわれが10・21マッセストを組織するなかでこの両者は全く同質の、すなわち蜂起の質をもつていることが明らかになったのである。そして、この党によって指導された蜂起の質が、さまざまな実現形態をもつのであり、この実現形態の確定は、階級形成論としてのソビエト運動論から導かれるのである。

##### (3) 全共闘運動の現段階

以上のソビエト運動論の整理によって、われわれは全共闘運動の現段階を鮮明に出来るし、現段階における党の任務を確定しうるのである。全共闘運動がそのままソビエト運動なのではなく、それはソビエト型組織による運動であることがまず理解されねばならない。そして、このソビエト型組織が、運動を持続するには、権力に対する武装が条件である。この武装によって、全共闘運動は大衆と結合していったのである。それゆえ両階級にとってひとしく70年代階級闘争にむけての転換点である安保決戦において、敵階級は大学立法をテコに全共闘の武装解除をおし進めていったのであった。

われわれはこの段階においても全共闘運動総体を安保決戦へ領導しようとしたのであるが権力による全共闘運動の武装解除は、すでに東大闘争によって切り開いた階級闘争の局面に対する強力な反革命によって権力が武装していることを意味しておりこの現局面における階級闘争の質がわれわれに活動の転換を要求したのであった。

##### (4) 反帝戦線の建設（従来のシンパ組織との区別）

このような階級闘争の転換点において、われわれ自体も活動の転換が要求され、それを意識的に進めて来たのであるが、さらに9回大会以降の組織活動に関する点検がなされねばならない。

われわれの党活動は、当初全共闘武装行動隊及び反戦武装行動隊の建設として提起され、これらを反帝戦線に統合するという方向性を打ちだした。だが、先述したごとく、全共闘の武装それ自体が解除されてゆくなかで、全共闘武装行動隊

自体組織しえず、むしろ、社会学同の飛躍と組織力の強化が提起されていた。だが、何よりも明確にしなければならぬ事は今日の全共闘運動の解体状況が、全共闘の方針等々では再建しえない局面にあり、むしろ、党派の再結集を基軸とした11月闘争の貫徹が一切の鍵であることである。そしてわれわれが準備している反帝戦線は、従来の全学連の延長に考えられてはならず、また、ML派の解放戦線方式とも異質な組織として建設されねばならないのである。

われわれの反帝戦線という組織路線は、一言でいうならば、革命戦争の時代の党組織の構造を、現段階から建設しようということに他ならない。ベトナムにおける解放戦線は、党と、人民解放軍の存在によってはじめて形成されているのであり、それゆえ、軍の基本問題を解決せずに、解放戦線を組織しても、従来の大衆的活動家組織や党派の囲い込み組織と何ら変らないのである。

われわれの反帝戦線は、まさしく、9回大会路線の具体化としてあり、それは、党と軍に指導された内戦を切り開く組織として、確立されねばならない。それは、まさしく、世界プロ独にむけての、階級的団結を強化する組織として各地区に建設されねばならない。

### Ⅲ 訪米阻止と70年代

以上の総括のなかで、われわれは、佐藤訪米阻止闘争にいたる現局面でのわれわれの任務を確定してゆかねばならない。首都制圧、佐藤訪米実力阻止闘争をいかなる質の軍団で闘いぬくかが問われている。

敵階級は、われわれが作りだした全共闘運動に対し、機動隊を軸としたより強力な反革命をつくりだし、10・21においては、機動隊が首都を制圧した。この局面においてわれわれに問われる軍事路線は、軍及び機動隊をいかに解体するかであり、全共闘が学園を制圧していた時代の戦術、「とりでから街頭へ」は適用しえなくなっている。

こうした現状こそ、わが同盟の戦略から規定された軍事と党が、具体化される好機である。われわれは古い型の組織活動にこだわることなく、軍事編成を軸とした新しい型の組織活動を身につけねばならない。それは何か一片の通達で組織されるのではなく、まさしく組織の中枢が、大衆と交わり、大衆を組織する第一線に立たねばならない。

何故ならば、われわれが、佐藤訪米阻止闘争の過程で準備する新しい組織は、

## 第八章 11月闘争とわれわれの軍事戦略

(十一月十日執筆)

### Ⅰ われわれの軍事戦略(「内戦の開始」、「恒常的武装闘争」に ついで)

(1) これらは一国的視点からアレコレのことばいじりとなってはならず、 $\wedge$ 世界革命戦争 $\parallel$ 内戦 $\vee$ との関連で位置づけられねばならない。

(2)  $\wedge$ 世界革命戦争 $\parallel$ 内戦 $\vee$ を考える場合には、「三ブロック階級闘争」の平板的結合でこと足れりとしてはならない。帝国主義の侵略反革命戦争と世界革命戦争 $\parallel$ 内戦が、一体のものとして形成されねばならず、そのような世界的な陣型をいかに作りあげてゆくかが問われねばならない。(九回大会に於ては、「世界革命戦争の構成要素」としての、ソビエト運動、大陸革命、プロ独復活運動の関係が並列的であった。現存している革命戦争は「大陸革命」だけであるにもかかわらず。)この陣型が帝国主義の政治 $\parallel$ 戦争形態と規定しあうこと(もちろん社会 $\parallel$ 経済的には帝国主義の側からの一方的規定関係)を通して世界革命戦争が展開される。

(3) (2)については更に戦争が侵略反革命戦争としてしか遂行しえないこととの関連で、帝国主義下における諸階層分解 $\rightarrow$ 権力再編が必然であり、ここに帝国主義下での内戦の基礎が存在する。

(4) 部分的な諸階層の武装対峙は権力の最も弱い部分(例えば大学 $\downarrow$ 公共部門)において起こっている(内戦の萌芽)。だが、自然発生的なそれは不断に中央集権的帝国主義権力の再編 $\rightarrow$ 侵略反革命戦争への動員過程への再編統合に転じてゆき、諸階層分解は再び潜在化(なしくずし)される。

(5) これが、「権力の下に人民戦線派、ファシズム派が統合されており、プロ独派が暴力的に粉砕されようとする状況」の基礎であり、 $\odot$ が、その「萌芽的内

従来の革命運動の質をのりこえた内容であり、まさしく世界史的な任務であり、そこに60年以来10年の活動の一切を止揚した政治内容が問われるからである。まさしく、69年佐藤訪米阻止闘争を階級闘争の新たな第一歩として勝ちとられねばならない。

全国の青年諸君！反帝戦線の部隊に自らを組織し、われわれと共に世界史の新たなページを切り開こうではないか。

戦」の鎮圧軍隊として、侵略反革命戦争をきりひらく武装部隊として登場する根拠である。

(6) 貿易為替統制の下で超高度成長を果してきた日帝が、日米経済戦争(資本自由化)  $\rightarrow$ アジアなしくずしブロック化への移行に対応して、反革命同盟の枠から反革命同盟再編の枢軸の一つへと推転するということは、ブルの「ポストベトナム」の思惑如何にかかわらず、大陸革命の泥沼に日帝が片足から両足をひきずりこまれ、侵略反革命戦争への階層分解 $\rightarrow$ 権力再編を強行的にせねばならないということである。従来自民党票田としてきた中小資本、農民を経済的にばきりすてながら、新しい地盤をルンプロファシズム、帝国主義的労働運動として確立しきれないこと。侵略反革命戦争のための後方支援体制、兵站部、補給路をこうした階層として見出せないこと。自らの執行行政権力 $\rightarrow$ 公共部門の異常な強化、異常な負担に依拠してのみ諸階層分解とその統合を推進しようという状況が(V)の裏面としての敵の「弱み」である。 $\odot$ が侵略反革命軍隊として出動すること、大学、官公労に「内戦の萌芽」が生まれることは一つのことである。

(7) 内戦 $\parallel$ 世界革命戦争はこのような「政治」の延長であり、その「開始」「萌芽」というのはそれが(5)の如き状況をもって存在しているのが一部の階層であり、従って権力再編、侵略反革命戦争準備もまだ一定の段階に留まっているからである。

(8) 以上から「内戦の開始」「恒常的武装闘争」を客観主義的に考えてはならず現在の $\odot$ との遊撃戦を闘い将来において軍隊との機動戦(世界革命戦争 $\parallel$ 内戦)へ発展させるものとして、全人民を軍団(反帝戦線)へ組織して主導的に闘う党の正規軍(RG)の建設強化の問題をマキに語ってはならない。

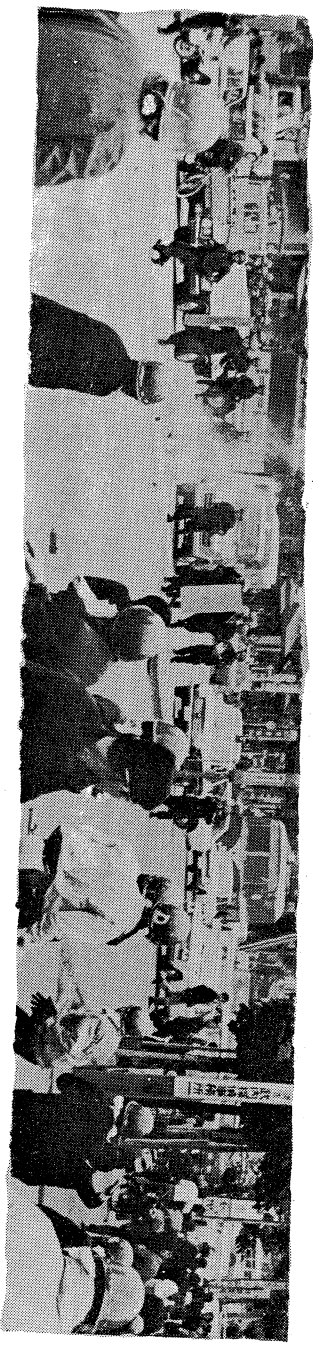
Ⅱ 「内戦の開始」と中央権力闘争、マッセンスト（九回大会軍事路線の深化）

- (1) 中権マッセンストは「革命の型」「ソビエトMの戦術」などと規定してきたが、その登場（昨年10、21）自体、こうした「内戦の萌芽」を基礎としてもち、であるが故に「自国政府打倒」の問題を大衆的に定着させる環となり、日帝打倒・安保粉砕の反帝統一戦線を成立せしめたのであった。
- (2) だが、(1)の発展自体、まさに「潜在」していた「内戦の質」の顕在化である。大学Ⅱ全共闘Mは一月安田戦において革命的左翼が全く大衆と分離して、<sup>②</sup>と軍事的対 状況をつくりだし（萌芽的「軍」）昂揚をひき出したのを頂点に、<sup>③</sup>制庄Ⅱ権力再編が「大学立法」へ向け進行し、4・28中権闘争は反帝統一戦線で闘われつつも<sup>④</sup>の「一日軍政」によって求心的デモに終った。
- (3) 大衆の中権、マッセンストは今後も「到達目標」などではなく、その間隔が半年〜一年になるにしても大衆を内戦へ向け階級形成し政府打倒の統一戦線を具体化してゆく闘いの戦術である。だが敵が、このような半合法的闘争に対しては、一日〜数日の中枢、拠点制庄Ⅱ軍政化をもって、迎え撃てること一つを考えてみても、そこへの外からの一角突破が大衆の指導のために必要であり、それは大衆と全く分離した軍団でなければならず、下からの軍団建設では不可能である。
- (4) だが正規軍建設の独自の任務は(3)にあるのではない。それは、世界革命戦争Ⅱ内戦をきりひろくものとして、まさに、「萌芽」としてある内戦を顕在化し、「部分」としてあるそれを「全体」化するために闘うのである。そのような戦闘こそ、正規軍が地区軍団Ⅰ反帝戦線をしたがえて闘う<sup>⑤</sup>侵略反革命武装部隊に対する遊撃戦である。
- (5) 中権闘争、マッセンストが「内戦」の質をもってきたというのは、(3)の如き現象をとらえていうのではなく、まさにまず(3)とは全然「別の次元において」(4)が問題になり、正規軍が問題になってきたことをいうのである。また、それが第一義的に問題とされることぬきには、(3)の質は何ら変らないのである。
- (6) だから、われわれは(4)についてのみ「遊撃戦」とこれを定義し、その他の(3)などについては「〇〇戦」とは呼ばない。(4)は奇襲を基本とし、一個一個の戦闘で確実に勝利をあげる。すなわち、小部隊の機敏のせんめつ（Ⅱ解体、武装解除が主目的）である。

体が、「左派フラク」とは全く異なる「軍団」であり、本格的内戦Ⅱ世界革命戦争において、真の意味の「革命の軍隊」化する正規軍をともに構成する軍の一部として現在から準備されなければならず、そのためには、軍Ⅱ正規軍それ自体が独自に確立されねばならないからである。すなわち反帝戦線から正規軍が規定されるのではなく、正規軍から反帝戦線が規定されねばならないのである。地区軍団についても同様である。正規軍が旧来の党Ⅰ社会学、キムを、「軍事をばらむ党」に革命する意味で「将校軍団」というのは正しいが、ただ、「どのよう軍事なのか」「正規軍それ自体の独自の任務は何か」に回答しえなければ、いくら「将校」をつくっても屋上屋を重ねるだけになってしまう。

(2) 正規軍は(2)の諸項で明らかになった軍事（Ⅱ内戦Ⅱ世界革命戦争への全人民の武装）を提起することにより、あらためて政治を政治の問題として党に要求する。軍をにならざる党、義務兵役、生命を預けうる党、その前提としての綱領的団結である。統一戦線も、政府打倒、武装を軸として再確立されねばならず、特定地域においては「政治的解放区」へ接近するものとなる。

以上の整理の上に立って11月闘争に全存在を賭けよう。内戦は持久戦であるとはいえ、それへの過渡期の「過渡期」たるゆえんは、依然として副軸として継続される半合法的闘争では、内戦の論理（Ⅱ勝てる時だけ闘う）は恣意的に適用できず、やはり、「闘えば敗北し、闘わねば自滅する」という論理が厳として存在することである。世界革命戦争と党の革命はこの闘いの火焰の中をくぐりぬけたものによってのみ可能である。



- (7) この闘いを将来、正規戦、なかんづく機動戦に発展する遊撃戦として闘うのである。<sup>⑥</sup>の消耗を通して自衛隊を丸裸のままひきだして、本格的内戦Ⅱ世界革命戦争において解体するということである。この世界革命戦争Ⅱ内戦では、機動戦が主であり、陣地戦が漸次重要な位置を占め、遊撃戦がこれらを媒介するのであり、この時点においては、先、後、労働家の差は漸次止揚され、こうした革命戦争の法則が全世界を支配する。それは、プロ独Ⅰ世界プロ独という過渡的権力を通した社会主義Ⅰ共産主義への世界戦争である。また、こうした正規戦の開始とともに、正規軍が直接、革命の大衆の中から新兵募集を行うことが普遍化し、それとともに世界的な正規軍の実体的統合の問題が現実化しうる（現段階ではAALAの大陸革命軍のみ）。
- (8) 「内戦の開始」の時代が、先の如く主体化され、顕在化されるならば、はじめて、(2)の新たな飛躍をもつての貫徹が可能になり、「自国政府打倒」の再定着とその基礎たる反帝統一戦線（武装を軸とした統一戦線へ再編）の確立がなされることにより、人民戦線派（権力の下に統合）への全面的切りこみ、その解体の条件が整う。これによって、われわれは新たな合法的活動の領域を拡大し、しかもそこで党派性の貫徹が可能となる状況がひらける。（徹底した平和的大衆的デモ、政治集会）。現在は消極性としてしかないものが、積極性に転化する。こうした基礎にふまえて、軍部Ⅰファシストの「クーデター」、人民戦線派の「中間政府構想」に対し、自国政府打倒の内実を「臨時革命政府樹立」として具体化することが要求されるのが、この段階なのである。
- (9) いわゆる「政治的解放区」については、中権、マッセンストが、権力中枢解体（Ⅰ内戦の質を具体化して）をめざして貫徹されるその拠点として（だから首都、大阪などが当面）のみ成立しうる。正規軍に牽引されてかかる運動を領導する反帝戦線も、地区ではなく全国がまず基本である。
- (10) 佐藤訪米実力阻止を羽田主戦場として闘うことについては、(4)の確立をもつて(3)の再飛躍が未熟で10、21神田Ⅰ霞ヶ関の破綻（二重の）からくる階級関係に踏まえ（政策阻止↓現地闘争へ流れ）その止揚をめざす過渡期の闘争として把える。

Ⅲ 正規軍と党

- (1) 正規軍を反帝戦線の将校軍団としてはならない。そのわけは、反帝戦線それ自



# おわりに 11月闘争の総括にかえて

(十一月二十五日執筆)

11・16、17斗争は、10・21斗争によって明白になった階級斗争の新たな局面を革命的左翼がいかに総括して闘うのかが問われた。権力の対応は10・21とほぼ同様であり二万五千の機動隊による霞ヶ関―羽田のロック・アウト、交通機関のシャ断、自警団の組織化その他であった。だが諸党派は10・21とほぼ同様かそれ以下の斗争しか組織しえず、唯一我々が①機動隊せん滅の戦略的位置の確定と中権斗争―MSTの恒常的武装斗争と結合しての展開②70年代階級斗争の基本性格③RGR―反帝戦線建設の組織路線などを明らかにすることによって、④正規軍の非公然ながらの登場⑤武器の質⑥反帝戦線建設を展望した学生、労働者の軍団建設などにおいて、10・21斗争からの飛躍をある程度とげることができたのみであった。10・21斗争に比して権力は霞ヶ関―羽田の二拠点を防衛しなくてはならず、その結果部隊の蒲田結集をある程度許容する方針をとったから、各党派は蒲田周辺でいくつかの戦斗を実現することはできたが(青解の東京駅での大量逮捕は論外)、羽田空港に接近することには失敗し、社会党中央の集會中止決定をはねのけての社会党大田区支部の六郷土手集會などありつつも、17日の斗争を闘い続けることは出来なかった。このことは我々の飛躍そのものが、いまだ他党派をけん引するまでに至らなかったところの限界であり、結果として我々は再び全国党派として武装蜂起↓世界革命戦争へ向けて全国政治斗争を領導する位置を獲得したにとどまったのである。そして、実際、我々が10・21斗争の敗北の総括の中心から、11・16、17斗争の組織化の過程で萌芽的に準備した飛躍は、臨戦体制的な側面をも持ちつつ、画期的な飛躍の方向であったのであり我々が今春4・28斗争以来の党内斗争の蓄積の上に立ってなお10・21斗争の敗北を経験しなくてはならなかったほどの重さを持っていた。だから我々の11・15再度の霞ヶ関中権斗争の提起に対して、諸党派が羽田斗争を主張したのも、再度の中央権力斗争には恒常的武装斗争から内戦を展望した革命的、党組織論的飛躍が要求され、このことをなしえず10・21斗争を総括しえない故であり、「やりやすい斗争」としての羽田斗争に流れたのである。そして我々は唯一、10・21を総括しつつも、いまだその総括を単独の軍団による圧倒的な路線の貫徹として物質化しえない段階で、「恒常的武装斗争の型」の創出を獲得目標に、羽田斗争にプロ独派の刻印を押すべく闘ったのであった。闘いの結果は明白であった。10・21斗争を

「肉弾の思想」「警察国家粉碎」「機動隊せん滅」を掲げて、それなりに闘った中核派は、「勝利」を語ったものの、いかなる意味での勝利なのか革命的に明らかにすることができなかった結果、11月には武装宣伝的な闘いを組織し得たにすぎないし、他党派は蒲田に到達することさえできなかった。我々のみがマスコミ形成的斗争ではなく、機動隊との恒常的武装斗争の一時代を連続的に内戦へと組織していく軍事戦略へと接近し、16日蒲田における最大の部隊として登場し得たのである。「赤軍派のような部分を生み出したこと、8派の統一戦線の中軸であったブンドの壊滅的狀態をもたらしたことは、武装斗争路線が有害だったことを示しているのではないか」(11・18朝日)などという親切ごかしの評論とは全く裏腹に、我々は再び反帝統一戦線を領導できる地点に立ったし、我々の正規軍建設にけん引された他党派の即成軍団の形成は、政党内統一戦線と党派斗争の新たな再編をもたらさざるをえないであろう。階級斗争の次の時代が内戦という未曾有の飛躍であるからこそ、10・21から11・16、17の過程を通して一挙的な転換は形成されず、階級斗争はまずもって革命主体の転換の完成を要求してゆるやかに数歩前進した。我々と国家権力との死闘は隠された地点で煮つくりながら、70年4・28から6月へと向っているのである。しかし、我々はここで単純に「更なる闘い」を叫ぶことはできない。なぜなら70年4・28から6月の闘いは70年代階級斗争の展望、特に70年代前半の朝鮮危機に対する世界革命戦争の戦略を決定的に要求するからであり、この10・21、11・16、17斗争の徹底した総括を定着させる作業を抜きにしては語りえないからである。だから我々がむしろ総括しなくてはならないのは10・21斗争の敗北であり、10・21斗争の敗北にもかかわらず、その敗北の総括の中から我々が11・16、17斗争を組織し抜くことによって、いまだほんの端初でしかないけれども、恒常的武装斗争へと足を踏み入れ、ほんの一步でしかないけれども世界革命戦争の党建設へと接近しえたことの根拠である。10・21斗争を闘った際には、我々はいまだ階級斗争の具体的な段階をつかみることが出来ていなかったし、「内戦」「蜂起」がどのようなものとして組織されるのかについても多くの不明確さを残していた。そしてこのことは単に党の革命の不充分性として一般的に総括されてはならず、そうした不充分性に表現される戦略論―党組織論自体の限界としてあったのである。10・21か

ら11・16、17の4週間の過程で、我々は大きな飛躍を遂げているのであり、そのことによって10・21までの6ヶ月の党内斗争の蓄積を結実させることができたのである。我々はこの「11月斗争の組織化の過程で萌芽的に形成されたもの」を臨戦体制の中でのみありえたものとして決してならないし、戦略論―党組織論的に結実させ、党の組織構造の中に定着させなくてはならないのである。この定着化の作業の過程こそ、恒常的武装斗争の路線を開花させようということである。

国革命的左翼など、の世界戦略を組み入れたかたちで現代過渡期世界を分析することができるのである。世界プロレタリア独裁へ向けたプロレタリアートの団結形態が自然発生的に形成されることは決してありえないし、国際反革命と人民戦線派との血みどろの党派斗争が要求されるということは、一貫して武装蜂起―世界革命戦争へ向けて、プロレタリアートを組織し、武装させていくための党の武装を要求する。軍事を組織し、世界プロレタリアートの団結形態を党組織のうちに準備しえない党派は、ブルジョワジーの暴力の前に自らの政治主張を貫徹することができず解体せざるをえないのである。10・21斗争の敗北があらためて我々に突きつけた問題はこのことであり、「中央権力斗争―マッセスト」は、決してあるがままのプロレタリアートの団結形態―斗争形態の延長上に展開されるのではなく、革命党が武装蜂起―世界革命戦争へむけて、プロレタリアの新たな団結形態―政治的統一戦線を作り出していく媒介としての斗争戦術である以上、それが単なるカンパニアや山猫ストから自己を区別すればするほど、国家権力との真向からの対決が要求され、恒常的武装斗争へと発展していかざるをえないし、この斗争のけん引はまずもって党が武装し、党の武装を軸にして全人民の武装を組織化していくことによつてなされるということであった。10・21斗争における機動隊の首都制圧、大阪中電での公社・組合・官憲の一体となった反革命は、冷徹にこの事実を提出したのであり、恒常的武装斗争から内戦を切り開いていく、我々の軍事戦略が本格的に要求されるに至ったのである。そしてこの現実の斗争からの要請としての軍事戦略の要請と、先に述べた過渡期世界論の世界党への革命主体の接近を媒介にした再構築の課題とは一つのことであり、我々は具体的に綱領を問題にしうる地点に到達しているのである。

「中央政治斗争―拠点政治スト」によって「訪米不可能な政治危機を作り出す」という安保決戦論を軍団をロクに組織することもしないで唱えていたのだが、10・21斗争の敗北を「くりのべられた決戦」として、全く客観主義的に総括することによって完全に方向を見失ってしまったのである。だから彼等は青解派などと共に、警備の薄い11・13に斗争を組織することによって、実質的には11・16、17斗争から逃亡せざるをえなかったのである。なぜ彼等がこのような破産を遂げざるをえなかったのかは、直接には軍団を組織しえなかったということだけども、戦略的根拠は「攻撃型政治斗争」というかつての我々の8・3論文のやき直しのような戦略論なのであって、この党組織論なき危機論としての戦略論の展開からは、党が軍を建設する意味や、軍事戦略の確定の意味など決して出でこず、危機の連続的な展望にすべてを期待してしまっているのである。この諸君の左傾化は学生運動における全共斗運動の昂揚の中でもたらされたのだけれども、我々が彼等の破綻から学ぶとすれば、このような政治過程論的な傾向は、大衆斗争の昂揚の中で絶えず再生産されることであり、原理的に否定しても何の役にも立たず、党組織論を結実させるかたちで世界革命戦争の戦略を確立することによってしか克服できないことである。9回大会はこの作業に接近しつつも、いまだその過渡期世界論の中に客観主義的の残滓を含んでいたし、このことは10・21に至る党の革命の不充分性、「中央権力斗争―マッセスト」「内戦の突破口」の規定の仕方の不正確などを理論的には基礎づけていたのである。

このような課題を解決する作業に、我々は直ちに入っていくなくてはならない。具体的にはこの作業は全国反帝戦線の建設として結実されなくてはならない。全国反帝戦線の建設によって正規軍は基礎づけられるのであり、党の革命はまず完了するのである。全国反帝戦線―RGRの定着は全国中央集権党としての、わが同盟の組織構造の上から下までの変革を要求するのであり、党内論争の組織化を抜きにしてはありえないのである。我々はこの事業を遂行しつつ、恒常的武装斗争を組織し抜き、70年代階級斗争を世界革命戦争へと領導するであろう。

ここでは過渡期世界論を全面展開することはできないが、少なくとも強調されなくてはならないのは過渡期世界論を単にロシア革命の成功による帝国主義の危機―世界革命の条件の形成のみから説きおこすのではなくて、世界党(第三インター)の登場とその世界戦略を媒介にして、より主体的なものとして説明する視点である。この視点からは、国際反革命同盟の成立をより具体的なものとして反ファシズム統一戦線その他と関連して明らかに出来るし、中ソ、キューバ、ベトナム、帝国主義

〔註解〕

第一章

\* 九回大会については共産主義13号参照。  
\* 第2回国際反帝会議は、米ブラックパンサー党、SDS、独SDS代表とともに非公然会議のみ開催。  
\* \* 山代論文については理論戦線8号参照。

第二章

\* 「地域労学評議会運動」「地区」「全国ソビエトML」については第四、五、七、八章参照。  
\* 地区軍団は正規軍―反帝戦線形成の過程で、SL―KIMが単一の軍団へと統合されねばなら  
ないところから、過渡的に形成され、正規軍―反帝戦線へと発展した。第四、五、七、八章参照。

第三章

\* この我々の「有利さ」にもかかわらず、10・21の敗北を結果したこととの総括は第四、五、七章参照。

第四章

\* RGとは共産主義突撃隊―党の正規軍のこと。

第六章

\* 臨時革命政府については、赤軍派の自然成長革命論と異なり、この問題は、①戦争と武装の政治的性  
格との関連で、②統一戦線の質とそれを規定する党の革命との関連で明らかにされねばならない。な  
お第七章を併せて参照。

1969年12月9日発行

革命の軍隊・党の革命

共産主義者同盟

東京都千代田区三崎町2の7の6

滝沢ビル内・戦旗社 気付

TEL (264) 2961

定価 250円 (〒 円)

☆反帝闘争を  
プロレタリア日本革命へ！  
☆プロレタリア世界革命の旗の下  
共産主義者同盟に結集せよ！  
共産主義者同盟

戦闘的労働者・学生の週刊全国政治新聞

戦旗

戦旗社

東京都千代田区三崎町2-7-6 滝沢ビル内電話代表  
03 (264) 2961 振替 東京 26110  
大阪支局大阪市福島区鷺洲  
本通り1-16 北村ビル  
電話 06 (458) 6597  
京都支局京都市左京区下鴨  
宮崎町128-29 (075) (701) 0025  
名古屋支局052 (732) 3553

一部 20円 / 購読料一部20回 500円 (〒共)

共産主義13号

共産主義者同盟  
第九回大会報告決定集

I 革命闘争の時代の開始と共産主義者

一、八回大会以降の情勢の進展とわが同盟の革命的試練  
二、「革命闘争の時代」と階級形成

三、革命闘争―党闘争の時代  
四、政治過程論と党建設

II 過渡期世界と世界一国同時革命  
III 過渡期世界における階級危機と世界革命への戦略的展望

VI 国際階級危機の前期的成熟と安保決戦

一、国際階級危機の前期的成熟  
二、戦略・運動・組織論の確立と安保決戦

V 世界革命戦争の軍団建設と同盟の党的飛躍

一、軍事・軍事と党  
二、世界党建設に向けて

IV 同盟と反帝統一戦線・ソビエト運動

申込は、当社、又は、東京／ウニタ書店(神田) 鈴木書店(本郷)、文献堂(戸塚)  
芳林堂(池袋)、名古屋／名古屋書店(駅前)、京都／三月書店、大阪／曾根崎書店  
東京都千代田区三崎町二丁目一七六 滝沢ビル内  
〇三二六四二九六一 振替/東京二六一〇

戦旗社

共産主義者同盟理論機関誌 250円

定価 250円